

鹿兒島県史料

忠義公史料

第六卷

題
字

鎌 鹿
田 児
要 島
人 県
事

例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「忠義公史料」（初稿本を含む一九〇冊）を底本とし、これを「鹿児島県史料忠義公史料」全七巻（当初八巻予定）として刊行するものである。時代の範囲は、安政六年から明治五年に至る十四年間で、第六巻は明治元年十月から明治四年一月の内容を収めて刊行した。

一底本の巻ごとに頁を改め、上段の頭初にその表紙を記載し、扉については表紙のわきに註記した。

一明治元年十月・十一月分と明治二年・三年分は、底本が欠本になっている。欠本の部分については、東京大学史料編纂所蔵の忠義公史料の稿本によって補正し、補正箇所の頭初に稿本の表紙を掲げて、表紙のわきに〔稿本にて補正〕と註記した。

一編集の体裁は、原則として原編者の体裁によったが、一部記載の位置を変更したものもある。また、ほとんどの見出しは原編者が掲げてないので、校訂者が新しく掲げた。

一原本などの現存するときは、努めてそれと対比して原本どおりに校訂し、文末に〔〇〇所蔵本にて校訂〕などと註記した。

一刊行巻ごとに、見出しに一連番号を附した。一つの見出しが数種の内容を含むときは、小番号を文首に附した。

一固有名詞については、できるだけ正字を用いることにした。また、特殊文字のノ（しめ）は、そのまま用いた。

一仮名は、原本または底本の体裁のとおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。

一平出・抬頭および闕字は、原本または底本の体裁によった。闕字のときは一字あけにした。

一日記・新聞・会議録および但書は、原則として底本の体裁によった。

一地図および花押は、写真等により原本または底本のとおりにした。

例言

- 一 原註および原編者註（ ）は、できるだけ右脇に移したが、長文のものなどは底本の体裁によった。
- 一 新に註を附するときは、〔 〕を附して、原編者の註と区別した。
- 一 人名および地名については、国内国外を問わず適宜傍註を附した。その際、藩の呼称は維新史附録（維新史料編纂事務局編）により統一した。
- 一 人名等については、原編者の明らかな誤記は、校訂者が訂正した。
- 一 本文には適宜読点を附し、人名（外国人を除く）・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点を附した。
- 一 朱書は、その部分を「」で示し、〔朱〕と傍註を附した。
- 一 頭註および付箋は、「」で行間に示し、〔頭註〕〔付箋〕と註記した。ただし、後筆のものは削除した。
- 一 欠所部および解説困難な箇所の原編者註である本マ、と虫喰の箇所は、□で囲み、本マ、・虫喰または〔○○カ〕と傍註を附した。
- 一 文意の通じない字または箇所には、〔ママ〕または〔衍カ〕・〔○○カ〕と傍註を附した。
- 一 点線……の箇所は、底本の体裁によった。
- 一 原編者が目録等に掲げてある記・附記、参照・参考の文字は、第四巻に従って記・参照に統一した。
- 一 重複して掲げてある史料については、これを削除した。
- 一 欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。
- 一 見返しに、東京大学史料編纂所所蔵「薩藩勝景百図全五巻」の内より城下および山川を掲げた。

忠義公史料 第六卷 目次

例言

明治元年(戊辰)

一	大総督府ヨリ本藩等五藩へ長日月参戦ノ功ヲ感賞シ凱陣休戦ノ旨令セラル	十月	一
二	藩庁ニテ管内米穀密輸出取締ノ事ヲ達ス	十月朔日	一
三	本藩兵若松城下撤退ノ概況島津伊勢日記	十月	二
四	毛利高謙瓦ヲ献シテ豊國社造営ノ用ニ充テントコトヲ請ヒ許可セラル	十月二日	三
五	大総督府安藝・備前二藩兵及ヒ参謀萬里小路ヲ遣シテ水戸ノ賊兵ヲ追討セシム	十月	五
六	林忠崇仙臺ノ老臣ニ就キテ平潟口総督ノ軍門ニ降ル	十月	八
七	藩庁開拓方発行ノ銅判摺紙幣通用ノ件ヲ布達ス	十月三日	九
八	車駕入京ノ日近キヲ以テ七日ヨリ五日間外国人ノ大磯東京間ノ遊歩ヲ停ム	十月四日	九
九	車駕岡部駅到着時水戸ノ警報達シ長州藩兵ノ東下ト佐賀藩兵ノ警衛ヲ命ス	十月	一〇
一〇	田村邦榮平潟口総督ノ軍門ニ降ル	十月五日	一〇
一一	牧野忠訓越後口総督ノ軍門ニ降ル	十月	一一
一二	紙幣ノ通用ヲ阻碍スル者ヲ搜捕セシメ諸藩ニ普ク紙幣ヲ通用スヘキヲ達ス	十月七日	一三
一三	鎮将府弁事・判事・史官ニ令シテ出征諸藩ノ戦功賞格ノ意見ヲ上ラシム	十月	一三

- 一四 島津式部以下ニ慰勞品ヲ賜フ…………… 一六
- 一五 白川口本藩出軍ノ諸隊長ニ總督正親町中将ヨリ感狀並褒詞ヲ賜フ島津伊勢日記 十月…………… 一七
- 一六 藩庁医学院ノ役名及ヒソノ俸祿ヲ定ム 十月…………… 一九
- 一七 牢舎者衣食支弁方ノ規程ヲ達ス 十月八日…………… 二〇
- 一八 御諱惠・統・睦三字欠画ノ制ヲ定ム 十月…………… 二一
- 一九 出征諸藩ニ令シ小藩ノ其宗藩若クハ大藩ニ隸屬セシ者ハ其功勞ヲ精覈セシム 十月…………… 二一
- 二〇 朝廷ヨリ海岸要所ニ燈台築造場所選定ノ為汽船佐多岬へ出張ノ旨藩内ニ達ス 十月九日…………… 二二
- 二一 諸侯ノ多ク馳從ヲ率ユルヲ禁シ庶民モ貴人ニ礼ヲ失フコト勿ラシム 十月…………… 二二
- 二二 古金銀ヲ藏スル者金・銀座両局及ヒ商法会所ニテ通貨ニ兌換セシム 十月十日…………… 二三
- 二三 英・佛兵隊等神奈川駅傍芝生村ニ車駕ヲ拜シ各国艦船祝砲ノ儀ヲ行フ 十月…………… 二四
- 二四 奥羽鎮撫總督九條道孝・副總督澤為量等凱陣ノ途ニ就ク 十月…………… 二六
- 二五 藩庁先月廿二日會津降伏ノ事ヲ達ス 十月十一日…………… 二七
- 二六 車駕神奈川駅ヲ發シ品川駅ニ抵ル 十月十二日…………… 二九
- 二七 榎本武揚等船艦ヲ率イテ蝦夷ニ走ル 十月…………… 二九
- 二八 車駕東京ニ抵リ大總督等奉迎ス 十月十三日…………… 三〇
- 二九 江戸城ヲ東京城ト改ム 十月十三日…………… 三〇
- 三〇 薩摩・安藝ニ藩兵ノ征討軍勞ヲ慰シ酒肴ヲ賜フ 十月…………… 三一
- 三一 千種有任ヲ勅使トシテ病院ニ差遣シ兵士ノ創痍者ヲ慰問ス 十月…………… 三二

三三	奥羽・越巳ニ平定セシヲ以越後口総督府諸軍ヲ慰勞シ漸次其ノ兵ヲ班サシム	十月	……	三二
三三	五代友厚ヨリ小松清廉へ大坂運上所ノ名称變更ニ関スル書翰	十月十五日	……	三五
三四	失踪中ノ元御小姓与萩原強之丞會津ニテ戦死セシニヨリ特別ニ葬式料ヲ下賜ス	十月十五日	……	三六
五日	……	……	……	……
三五	東北平定ニ付藩兵ノ撤還ヲ命ス	十月	……	三六
三六	島津忠義近日中ニ上京スヘキ旨ヲ達ス	十月十六日	……	三七
三七	天皇万機ヲ東京城ニ親裁ス	十月	……	三七
三八	鎮将府ヲ廢シ三條實美輔相故ノ如シ	十月十八日	……	三九
三九	大総督府参謀伊地知正治ノ戦勞ヲ慰シ其ノ参謀ヲ罷ム	十月	……	四〇
四〇	藩庁目下ノ急ヲ救フ為仮病院ヲ製藥方ニ設ケルコトヲ達ス	十月	……	四〇
四一	蜂須賀茂韶・東久世通禧・大久保利通等ヲ従来通本官ヲ以東京ニ在勤セシム	十月	……	四一
四二	會津並其ノ附近ノ戦鬪ニ於ケル薩藩死傷者ノ届出ヲナス	十月	……	四一
四三	藩庁七島並口永良部島へ漂着ノ英人並朝鮮人ノ処置方ヲ達ス	十月二十一日	……	四四
四四	東征大総督熾仁親王上表シテ賊徒平定ヲ以其任ヲ解カンコトヲ請フ	十月二十三日	……	四五
四五	私ニ貨幣及紙幣ノ価格ヲ高低スルヲ禁ス	十月二十三日	……	四五
四六	軍務官ニ命シテ海陸軍制ヲ確定シ海軍局ヲ東京築地ニ置ク	十月	……	四六
四七	薩州兵隊等ノ征討軍ヲ慰ス	十月	……	四六
四八	清水谷公考青森へ転陣シ榎本武揚五稜郭及ヒ箱館ニ分拠ス	十月	……	四八

- 四九 藩庁島津忠義婚儀ノ期日ヲ達ス 十月二十六日…………… 四八
- 五〇 藩治職制ヲ定ム 十月二十八日…………… 四九
- 五一 薩藩士平田助左衛門ニ舍密局掛ヲ命ス 十月…………… 五九
- 五二 東征大総督宮熾仁親王其ノ任ヲ解カレ錦旗・節刀ヲ奉還ス 十月二十九日…………… 六〇
- 五三 霧島神社修補ニ付修補料金ノ寄進ヲ達ス 十月…………… 六一
- 五四 薩州藩・長州藩兵ノ軍勞ヲ慰シ酒肴ヲ賜フ 十一月…………… 六二
- 五五 薩藩兵重創者ノ病情ヲ慰シ物ヲ賜フ…………… 六二
- 五六 凱旋薩州兵ノ勲勞ヲ賞慰シ酒肴ヲ賜フ…………… 六三
- 五七 創傷者ヲ慰撫シテ物ヲ賜フ 十一月…………… 六三
- 五八 凱旋薩州藩兵ノ勲勞ヲ賞慰シ酒肴ヲ賜フ…………… 六五
- 五九 同上…………… 六五
- 六〇 戦死者招魂祭舉行ニ付諸藩へ沙汰書…………… 六五
- 六一 島津忠義上京参内シ藩兵賞慰ノ恩ヲ謝ス 十一月…………… 六五
- 六二 薩州兵凱旋者ノ勲勞ヲ賞慰シ創傷者ヲ慰撫セラル 十一月…………… 六六
- 六三 藩庁賄賂類似ノ行ヒヲ禁ス 十一月十三日…………… 六七
- 六四 家老以下ノ役料高ヲ減シ之ヲ軍費ニ充用スヘキヲ達ス 十一月…………… 六七
- 六五 島津忠義凱旋滯京中ノ諸兵隊ニ慰勞ノ酒肴料ヲ下賜ス…………… 六八
- 六六 島津忠義ニ留守中屢々参上シテ心附ノ件忌憚ナク言上スヘキヲ達ス…………… 六八

目 次

六七	曩時朝廷ノ徴士参与ヲ命セラレタル五士ヨリ藩ノ俸禄返上ノ願出指令ヲナス	十一月十日	六九
九日
六八	京都本宮ヨリ国許陸軍所へ凱陣諸隊ノ事蹟ヲ詳細ニ調査スヘキヲ照会ス	十一月十九日	六九
六九	藩庁諸座引付合ノ儀取扱嚴重ニ相済マセ速ニ勘定局ニ報告スヘキヲ達ス	十一月二十三日	七〇
七〇	凱旋薩藩兵ノ勲勞ヲ慰シ創傷者ヲ慰撫ス	十一月	七〇
七一	藩庁半朱銭ノ通融ヲ禁シ新銭ト引替フヘキヲ達ス	十一月二十六日	七一
七二	島津久光學問ノ標準ヲ示シテ師員ニ諭シ藩内ニ布達ス	十一月二十八日	七一
七三	藩庁諸道通行ノ節新規定ノ印鑑ニテ通行ノ旨ヲ達ス	十一月晦日	七三
七四	参与岩下方平当分刑法官出仕ヲ命セラル	七三
七五	城下ニ出軍負傷兵ノタメ速ニ病院建設ニ着手スヘキヲ達ス	十一月	七三
七六	島津久治ヨリ小松清廉ニ帰京ヲ命ス	七四
七七	薩藩士喜入嘉次郎等外国人殺害者ヲ寛典ニ処スヘク建言ス	十一月	七四
七八	大楠神社御鎮座祭式次第	十二月一日	七七
七九	凱旋兵へ久光名代御目見目錄拝領仰付達書	十二月四日	七九
八〇	勅使大廟参拝布告書	十二月	七九
八一	東北諸藩へ金札割渡御沙汰書	十二月	八〇
八二	皇学所開講ニツキ入学奨励御沙汰書	十二月	八〇
八三	大津県へ沙汰書	十二月	八一

八四	郡奉行達書	十二月	八
八五	大久保一蔵ヨリ桂右衛門へ書翰	十二月十六日	八一
八六	公議所開議期日云々布告書	十二月	八二
八七	太守公及毛利少将・池田中将九門内乗馬御免ノ沙汰書	十二月	八三
八八	府藩県ノ殉難者遺族取調へ沙汰書	十二月	八三
八九	長崎在勤五代才助鹿兒島ニ書ヲ贈ル(文久二年九)	十二月二十一日	八四
九〇	風俗取締方藩達	十二月二十二日	八五
九一	凱旋兵へ酒肴ヲ賜フ達書	十二月	八五
九二	數寄屋付士同仕坊主勤務方藩達	十二月二十三日	八六
九三	振遠隊戦死者招魂場へ葬送式	十二月	八六
九四	凱旋兵葬送参集達書	十二月	八八
九五	昌平学校開校ニツキ入学奨励達書	十二月	八八
九六	大久保利通日記	十二月二十九日	八八
九七	島津忠義上京沙汰書	十二月	八八
九八	出隊居地名書	十二月	八九
九九	孝明天皇三周御忌辰御参拜ニツキ神事達書	十二月	九一
一〇〇	先帝三周御忌辰神祇式被仰出書	十二月	九二
一〇一	女御入内立后被仰出書	十二月	九二

目次

一〇二	女御入内立后ニツキ五等官以上参朝スヘキ布告書	十二月	九二
一〇三	同上ニツキ宮・堂上へ達書	十二月	九二
一〇四	諸藩へ地図明細取調差出ス可キ達書	十二月	九三
一〇五	諸街道往来印鑑云々届書	十二月	九三
一〇六	親王方九門内乗馬通行被免達書	十二月	九三
一〇七	三等官以上并権弁事九門内乗馬被免達書	十二月	九四
一〇八	京都府へ沙汰書	十二月	九四
一〇九	公議所開設ノ沙汰書	十二月	九五
一一〇	佐竹中将へ沙汰書	十二月	九五
一一一	世襲士族	十二月	九五
一一二	佛・米・葡・魯・瑞・丁・白・孝各国岡土外国管事役所司長ニ贈ル書	十二月	九六
一一三	イタリア船 <small>号</small> 船ニ於テ人夫死去ノ裁判	十二月	九七
一一四	長崎府外国局司長揭示		九八
一一五	外国船ヨリ出入品高目録	十二月	九九
一一六	招魂祭施行ニツキ諸追悼和歌	十二月	一〇二
一一七	海舟日記	十二月	一〇九
一一八	大久保利通日記	十二月	一〇九
一一九	東京横濱ノ新聞抄	十二月	一一〇

一一〇	道島家記	十二月	一一一
一一一	舊邦秘録	慶應三年十二月	一一一
一一二	忠義公ノ勤功ヲ賞シ御劍一振ヲ賜フ御沙汰書	十二月	一一二
一一三	薩藩戦死者ヘ金五百両ヲ賜フ沙汰書	十二月	一一二
一一四	無名書翰	十二月二十日	一一三
一一五	薩藩ヘ伏見表兼勤巡邏達書	慶應三年 十二月二十二日	一一三
一一六	松平阿波守外九藩家臣言上書	十二月十二日	一一三
一一七	尾張・越前上申書並ニ徳川家ヘノ達書	十二月	一一五
一一八	忠義公歳暮御下賜品云々達書	一一五

明治二年 (己巳)

一一九	島津忠義藩政急速所置ノ為帰国ス	正月朔日	一一七
一二〇	東京神田橋御門内旧庄内酒井忠篤上リ屋敷ヲ家作共忠義ニ下賜セラル	正月	一一八
一二一	藩船三邦丸朝廷御用ヲ命セラレタルニ付テ願書	正月八日	一一九
一二二	五代友厚ニ伊地知貞馨ノ上京迄軍艦買上御用掛兼勤ヲ命ス	一二〇
一二三	旧幕府ヨリ農商民ニ与ヘタル称氏・佩刀等ノ特典ヲ廃止ス	正月	一二〇
一二四	上地ヲ命セラレタル諸藩ノ屋敷地ニ付テ新拝領又ハ未拝領ヲ上申スヘキヲ達ス	正月	一二〇
二十日	一二〇

一三五	島津廣兼等ニ去春以來畿内及東北諸道出征者ノ戦功調査ヲ命ス	正月	一二二
一三六	大小侯伯及中下大夫・上士ニ三月十日ヲ限り東京参着ヲ命ス	正月	一二三
一三七	船艦購入ノ節ハ諸開港場府県ノ指揮ヲ受クヘキヲ達ス	正月	一二五
一三八	冲直次郎ニ徵兵大隊司令ヲ命ス	正月	一二五
一三九	西郷・吉井・伊地知ヘ早々上京ノ旨達ス		一二五
一四〇	北越ヨリ東京ヘ引揚ケタル薩藩兵ヲ半分帰国休兵セシムコトヲ達ス		一二六
一四一	公議所開会期日并公儀人ノ人数・資格等ノ再達	正月	一二八
一四二	薩・長・土三藩九門警衛ノ願書及ヒ指令書	正月	一二九
一四三	大阪府判事税所篤満ヲ河内県知事ト為ス		一二九
一四四	島津忠義山口・佐賀・土佐ノ藩主ト連署シテ版籍奉還センコトヲ請フ	正月	一三〇
一四五	各藩蒸気船・帆船等東京・横濱出入港ノトキハ鑑札ヲ受クヘキコトヲ達ス	正月	一三一
一四六	海外渡航者ノ印鑑改定ニ付キ在外者ノ氏名・年齢等ヲ二月中ニ差出サス	正月	一三二
一四七	赤塚真成ニ短刀料百両下賜並ニ中井弘徵士外国官判事ニ任セラル	正月	一三三
一四八	藩庁番頭及ヒ同嫡子ノ百官又ハ関東百官ヲ名ニ用フルヲ禁スルコト等ヲ達ス	正月二十	一三三
	四日		一三三
一四九	領内ノ種子油不足ニヨリ尔来菜種子ノ輸出ヲ禁ス	正月二十六日	一三四
一五〇	瑞典・那耳回国及ヒ是班牙国ト条約締結ノ旨ヲ達ス	正月	一三四
一五一	金札諸上納ニハ正金百両ニ付百二十両ノ相場ヲ以テ上納スヘキヲ達ス	正月	一三五

一五二	勅使柳原前光・副使大久保利通ヲ遣シ久光ノ勤王ノ功ヲ慰シテ上京ヲ促ス	正月	一三五
一五三	小松清廉邑地ヲ返上シ家格ヲ平士ニ列セラレンコトヲ願出ツ	二月四日	一四〇
一五四	京都ニアル諸藩邸地ノ荒蕪セシモノノ処置ヲ達ス	一四一
一五五	諸藩公議輿論ヲ採用シ下情上達ヲ計ル為議事ノ制度ヲ確立スヘキヲ達ス	一四一
一五六	東京深川元伊達宗基上ケ屋敷家作共島津忠義ニ下賜ス	二月七日	一四二
一五七	谷村昌武富士艦船將ヲ免セラレ徵士ヲ以武蔵艦船將ヲ命セラル	二月	一四三
一五八	酒田表出張ノ堀為影御用ニ付出張ヲ免セラル	二月	一四三
一五九	朝廷大山綱良・村田経芳・黒田清隆ヲ東京ニ召ス	一四四
一六〇	田町邸従前ノ通り下賜セラル	二月	一四四
一六一	宸翰拝戴ニ付藩士ヘ祝料並休暇ヲ与フ	二月十七日	一四五
一六二	薩州藩大宮御所ノ警衛ヲ免セラル	一四六
一六三	外国人ヨリ貨幣借入ノ事ニ付達書	一四六
一六四	島津忠義本城ヲ退キ通勤シテ政務ヲ執ルコトヲ達ス	二月二十日	一四六
一六五	藩治職制ノ細則及ヒ付帯ノ藩達	二月	一四七
一六六	勅使帰京ニ付奉送ノ次第ヲ達ス	二月二十一日	一四四
一六七	脱賊追討ニ付薩州藩出兵青森ニテ総督ノ指揮ヲ受クヘキヲ令セラル	二月	一五四
一六八	東幸中太政官ヲ東京ニ移シ京都ニハ留守官吏ヲ置キ岩下方平ヲ留守次官ニ任ス	一五五
一六九	公議所ヲ開キ制度律令ヲ議セシムルノ詔書ヲ下賜セラル	二月	一五五

目 次

一七〇	諸侯ノ妻女ノ在京セルモノヲ取調ヘ触頭ヨリ届出ツヘキヲ口達ス	二月	一五六
一七一	長州藩使杉孫七郎忠義ニ謁シ使命ヲ陳フ	二月	一五七
一七二	西郷隆盛藩庁ヨリ参政ヲ命セラル	二月	一五七
一七三	島津久光病ヲカメテ汽船三邦丸ニ駕シ鹿兒島ヲ発シテ上京ノ途ニ就ク	二月	一五七
一七四	小牧昌業議政官史官試補ヲ命セラル	二月	一五八
一七五	軍艦武蔵焼亡ニ付船將谷村昌武ノ届書	二月二十九日	一五八
一七六	諸藩領地ノ歳入案書ノ通り認メ届出ツヘキヲ達セラル	二月晦日	一六〇
一七七	黒田清隆箱館追討ニ付総督清水谷公考ノ参謀ヲ命セラル	二月	一六四
一七八	桂久武ニ当分ノ間執政心得ヲ命ス	二月晦日	一六四
一七九	木場清生徴士大坂府判事ヲ命セラレ從五位下ニ叙セラル	二月	一六四
一八〇	徴士・雇士ハ諸藩ヘ沙汰ノ上任命シ雇士ハ行政官ノ認可ヲ受クコトヲ達ス	二月	一六五
一八一	藩庁負傷者療養料ノ額ヲ定メテ支給スヘキヲ達ス	三月朔日	一六六
一八二	島方居住願出ノ者アル時ノ処理法ヲ達ス	三月朔日	一六六
一八三	久光参内シテ天杯ヲ拝領シ且禁中足袋并ニ杖ノ御免アリタリ	三月	一六七
一八四	島津久光議定出仕ヲ命セラル	三月四日	一六七
一八五	俸禄其他出納ニ関スル通達ハ証印ヲ用フヘキヲ達ス	三月四日	一六七
一八六	藩庁諸官衙ノ休日ノ変更等ヲ達ス	三月五日	一六八
一八七	島津久光叙任宣下ヲ蒙リ打柏ヲ拝領ス翌日官位ヲ辞退スレトモ許サレス	三月	一六八

- 一八八 島津久光・毛利慶親連署建言 三月 一六九
- 一八九 西郷従道山縣有朋ト共ニ魯・佛二国ノ地理形勢ノ視察ヲ命セラル 一七〇
- 一九〇 車駕再ヒ東幸發輦相成ル 三月七日 一七〇
- 一九一 藩庁造士館ヲ廢シ和漢洋ノ三学局共役員ヲ免シテ学館ト唱フヘキヲ達ス 三月七日 一七一
- 一九二 藩庁廢官者ニ全禄ヲ給スルコトヲ達ス 三月七日 一七一
- 一九三 伝事方ヨリ諸局ノ勤務者明細表ヲ差出スヘキコトヲ達ス 三月七日 一七一
- 一九四 軍艦武蔵丸罹災後ノ処置方ヲ軍務官ヨリ命令ス 三月 一七二
- 一九五 海軍軍艦運送船四隻ヲ發セシメ陸軍ニ応援シテ箱館ノ賊ヲ討タシム 一七三
- 一九六 藩庁各衙ノ知照会同ノ手續ヲ達ス 三月九日 一七四
- 一九七 薩・長両藩ニ東幸留守中京地ノ警衛ヲ達ス 一七五
- 一九八 島津忠義大久保利通ヲ召シ藩政改革ノ功ヲ賞シテ短刀ヲ与フ 三月十日 一七五
- 一九九 藩庁藩内地頭ノ欠員アル時ハ之ヲ伝事ニ管セシムヘキヲ達シ直ニ之ヲ実行ス 三月十日 一七五
- 二〇〇 藩庁医学院ヲ廢シ教授以下ノ職ヲ免シ医院ト称スヘキヲ達ス 三月十日 一七六
- 二〇一 浮浪人取締達書 三月 一七六
- 二〇二 藩士森時之助東京府大病院常務方ヲ命セラル 三月 一七七
- 二〇三 東京ニ於テ明屋敷ノ拝借又ハ添地ノ願出ヲナスニ添地トシテ下賜セラル 一七七
- 二〇四 言路洞開上下貫徹ノ為待詔局ヲ設ケ庶民ニ至ルマテ意見ヲ陳述スヘキヲ達ス 三月十日 一七九
- 二日 一七九

目 次

二〇五	石神良策一等医学校医師五局取締ニ任セラル	三月	一八〇
二〇六	島津久光京都ヲ出発シ大坂ニテ三邦丸ニ乗艦着魔ス	三月	一八〇
二〇七	西洋式蒸気船並風帆船当時所持分調査シ雛形ノ通り巨細届出ツヘク云々達書	三月十九日	一八一
二〇八	東京芝田町町並抱屋舖地続預地共下邸トシテ下賜セラル	三月	一八二
二〇九	藩庁諸道関門廃止ノ朝命ニ付イテ心得違無キ様注意スヘキ旨ヲ達ス	三月十九日	一八三
二一〇	浮浪人取締達書ニ基キ届出ヲナス	三月二十日	一八三
二一一	白山佛国帝ヨリ薩摩藩公ヘノ贈品ヲ鹿兒島ヘ持チ来リテ島津忠義ニ謁ス	三月	一八六
二一二	東京着輦ニ付奉迎ノ上参内シ祝詞ヲ述フヘキヲ達セラル	三月	一八七
二二三	御再幸ニ付聖慮ヲ奉体シ又外国人ニ対シ粗暴ノ所為ヲナスヘカラスヲ達ス	三月二十四日	一八九
二二四	島津忠義夫人産後病氣ノ為逝去セラル	三月二十四日	一八九
二二五	藩治職制ニ拠リ新ニ地頭并ニ副役ヲ置ク	三月二十四日	一九三
二二六	在米中ノ薩藩士吉原重俊以下三名ニ改メテ留学ヲ命スル旨ヲ達ス	三月二十四日	一九四
二二七	藩庁島津忠義夫人逝去ニ付戦亡者招魂祭延期ノ旨ヲ達ス	三月二十六日	一九五
二二八	藩庁魔人トナリタル者ヲ調査シ軍務局ニ申告スヘキ旨ヲ達ス	三月二十七日	一九五
二二九	隠居・嫡子等ノ官位ニ就キシ年月日等雛形ニ拠リ取調ヘ差出スヘキヲ命ス	三月二十七日	一九五
二三〇	神奈川県知事寺島宗則ヲ参与ト為ス	三月二十七日	一九六

二二二	軍務官判事森有禮租税ハ米金何レニテモ随意ニセン事ヲ公議所ニ建議ス	三月	一九七
二二三	太政官ヨリ戸籍取調・小学校設立・商法司廃止・徴兵帰休ノ件等ヲ達ス	三月	一九八
二二三	藩庁海軍学生ニ在職中扶持米四石給与スヘキコトヲ達ス	四月三日	一九九
二二四	藩庁買物方蔵ヲ進物蔵ニ合併シテ諸財蔵ト改称ス	四月四日	一九九
二二五	英医シーボルトノ三田大圓寺寓宿願ヲ謝絶ニ付外国官ヨリ再度交渉アリタリ	四月四日	二〇〇
二二六	外国官判事町田久成・中井弘ヨリ外国交際ニ付近来ノ事情ヲ報道ス	四月四日	二〇一
二二七	藩庁方限支配ヲ廢シテ徇達ヲ置キ両丸ノ番人ヲ廢シテ檢事ヲ置クコトヲ達ス	四月五日	二〇三
二二八	大圓寺ヲ外国人ニ貸渡ニ付田中清之進ヨリ知政所ヘ届書	四月六日	二〇三
二二九	田中清之進・内田政風ヨリ藩庁ヘ報知書	四月六日	二〇四
二三〇	本藩精兵六百人東京警衛トシテ至急出張セシムヘキヲ達ス	四月七日	二〇六
二三一	英医シーボルト大圓寺貸用条件ヲ破リタルヲ以テ交渉ス	四月	二〇七
二二三	外国人ニ対シ暴行ヲ加フルヲ禁ス	四月	二〇八
二二三	戊辰丸乗込ノ本藩兵破船上陸後脱賊ヲ降伏サセ盛岡藩ヘ引渡シタル旨ヲ届出ツ	四月	二〇九
二三四	芸道ヲ以小姓与等ニ被召出者并郷養子ノ者尔来分地別立高上リ等ヲ許可ス	四月八日	二一三
二三五	藩庁俸禄ノ等級ト世禄差引計算法ニヨリ明細書ヲ作り会計局ニ差出スコトヲ達ス		
	四月八日		二一三
二二六	島津久光官位昇進ニ付宰相中将ト称スヘキヲ達ス	四月八日	二一四
二二七	浮浪人取締ノ達旨ニ基キ其ノ後出府者ノ届出ヲナス	四月八日	二一四

二三八	開成所入学志願者ノ願出ヲナス	四月十一日	………	二二五
二三九	藩兵并藩主ノ上京ニテ藩邸狹隘ニ付兵隊ノ屯所手当ヲ軍務官ニ願出タリ	四月十二日	………	二二六
二四〇	監察局兵隊ニ紛敷行装ニテ市中ヲ徘徊暴行スル者ヲ嚴重取締ルヘキヲ達ス	四月十三日	………	二二七
二四一	東京滞在兵隊ノ有無并人員・到着月日等取調届出ツヘキヲ達ス	四月十四日	………	二二七
二四二	藩庁学問修行ノ為派遣シタル者ノ給与ヲ三等ニ分チ給与スヘキヲ達ス	四月十四日	………	二二八
二四三	白尾采女雇ヲ以軍艦第一等士官格ヲ命セラル	四月	………	二二八
二四四	藩庁世禄百石以下ノ徴士又ハ御雇ノ諸官ニ尔後家族養料ヲ与フヘキヲ達ス	四月十日	………	二二八
	六日	………	………	二二八
二四五	重ネテ脱籍浮浪人ノ取扱ニ付明細ノ処置法ヲ達セラル	四月	………	二二九
二四六	寺島宗則外国官副知事ニ任セラル	………	………	二二〇
二四七	東郷嘉一郎雇ヲ以越後府判事試補ヲ命セラル	四月	………	二二〇
二四八	京都警衛ノ兵士三小隊東京府警衛ニ変更セラル	四月	………	二二〇
二四九	戊辰ノ役参謀ノ西郷隆盛等ニ賞典取調ニ付管轄セシ諸兵ノ勤惰強弱ヲ録上セシム	四月	………	二二二
二五〇	条約国ヘ旅行志願ノ者ハ東京・大坂等ノ外国官ヘ願出ツヘキヲ達ス	四月	………	二二二
二五一	制度寮撰修森有禮制度寮副總裁ノ事ヲ撰行セシメラル	………	………	二二三
二五二	島津悦之助肥前佐賀ニ遊学ニ付横山正太郎ニ随伴ヲ命ス	四月十九日	………	二二三
二五三	藩庁軍務局ヨリ出軍実戦ニ臨ミ目下無役ノ者等ノ氏名・年令ヲ届出ツヘキヲ達ス	四月	………	二二三

十九日	藩庁藩治職制ニヨリ唐通事ヲ廢ス	四月十九日	二二四
二五四	水本成美制度寮准撰修刑律取調專務ヲ命セラル	四月	二二四
二五五	觸頭・觸下諸侯ノ姓名等ヲ届出ツヘキヲ達ス	四月二十日	二二四
二五六	天皇百官群臣ヲ朝会シテ因是ヲ諮問シ可否ヲ献替スヘキ詔書ヲ發ス	四月	二二五
二五七	藩士肝付千早借用上地ヲ召上クヘキ達書及ヒ借用願書		二二七
二五八	曩時延期ノ戦亡者招魂祭執行ノ旨ヲ達ス	四月	二二八
二五九	白男川龍次郎昌平校雇ニ採用セラレ同教授試補副舎長兼勤ヲ命セラル	四月二十五日	二二八
二六〇	英国医師シトル雇入ヲ出願シ許可セラル	四月二十八日	二二九
二六一	銃器及玉造器械ヲ英国ニ注文センコトヲ願出許可セラル	四月二十八日	二二九
二六二	小倉壯九郎他二名昌平館入学ヲ許可セラル	四月二十八日	二三〇
二六三	島津忠義所勞ノ為出府猶予ヲ願出ツ	四月二十九日	二三一
二六四	軍務局ニ一等ヨリ三等迄ノ医師ヲ置クヘキヲ達ス	四月	二三一
二六五	藩庁地頭并副役ニ犯罪者ノ糺明・変死者ノ取扱等ニ付達ス	四月	二三二
二六六	西郷隆盛藩兵ヲ統率シテ三邦丸ニテ出発品川へ到着後神田橋屋敷へ入ル	五月	二三三
二六七	島津忠義函館表出軍中ノ黒田清隆参謀ニ慰問書ヲ贈リ酒肴料ヲ賜フ	五月朔日	二三四
二六八	黒羽藩邸ニ野津鎮雄・大山巖ヲ遣シ會津征討中諸事周旋ノ礼ヲ述ヘ琉球布ヲ贈ル	五月	二三五
二六九	朔日		二三五

二七〇 燈明台建造ノ為英人プラントン佐多岬到着スヘキニヨリ便宜ヲ与フヘキヲ達ス 五月
二日…………… 二三五

二七一 人別帳・郷村高辻帳・絵図ヲ差出ス 五月三日…………… 二三六

二七二 藩庁新ニ典獄ヲ設ケ糺明局ニ属セシムヘキヲ達ス 五月三日…………… 二三六

二七三 藩庁藩治官職ノ等級ニ応シ東京・大坂・長崎等他国滞在者ノ賄料ヲ定ム 五月四日…………… 二三七

二七四 東京守衛ノ為桐野利秋藩兵ヲ統率シテ豊瑞丸ニテ品川ニ着シ神田橋邸ニ入ル 五月…………… 二三八

二七五 西郷小兵衛等六名函館表ヘ斥候トシテ温泉丸ニ便乗ヲ出願ス 五月七日…………… 二三九

二七六 藩庁二等官以上ニ講釈ヲ聴聞セシメ五等官以上ニモ勤務支障ナキ者ハ聴講ヲ許ス
五月…………… 二四〇

二七七 内田仲之助公議人ヲ命セラル 五月九日…………… 二四〇

二七八 医師・画工・諸職人等ノ位階国名受領ヲ廃止シ既ニ許容ノモノモ停止スヘキヲ達ス
五月…………… 二四一

二七九 薩藩兵隊ニ箱館出張ヲ命ス 五月十一日…………… 二四一

二八〇 藩庁分地ニ付イテ達書 五月…………… 二四一

二八一 参与大久保利通副島種臣ト共ニ行政官機務取扱ヲ命セラル…………… 二四二

二八二 上・下議局ヲ開キ輔相議定・参与ヲ行政官ニ置イテ公選ニヨリ登庸スル詔書 五月十
三日…………… 二四二

二八三 銃器等購入ノ約定書ヲ和蘭商社ト交換ス 五月十三日…………… 二四五

- 二八四 西郷隆盛元佐土原藩士外二名ヲ藩士小姓与トシテ定府命セラレ度藩庁ニ願出ツ 五月
十三日……………二四七
- 二八五 秋田口負傷ノ藩士榎田仲兵衛治癒セサルニヨリ大病院へ入院ヲ願出ツ 五月十四日 ……二四九
- 二八六 藩庁東京・西京・長崎等定詰ノ者ニハ兵士同様ノ賄米等ヲ給スル旨ヲ達ス 五月十五日 ……二五〇
- 二八七 大久保利通参与ニ岩下方平留守次官トナル……………二五〇
- 二八八 藩士有村泰藏医学校録事ヲ命セラル 五月十五日 ……二五〇
- 二八九 西郷・桐野統率来着ノ兵隊函館出張ヲ命セラレ品川海ヲ出発ス 五月十六日 ……二五一
- 二九〇 京都ヨリ到着ノ兵士三小隊賜暇帰国ノ日限ヲ延引セラル 五月……………二五二
- 二九一 大隊訓練天覧ノ旨ヲ達セラル 五月十六日……………二五二
- 二九二 榎本武揚以下五稜郭ヲ出テ軍門ニ降ル 五月……………二五三
- 二九三 薩摩藩士山下弘平大病院ノ副当直医官ヲ命セラル 五月十八日……………二五五
- 二九四 西郷助八外四名ヲ横濱在留英国大砲方指南ノ者へ入門セシメ度儀ヲ願出ツ 五月十九日 二五五
- 二九五 藩庁急変火災ノ際常備軍集合ノ鐘令法及ヒ警衛法ヲ規定ス 五月十九日……………二五六
- 二九六 合衆国留学生藩士松村淳蔵外五名へ恠人一月洋銀六百元宛ヲ給スヘキヲ達ス 五月……………二五六
- 二九七 西郷隆盛等函館征討応援隊函館ニ着シタレトモ降伏ノ後ナレハ帰途ニ就ケリ 五月……………二五九
- 二九八 藩士堀萬十郎外三名昌平学校入学ヲ出願ス 五月二十日……………二六〇
- 二九九 在府諸侯へ御下問ニ付キ礼服用ニテ参朝スヘキヲ達ス 五月二十日……………二六〇
- 三〇〇 朝廷祭政一致・蝦夷地開拓ノ二件ヲ諮問ス……………二六一

目 次

三〇一	藩庁侍医及ヒ八九等官ノ俸禄ノ改正等ヲ達ス	五月二十二日	二六二
三〇二	弾正台ヲ置キ吉井友實大忠トナル	二六三
三〇三	宫里繁之輔外四名医学校ニ入学ス	二六三
三〇四	東京大病院医師石神良策・山下弘平ヲ諸生教導ノタメ本藩ニ帰スコトヲ許サル	五月二十三日	二六三
三〇五	藩士鮫島誠蔵辞令四通ヲ届出ツ	五月二十三日	二六四
三〇六	朝廷外国交際以下三件ニツキ諮問ヲ発シ在京内田仲之助奉答ス	五月	二六四
三〇七	函館出張ノ西郷以下ニ東京ニ凱旋スヘキヲ達スレトモ既ニ一部ハ國元ヘ出発ス	二六七
三〇八	本營ヨリ函館帰還日程並酒肴料下賜ヲ達ス	六月五日	二六九
三〇九	藩庁地頭副役ノ四等官ヘ変更ヲ達ス	五月二十五日	二六九
三二〇	藩士朝職ニ就ク時ハ其ノ藩諮問ノ上採用スヘキヲ達ス	五月	二六九
三二一	藩庁従来ノ絵師ヲ廃シ新ニ絵師・絵師助ヲ置ク	五月二十八日	二七〇
三二二	藩庁軍政設置ニ付小番以上ノ家ヲ外城ニ復帰セシムヘキヲ達ス	五月	二七〇
三二三	詔シテ島津久光・忠義以下ノ功ヲ賞ス	六月二日	二七一
三二四	在京新納嘉藤ニ昨年末京都ヨリノ凱陣者ノ総人員及其ノ給与金高ヲ報告ス	六月二日	二七四
三二五	諸郷旧来ノ噺・与頭・横目等ノ職名ヲ廃シ漸次軍政組織ニ改ム	六月二日	二七五
三二六	藩庁従来ノ身分ニヨル諸勤務ヲ尔後ハ止メル旨ヲ達ス	六月四日	二七六
三二七	島津忠義藩ノ軍艦春日丸及乾行丸ヲ朝廷ニ献上センコトヲ願出ツ	六月五日	二七六

- 三二八 賞典禄ハ御蔵米ヨリ支給スヘキヲ達ス 六月五日……………二七七
- 三二九 藩庁散高買求メ居ル者ハ一石二百貫文ニテ売払制限外ノ購入ヲ禁スル旨達ス 六月五日……………二七七
- 三三〇 城下任職者及ヒ無役者ノ非常鐘令ノ法ヲ定ム 六月五日……………二七八
- 三三一 軍治各官其ノ他ノ服装容儀ヲ規定ス 六月五日……………二七八
- 三三二 寺院ニ対シ粗暴ノ挙動ナキ様達ス 六月五日……………二八〇
- 三三三 寧姫近衛忠房養女ノ儀許可セラルヲ達ス 六月……………二八〇
- 三三四 医院ノ改良ヲ計ル為メ従来ノ医院ヲ廢シ諸医官ヲ免スル旨ヲ達ス 六月七日……………二八一
- 三三五 函館出軍兵ノ内銃隊二小队・砲隊半小队ハ東京へ着シ他ハ国元へ帰帆セリ 六月八日……………二八一
- 三三六 本藩ヨリ登用セラレタル人員中都合ニヨリ免職願ノ者ノ許可ヲ求ム 六月九日……………二八一
- 三三七 本藩凱旋ノ函館出軍兵ニ酒肴ヲ下賜セラル 六月九日……………二八五
- 三三八 内田政風所用ノ為帰国願出許可セラル 六月十日……………二八五
- 三三九 靖献靈社ヲ照國神社ノ傍ニ移転スヘキヲ達ス 六月十日……………二八六
- 三三〇 本藩大砲隊ノ大砲打方観覽ノ旨ヲ達セラル 六月十一日……………二八六
- 三三一 函館征討戦死者ノ招魂祭ヲ執行シ出張兵ニ酒肴料ヲ賜ヒ帰国休兵ヲ命セラル 六月……………二八六
- 三三二 従来ノ仏事供養ヲ改メ神祭トスル為メ御魂移ノ祭礼ヲ行フヲ達ス 六月十二日……………二八八
- 三三三 請謁等ニテ職ヲ求ムルコトナキ様達ス 六月十二日……………二八八
- 三三四 招魂祭執行ニ付戦死者人数名前ヲ届出ツヘキ達ニヨリ知政所ニ照会ス 六月……………二八九

三三五	函館追討軍參謀黒田清隆并ニ同監軍岸良兼養賊徒平定ニ付職ヲ免セラル	六月十四日	二九〇
三三六	昌平学校ヲ大学校ト称シ開成・医学ニ校ヲ置キ当時入学ヲ願出タル本藩士人名	六月十七日	二九〇
三三七	版籍奉還ノ請願聴許アリテ島津忠義鹿兒島藩知事ニ任セラル	六月十七日	二九三
三三八	公卿・諸侯ノ称ヲ廢シ華族ト称セシム	六月十七日	二九四
三三九	政事施行上ノ諸件ヲ公用人ヨリ弁事役所ニ質問シ其ノ指令ヲ請フ	六月十八日	二九五
三四〇	侍直助ヲ置キ八等官トスヘキ旨ヲ達ス	六月十八日	二九六
三四一	長崎府ヲ県ト為シ野村盛秀ヲ知事トナス	六月二十日	二九六
三四二	東京・大坂府及ヒ神奈川県ニ通商司ヲ設ケラル	六月二十一日	二九七
三四三	西郷従道・山縣有朋英国留学ニ付中村博愛ニ通弁官トシテ同行ヲ命セラル	六月二十二日	二九八
三四四	薩・長・土三藩精兵召集ノ議ヲ決セラル	六月二十三日	二九八
三四五	伊東四郎左衛門・谷山武之輔等ノ役儀ヲ免スル旨ヲ達セラル	六月	二九八
三四六	官職改定ニ付達書及ヒ下問ノ原案	六月	二九九
三四七	九段坂上招魂場ニ於テ招魂祭執行ノ旨ヲ回達セラル	六月二十四日	三〇四
三四八	島津久光・忠義父子昇叙ノ位記并ニ賞典禄ヲ奉還ス	六月二十五日	三〇四
三四九	中元盂蘭盆会ヲ禁止シ祖先ノ祭祀ハ仲春仲冬兩度ニ執行スヘキヲ達ス	六月二十五日	三〇六
三五〇	藩庁会計局ヨリ織物所ヘ雇入レタル上州人ヲ帰国セシムヘキヲ報ス	六月二十五日	三〇六
三五一	英国公子来京ニ付本藩兵式百人ヲ差出スヘキヲ達セラル	六月	三〇七
三五二	城下士以上ノ者尔後角入・前髪取願出ニ及ハサル旨ヲ達ス	六月二十七日	三〇八

三五三	元大隊司令沖直次郎帰藩ノ旨ヲ報ス	六月二十七日	三〇九
三五四	諸士持高ハ従来通軍役高ト称スヘキ旨達ス	六月	三〇九
三五五	常備兵設置ニ付施行法ヲ規定ス	六月	三〇九
三五六	死牛馬ノ取扱ニ付無関係ノ者多数集合シ猥リナル取扱ナキ様注意スヘキヲ達ス	六月	三一〇
三五七	濱御殿下馬下乗ノ規定ヲ回達シ大手門ノ無印鑑通行ノ差留ヲ達ス	七月	三一〇
三五八	外国官御用掛試補溝口吉左衛門職務被免ニヨリ出張先ヘノ申達ヲ藩庁ニ交渉ス	七月	三一〇
	朔日		三一〇
三五九	海江田信義彈正大忠ニ任セラル		三一〇
三六〇	諸藩ノ外国船雇入レ及ヒ開港場ヨリ東京廻リノ者ノ許可届出ニツイテ達ス	七月三日	三一三
三六一	福昌寺戦亡帳記載ノ戦亡者モ靖献靈社ニ合祭シ配祀ノ礼ヲ以テ執行スヘキヲ達ス		三一三
	七月五日		三一三
三六二	藩庁下町海岸ニ番所ヲ建設シテ諸色方ヲ置ク	七月五日	三一三
三六三	藩庁会計局調役・同助ノ官等ヲ規定ス	七月五日	三一四
三六四	寺島宗則悪幣通用問題交渉ノ覚書ヲ受ケ各国公使トノ協議会ヲ開クコトヲ報ス	七月	三一四
	六日		三一四
三六五	中井弘晒布二疋并金千両ヲ下賜セラル		三一五
三六六	官制位階ノ改定ニヨリ大久保利通ハ木戸等ト共ニ待詔院学士ニ補セラル	七月八日	三一六
三六七	寺島宗則外務大輔ニ任セラル		三一七

目次

三六八	錢相場金壹両ニ付十貫文ニ定メラル	七月十日	三二七
三六九	小牧昌業太政官少史ニ任セラル	三二七
三七〇	島津久光・毛利敬親ヲ東京ニ召サル	七月十一日	三二七
三七一	高輪応接所ニ於テ三條實美等関係高官ト五カ国公使悪金通用ニ関シ協議ス	七月十二日	三二七
三七二	藩庁島津忠義鹿兒島藩知事ヲ命セラレタルニヨリ少將ト唱フヘキヲ達ス	七月十五日	三二〇
三七三	三府ノ外悉ク府ヲ県ト改メ野村・松方故ノ如ク税所ヲ兵庫県權知事ト為ス	三二〇
三七四	田中清之進ヨリ雇醫師原田鎌輔解雇ノ取計ヲ新納立夫ニ交渉ス	七月十八日	三二〇
三七五	藩庁軍務局城下士以上ノ小銃調査ヲナス	七月十八日	三二一
三七六	黒田清隆外務權大丞ニ任セラル	三二一
三七七	藩庁葬儀師ヲ置キ福昌寺及源舜庵ニ出張サセテ上下ノ尋問ニ応ス	七月十九日	三二二
三七八	軍艦献上願ニ付キ後命ヲ俟ツヘキ沙汰書	七月二十日	三二二
三七九	藩庁版籍奉還ヲ許可シ忠義本藩知事ニ任セラレルニ付キ祝儀ヲ申出ツヘキヲ達ス	三二二
	七月二十日	三二二
三八〇	島津忠義・久光再度賞典祿及ヒ位記ノ拜辞ヲ具申ス	七月二十二日	三二三
三八一	贖金取締ヲ嚴重ニシ贖金ノ総員數ヲ取調ヘ申告スヘキヲ藩庁ニ達セラル	七月二十二日	三二三
三八二	朝廷紙幣兩替ヲ命セラレ本藩軍事費過分ニ付キ納付ニ苦シム	七月二十三日	三二四
三八三	大久保利通參議ニ任セラル	七月二十三日	三二六
三八四	外務大輔寺島宗則外務卿澤宣嘉ト共ニ澳太利国条約交換ノ事ヲ掌ラシム	七月二十三日	三二六

三八五	国許知政所ヨリ東京在勤ノ公用方人数ヲ定メラレ人員ヲ派遣セラル	七月	三二六
三八六	英王子来朝ニ付接判脩例書拜見並本藩兵・長藩兵前後警衛シテ大森迄出張ヲ報告ス		
	七月二十五日	三二七	
三八七	留守官再興ニ付岩下方平留守次官へ再任セラル	七月二十七日	三二八
三八八	水本成美大学大博士ニ任セラル		三二九
三八九	郷士并同格之者ハ伝事支配トナス	七月二十八日	三二九
三九〇	藩庁会計局諸官職俸禄帳ヲ毎月十五日限り差出スヘキヲ達ス	七月二十八日	三二九
三九一	諸郷分隊長以上ノ俸禄ニ付達書	七月	三二九
三九二	三府へ定飛脚差立ニ付達書	七月	三三〇
三九三	藩庁ヨリ士分ノ儀節義ヲ失セサル様達ス	七月	三三〇
三九四	外務大輔寺島宗則英国公使ト樺太ニ於ケル雑居ノ件ニ付意見ヲ交換ス	八月	三三二
三九五	藩庁各局ノ書記・調役・筆者等ノ内劇職ノ者ニ季禄ヲ給与スルコトヲ可決ス	八月九日	三三五
三九六	藩庁ニテ上下会所詰札明奉行見習ハ監察局ト合議シテ坊内ヲ取締ルヘキヲ達ス	八月 十二日	三三六
三九七	西郷隆盛外三人至急御用ニ付上京セシムヘキヲ知政所ニ報ス	八月十六日	三三六
三九八	島津忠義藩内改革ノ諭書ヲ発シ勅命ニヨリ家格ヲ廢シ士族トナスコトヲ達ス	八月十 七日	三三六
三九九	桂久武所務米返上ヲ願出テ許サル	八月	三四〇

目次

四〇〇	内務局知家事ヲ家令ト唱フヘキヲ達ス	八月十七日	三三一
四〇一	藩庁ニテハ藩境標木ニ鹿兒島領ト記シタルヲ鹿兒島藩ト改ムヘキヲ達ス	八月十八日	三三一
四〇二	藩治職制ニテ琉球三島並沖永良部島檢事ハ吟味ノ上時々出張セシムヘキヲ達ス	八月十九日	三三一
四〇三	集議院ニ関スル達書及ヒ規則		三三二
四〇四	東京招魂社ヘ永世祭資料ヲ下賜セラル		三三三
四〇五	旧幕府ノ朱印附寺社領アラハ大藏省ヘ報告スヘキ旨ヲ知政所ニ報ス	八月二十四日	三三三
四〇六	藩庁ヨリ上納米ノ事ヲ達ス	八月二十四日	三三三
四〇七	諸道不作ニ付節儉救恤ヲ詔ス	八月二十五日	三三四
四〇八	藩庁諸郷ヨリノ願達ハ速ニ処弁スヘキヲ達ス	八月二十五日	三三六
四〇九	吉井友實彈正少弼ニ任セラル	八月二十六日	三三六
四一〇	北海道開拓ノ儀ニ付十勝・日高両国ノ内五郡ノ薩摩藩支配ヲ命セラル		三四七
四一一	英国王子参朝周旋ノ慰勞トシテ大久保等ニ天酌ヲ以酒肴并ニ包物ヲ賜フ	八月二十八日	三四七
四一二	公儀人正権大参事ヨリ相勤ムヘキヲ達ス		三四八
四一三	藩庁旧格ニ拘ハラズ百姓・町人ヨリモ人材登用ノ旨ヲ達ス	八月	三四八
四一四	藩庁西洋医院召建ニ付有志ノ者ノ入門ヲ達ス	八月	三四八
四一五	朝命ニヨリ藩庁京・大坂詰公用人ヲ廢ス	八月	三四九
四一六	藩庁外城ヨリノ雇足輕ヲ廢ス	八月	三四九

- 四一七 上野景範ヲ傭奴召還ノ為布哇国ニ差遣ス 九月三日……………三五〇
- 四一八 太政官ヨリ彈例書ヲ布達ス 九月八日……………三五〇
- 四一九 藩庁集成館並ニ銃藥・兵器方奉行以下筆者ニ至ルマテ其職ヲ免スルヲ達ス 九月八日……………三五二
- 四二〇 藩庁改メテ兵器奉行・火藥製造局ヲ建テ改革並ニ火藥増産法ノ取調書ヲ上ラシム
九月九日……………三五二
- 四二一 桂久武官許ヲ得テ四郎ト改名ス 九月十二日……………三五七
- 四二二 島津久光權大納言從二位ヲ拝辞シ猶從三位様ト称スルコトヲ達ス 九月十三日……………三五七
- 四二三 函館戦功ニ依リ島津忠義ニ禄壹万石ヲ春日艦及ヒ赤塚源六ニモ賞賜セラル 九月……………三五八
- 四二四 黒田清隆賞典禄ヲ下賜セラル奉還スレトモ許サレシ 九月……………三五八
- 四二五 函館戦降伏ノ者十五名ヲ南林寺協寮内ニ置ク 九月……………三五九
- 四二六 島津忠義親ヲ妙圓寺ニ参詣ス……………三六〇
- 四二七 藩庁百次・山田二郷ヲ合併シテ永利郷ト唱フヘキヲ達ス 九月十七日……………三六一
- 四二八 藩庁軍馬役・内厩役・軍馬役助ヲ置ク 九月……………三六一
- 四二九 藩庁諸郷士族ニ家来・下人ノ召抱ヲ許ス 九月……………三六二
- 四三〇 藩庁砲兵小頭ノ次ニ軍宮下長等ヲ設ク 九月二十四日……………三六二
- 四三一 西郷・大久保・小松・岩下ニ賞典禄ヲ賜フ……………三六二
- 四三二 島津忠義朝命ニヨリ兵ヲ率イテ上京ス 九月……………三六三
- 四三三 入道公現親王徳川慶喜以下ノ謹慎ヲ宥ス 九月二十八日……………三六五

目 次

四三四	藩庁家格ニテ異リタル式礼ヲ同式ニ改ム	九月二十九日	三六九
四三五	藩庁城下士ノ家督ヲ相統スル郷士ハ嫡庶又ハ血統連続明白ナル者ニ限り許ス	九月二十九日	三七〇
四三六	藩庁水上客屋ヲ廢スルコトヲ達ス	九月晦日	三七〇
四三七	島津久光・忠義父子ノ賞秩返上ノ上表	九月	三七一
四三八	島津忠義北海道開拓ノ宥免ヲ出願ス	九月	三七一
四三九	藩庁各武術ハ各々ソノ師宅ニ於テ練磨スヘキヲ達ス	九月	三七二
四四〇	藩庁集成館并火藥製造局ニ士族ノ就職ヲ許可ス	九月	三七三
四四一	藩庁大工等諸職人ノ賃金定則ヲ取締ル	九月	三七三
四四二	藩庁二ノ丸ニ内厩方ヲ置クコトヲ達ス	九月	三七四
四四三	黒田清隆箱館戦功賞典取調ヲ命セラル	九月	三七四
四四四	島津忠義国産出品記念ノ金牌贈与ニ対シ佛国皇帝ヘノ礼状	九月三日	三七四
四四五	大久保・小松・岩下上書シテ昇叙ノ位階并賞典禄ノ奉還ヲ請フモ許サレス	十月	三七六
四四六	島津忠義ヨリ六月五日附軍艦献上ノ請願許サル	十月三日	三七七
四四七	藩庁末吉郷ノ内伊勢雅楽旧領地ヲ岩川郷ト唱フヘキヲ達ス	十月三日	三七八
四四八	藩庁従来ノ厩ヲ改メテ軍馬方ト称シ同筆者ヲ置クヘキヲ達ス	十月三日	三七八
四四九	島津忠義兵隊引卒神田橋邸ニ着館ス	十月五日	三七八
四五〇	島津忠義春日艦及ヒ赤塚等ニ下賜ノ賞典ヲ奉還センコトヲ請フ	十月七日	三七九

- 四五一 庶民ノ西洋形船舶ヲ所有スルヲ允ス 十月……………三八〇
- 四五二 藩庁諸郷士ノ養子願ハ伝事ノ指揮ヲ受ケサス 十月九日……………三八〇
- 四五三 藩庁菱刈七ヶ郷ハ小郷ニ付牛山・太良・菱刈三郷ニ合併ス 十月十日……………三八一
- 四五四 藩庁諸郷軍役高ヲ五十石限ト改メ過上高ハ無高ノ者ニ売却セシムヘキヲ達ス 十月十日……………三八一
- 二日……………
- 四五五 島津忠義藩知事拜命御礼ノ為参内天気ヲ伺フ 十月十三日……………三八二
- 四五六 藩庁民事局ヲ会計局ノ上ニ置ク 十月十五日……………三八四
- 四五七 島津忠義大圓寺ニ参詣シ廟所ヲ拝シ戦死者ノ墓所ヲ弔フ 十月十六日……………三八五
- 四五八 藩庁諸局ノ総裁以下筆者迄在職人数名書ヲ差出スヘキヲ達ス 十月十九日……………三八六
- 四五九 島津忠義所勞ニ付参内セス 十月二十日……………三八六
- 四六〇 藩兵二大隊・二砲座ノ調練ヲ天覽アリ 十月二十二日……………三八六
- 四六一 藩庁兵器方隊ヲ編制シ其ノ俸禄ヲ定ム 十月二十二日……………三八七
- 四六二 皇后宮着京ニ付島津忠義名代参内ス 十月二十四日……………三八七
- 四六三 島津忠義岩倉具視ヘ答礼品ヲ進上ス 十月二十四日……………三八八
- 四六四 太政官ヨリ外国人ニ乱暴狼藉スル者ノ取締ヲ布告ス 十月……………三八九
- 四六五 ^{ナガリ}永利郷ヲ^{ナガトシ}永利郷ト改称ス 十月二十八日……………三九〇
- 四六六 太政官ヨリ布告ノ二件ヲ藩内ニ布達ス 十月……………三九〇
- 四六七 藩庁ニテハ各局ノ日用品ハ宮繕方細工局ヲ經テ命セラルヘキヲ達ス 十月……………三九〇

目 次

四六八	藩庁兵器方筆者及ヒ同肝煎ヲ廢シ兵器方吟味役ヲ置ク	十月	三九一
四六九	島津忠義ヨリ勝海舟并望月大象へ諸生引立御礼ノ挨拶ヲナス	十一月	三九一
四七〇	鹿兒島藩公用人ヨリ弁官役所へ届書	十一月四日	三九三
四七一	島津忠義勝海舟ヲ訪問シ天璋院ニ面会ス	十一月五日	三九三
四七二	山澤鐵之進等三名ノ改名ヲ許可セラル	十一月十一日	三九四
四七三	各藩ニテ無用ノ銅砲ヲ買上ケ貨幣鑄造ニ充ツヘキヲ令ス	十一月十二日	三九四
四七四	島津忠義賜暇帰藩ヲ願出許可セラル	十一月	三九四
四七五	英医ウイルス島津忠義ニ面謁ス	十一月十二日	三九五
四七六	藩庁新發明品ハ願出ニヨリ販売ヲ許可シ公益アルモノハ賞賜アルヘキヲ達ス	十一月十二日	三九五
四七七	島津久光藩内ノ風習乱雜ニ流レタリトテ内務局ヲ戒メ其ノ心得方ヲ達ス	十一月十二日	三九六
四七八	島津忠義召ニヨリ参内ス	十一月十五日	三九六
四七九	諸藩ノ選抜兵ヲ東京府ノ警備ニ充ツ	十一月十五日	三九七
四八〇	検事二名箱館降人ノ監督トシテ下藩サス	十一月	三九七
四八一	藩庁歴代ノ遷魂祭ヲ執行スルコトヲ達ス	十一月十七日	三九九
四八二	藩庁士族ニシテ卑賤ノ職業ヲ以テ渡世スル者ハ士族ノ籍ヲ返上セシム	十一月二十日	三九九
四八三	島津忠義帰藩ノ際外国船雇入ヲ願出ルモ許可ナク外人雇入ノ許可ハ得ラル	十一月	三九九
四八四	島津齊彬ニ從一位追贈ノ勅書ヲ受ク	十一月二十二日	四〇一

四八五	藩庁各郷ヨリ一人宛選出シ軍務局学問所及学寮等ニ出府セシム	十一月二十二日	四〇二
四八六	島津久光・忠義等ノ賞典返献ヲ許サス	十一月	四〇三
四八七	島津忠義九段坂招魂社ニ参詣ス	十一月二十三日	四〇三
四八八	川村純義・黒田清隆兵部大丞ニ任セラル	十一月二十三日	四〇三
四八九	島津忠義帰藩ノ途中鎌倉・伊勢・京都ニ立寄ル		四〇四
四九〇	外務大輔寺島宗則ニ太刀料金三百両ヲ下賜セラル		四〇八
四九一	藩庁島津家歴代総社ヲ鶴嶺神社ト称ス	十一月二十九日	四〇八
四九二	藩庁殉難者・戦死・病歿者ノ遺族及ヒ重傷者ニ撫恤ヲ行フ	十一月	四一〇
四九三	藩庁道路田園ノ境等ニ桑樹ヲ植エ養蚕ヲ盛ニスヘキヲ達ス	十一月	四二八
四九四	能方ノ師家并同役々悉ク廃セラル、コトヲ達ス	十一月	四二八
四九五	藩庁小郷ヲ合シテ襲山郷・真幸郷ト唱フヘキヲ達ス	十一月	四二八
四九六	士族禄制ヲ定メラル		四三〇
四九七	海軍規則方略及ヒ人材登用ニ関スル内田政風建言	十二月二日	四三二
四九八	英医ウイルスヲ藩ニ聘用ス	十二月三日	四三四
四九九	藩庁ニテハ島津忠義参内シ天酌ヲ賜ヒタルニヨリ賀詞ヲ述フヘキヲ達ス		四三五
五〇〇	藩庁民事局中ニ支配役・同助ヲ増置ス	十二月三日	四三六
五〇一	大久保利通鹿兒島派遣ノ勅命ヲ受ク	十二月	四三六
五〇二	藩庁会計方調役并同勘定役ニ金穀出納ノ事ハ時々出張検査セシムヘキヲ達ス	十二月	

目次

	八日	四三七
五〇三	藩庁西洋医院ヲ元浄光明寺跡ニ移シ西洋学校ト唱フヘキヲ達ス 十二月十二日	四三八
五〇四	大久保利通・木戸孝允帰藩ノ途ニ着ク 十二月	四三八
五〇五	戊辰役賞典ノ追賞及ヒ箱館征討ノ追賞ヲ行ナハル	四三九
五〇六	藩庁新ニ会計方勘定役助ヲ置キ従来ノ勘定役助ヲ同見習ト改称スヘキヲ達ス 十二月十五日	四四三
五〇七	島津忠義周防三田尻ニ着艦シ毛利元徳ト会见ス 十二月	四四三
五〇八	大久保利通京都ニテ大村永敏暗殺犯人ノ処刑ニ付弾正台大忠等ヲ説得ス 十二月	四四四
五〇九	藩庁島津忠義帰着ニ付祝詞ヲ述フヘキヲ達ス 十二月二十五日	四四四
五一〇	衣服容貌ノ儀ニ付藩庁達書 十二月二十七日	四四五
五一一	藩庁島津歳久以下七名ノ神靈ヲ其ノ功勲ニ抛リ祭祀スヘキヲ達ス 十二月	四四五
五一一	藩庁民部省ヨリ酒造制限厳守ニ付布告ス 十二月	四四六
五一一	藩庁華倉細工場ヲ廃シ其ノ跡ニ生産方管轄ノ金性分析所ヲ建設スヘキヲ達ス 十二月	四四七
五一一	藩庁従来ノ庄屋ヲ村長ト改称スヘキヲ達ス 十二月	四四七
五一一	藩庁諸郷ノ監察局関係ノ事務ハ小頭ニテ取扱フヘキヲ達ス 十二月	四四七
五一六	藩庁軍神祭祀・武事始惣調練ノ期日ヲ達ス 十二月	四四七
五一七	藩庁坊泊・久志・秋目・鹿籠ヲ合併シテ南方郷ト称スヘキヲ達ス 十二月	四四八
五一八	藩庁島津家ノ靈位ヲ神社ニ祀ル 十二月	四四八

五一九 藩庁拔米取締ヲ嚴重ニスヘキヲ達ス 十二月…………… 四四九

明治三年(庚午)

五二〇 藩庁年頭諸儀式ノ手当及ヒ法式ヲ定ム 正月朔日…………… 四五〇

五二一 天神・地祇八神及ヒ皇靈ヲ神祇官ニ祭り大教ヲ宣布スルヲ諭ス 正月三日…………… 四五七

五二二 藩庁鳥羽・伏見戦亡者三年祭ヲ行フ 正月三日…………… 四五八

五二三 藩庁軍務局常備隊射撃練習ニ付火薬交附ノ手續ヲ示ス…………… 四六二

五二四 外務省在京勅任官人名問合ニ対シ外務省回答 正月五日…………… 四六四

五二五 岩倉具視賜邸ニ於テ祝宴ヲ開ク 正月六日…………… 四六七

五二六 留守次官岩下方平ニ京都府権知事ヲ兼ネシム 正月八日…………… 四六七

五二七 堀基ヲ正六位ニ叙ス 正月八日…………… 四六七

五二八 外務大輔寺島宗則横濱表ヘ応接トシテ出立ノ届 正月八日…………… 四六八

五二九 朝廷府藩県ニ令シ逃籍復帰ノ者旧罪ヲ問ハス各其生業ヲ授ケシム 正月九日…………… 四六八

五三〇 藩内火薬増殖法ヲ究メ各郷作硝教示ノ為作硝局吏員ヲ派シ巡回指導セシム…………… 四六九

五三一 朝廷旧本丸跡ニ於テ軍神祭ヲ行フ 正月十七日…………… 四七二

五三二 藩庁当今簡易軽便ノ極旧格ノ良風ヲ廃スル如キ浮薄遊惰ノ弊ヲ諭ス 正月十三日…………… 四七四

五三三 大久保利通・黒田清隆毛利廣封ニ薩・長ニ老公相提携シ勸旨ニ副ハレンコトヲ陳ス…………… 四七五

五三四 調練ノ天覧アリ大隊長川村純義・篠原國幹褒詞ヲ受ケ兵士ニ酒肴料ヲ賜フ…………… 四七八

目 次

五三五	貴島平八へ札明総裁ヲ命ス	正月十八日	四七七
五三六	藩庁本坊泊手形所ヲ南方手形所ト改称ス	正月十八日	四七九
五三七	藩庁藩内米価騰貴ニ付本月限ニテ焼酎ノ釀造ヲ禁止ス	正月十八日	四七九
五三八	藩庁菱刈表七ヶ郷ヲ三ヶ郷ニ合縮シ旧大口手並旧本城手両蔵ノ名目ヲ改称ス	正月十八日	四七九
	八日		四七九
五三九	藩庁琉球在番同検事及筆者ノ官等・俸給ヲ定メ従来ノ附役・用達ハ之ヲ廢ス	正月十八日	四八〇
五四〇	西郷隆盛参政ヲ辞シテ藩政ノ顧問トナリ一世養俸百五十俵ヲ給セラル	正月十八日	四八〇
五四一	参議大久保利通鹿兒島ニ来リテ聖意ヲ公及西郷隆盛ニ達ス		四八一
五四二	海外旅行ニ関スル条規ヲ更定ス	正月十九日	四八七
五四三	藩庁諸郷士族ト城下士族ノ養子縁組ヲ許サス	正月二十日	四八七
五四四	弾正大忠海江田信義ヲ鹿兒島藩ニ附シテ監守セシム		四八八
五四五	旧本丸跡ニ於テ兵式天覽日限ヲ定ム	正月二十八日	四九一
五四六	鹿兒島藩知事二月中月番届ヲ提出ス	正月二十八日	四九二
五四七	外務卿澤宣嘉・同大輔寺島宗則西班牙国条約交換ノ事ヲ掌ル	正月二十九日	四九二
五四八	島津久光・忠義父子叙位・賞秩ヲ奉還センコトヲ請フ	正月	四九二
五四九	藩庁軍艦並ニ商船乗組ノ水夫総長以下ノ資格俸禄ヲ定ム	正月	四九四
五五〇	藩庁医学学校並病院ノ改革ヲ行フ	正月	四九五
五五一	藩庁島津家累代ノ墓所名ヲ改メテ諸所地名ニテ唱ヘシム	正月	四九九

五五二	橋口與一郎ニ参政ヲ命ス	正月	五〇〇
五五三	人別取調方ノ管轄ヲ會計局ヨリ民事局ヘ移ス	正月	五〇一
五五四	藩庁遊軍隊生兵局人数ヲ撤廢ス	正月	五〇一
五五五	藩庁神社奉行副役・同見習・神社方筆者ヲ廢シ神事調役ヲ置ク	正月	五〇一
五五六	藩庁糺明局ヲ移転シ糺明所ト改稱ス	正月	五〇二
五五七	箱館府判事井上長秋樺太海岸巡航中所在ヲ失ヒタルヲ愍ミ遺族ニ金八百兩ヲ賜フ		
	二月三日		五〇三
五五八	府藩県ノ公廨ヲ改メテ庁ト稱ス	二月三日	五〇七
五五九	京都諸藩邸荒蕪ノモノノ処分等ニ付キ達ス	二月五日	五〇八
五六〇	長州兵士騷擾ニ付慰問視察トシテ西郷隆盛以下数人ヲ遣ス		五〇八
五六一	宣撫使徳大寺實則ヲ山口藩ニ差遣ス	二月十二日	五一三
五六二	府藩県ヲシテ其駅程諸関勘合等ニ用ル印鑑ヲ彫刻セシム	二月十二日	五一七
五六三	鹿兒島藩並触下藩々印受領書ヲ鹿兒島藩公用人ヨリ提出ス	二月十五日	五一七
五六四	島津忠義寧姫トノ婚姻ヲ藩内ニ達ス	二月十五日	五一八
五六五	藩庁米穀輸出方改正ノ手續ヲ達ス	二月十九日	五二〇
五六六	藩庁漢方医院ヲ旧製薬方跡ヘ設ケ侍医ニ其総括ヲ委ス	二月二十日	五二一
五六七	朝廷各藩常備兵編制規則ヲ定ム	二月二十日	五二一
五六八	府藩県外償ニ付布告	二月二十二日	五二二

目 次

五六九	藩庁糺明局ニ笞刑ノ科条ヲ置ク	二月二十二日	五二二
五七〇	島津久光・忠義ノ賞典及位祿奉還ニ対シ岩倉具視ヨリ諭達	二月二十二日	五二三
五七一	島津久光・忠義ヨリ朝廷ニ金米献上ニ付其員額ヲ公用人ヨリ稟申ス	二月二十三日	五二三
五七二	大久保利通伝勅ノ目的ヲ達セスシテ帰京ノ途ニ就ク	二月二十二日	五二四
五七三	上野景範布哇国へ邦人引戻ノ為メ派遣慰勞トシテ絹一匹下賜セラル	二月二十五日	五三〇
五七四	諸官員並宮・華族ノ家士及諸藩士等在留地ニ係ル訴訟ニ付呼出方ヲ定ム	二月二十七日	五三〇
五七五	諸藩版籍調書ノ内石高・人口・兵員等ヲ至急開申セシム	二月二十九日	五三一
五七六	宮・華族等ノ名目ヲ以テ金銀ヲ貸附スル者ヲ申禁ス	二月晦日	五三二
五七七	高知藩知事山内豊範鹿兒島ニ来リ三策ヲ立テ天朝ヲ輔翼センコトヲ発表ス	二月	五三二
五七八	藩庁軍夫使役ヲ三町人及諸所中宿ノ家来下人ヨリ召募スルコトヲ達ス	二月	五三四
五七九	藩庁中郷ヲ東郷ニ合併ス	二月	五三四
五八〇	藩庁銅錢ノ輸出ヲ禁制シ其取締方ヲ嚴達ス	二月	五三五
五八一	藩庁両丸奥口番所ヲ内務局口番所ト改称ス	二月	五三五
五八二	藩庁米穀輸出ヲ禁制シ其取締方ヲ達ス	二月	五三五
五八三	藩庁大工頭ノ職ニ就クモノハ一代軍艦方准士等ヲ命スルコトヲ達ス	二月	五三六
五八四	藩庁島津廣兼ノ軍務総裁ヲ解ク	二月	五三六
五八五	佐多ノ岬ニ仮燈明台ヲ設置ス	三月朔日	五三七
五八六	留守次官兼京都府権知事岩下方平ヲ罷ム	三月朔日	五三八

五八七	銀台二分金引替期限後レノ分ヲシテ急ニ引替方ヲ達ス	三月二日	五三九
五八八	諸藩蔵屋敷出張所等総テ其地方官庁ノ指揮ニ従ハシム	三月二日	五四〇
五八九	島津久光・忠義官位辞退並賞典ノ金禄返上ノ件ヲ聴許ス	三月四日	五四〇
五九〇	藩庁諸座付屋敷払下等ノ処分方ヲ達ス	三月四日	五四一
五九一	藩庁荘内郷ノ内五箇村ノ士族ヲ梶山郷ニ編入ス	三月七日	五四二
五九二	藩庁桐野利秋ヘ大隊長ヲ命ス	三月八日	五四二
五九三	長州藩士古谷新作外三人ヲ薩藩ニ遣シ砲術ヲ練習セシム	三月七日	五四二
五九四	諸藩守衛・取締兵員並隊長姓名等ヲ開申セシム	三月九日	五四二
五九五	諸官員・宮・華族邸宅、府県出張所・藩邸・社寺止宿人姓名ヲ京都府ニ上申セシム	三月九日	五四三
五九六	島津忠義使者ヲ遣シ三條實美並岩倉具視ニ物ヲ献ス	三月十一日	五四三
五九七	鹿兒島藩兵交代ニ付外国船ヲ以帰藩セシムヘキヲ沙汰ス	三月十三日	五四四
五九八	藩庁ヨリ慰問使トシテ野津平左衛門・町田七左衛門ヲ山口藩ニ遣ス	三月十四日	五四六
五九九	黒田清隆ヲ従五位ニ叙ス	三月十四日	五四七
六〇〇	川村純義ヲ従五位ニ叙ス	三月十四日	五四七
六〇一	集議院開院ニ付キ諸藩議員ヲ四月ニ上京セシム	三月十四日	五四七
六〇二	本藩士前田十郎左衛門並徳島藩士伊月一郎ニ航海見習ノ為英國軍艦乗組ヲ命ス	三月十四日	五四八
六〇三	大風ニヨル藩財政困難ノタメ各所造営費ノ節約並東京駐在徴兵ノ半減ヲ布達ス	三月	五四八

目次

	十九日	五五二
六〇四	藩庁賄賂ノ受授ヲ嚴禁ス 三月二十日	五五五
六〇五	黒田清綱ヲ彈正少弼ト為ス 三月	五五五
六〇六	西郷隆盛位階辞退ノ聽許尽力方ヲ大久保利通ニ請フ 三月二十三日	五五六
六〇七	永山盛輝ヲ監督権大佑ト為ス 三月二十五日	五五八
六〇八	府藩県ヲシテ宣教使適當ノ人材ヲ選舉セシム 三月二十七日	五五九
六〇九	大久保利通帰京復命ニ付上京ニ及ハサルコトヲ西郷隆盛ニ達ス 三月二十七日	五五九
六一〇	吉井友實等ノ彈例錯誤ヲ譴メ謹慎ヲ命ス 三月二十八日	五五九
六一一	岸良兼養ノ勘問中ノ謹慎ヲ釈ク 三月二十九日	五六二
六一二	藩庁養蚕方会社設立ノ資金トシテ藩札ヲ發行ス 三月二十九日	五六二
六一三	大久保利通外一人へ紫組掛緒ヲ下賜ス 三月晦日	五六三
六一四	藩庁前田新之丞ヲ下荘内地頭ニ三島通庸ヲ高崎地頭ト為ス 三月	五六三
六一五	藩内ニ贗貨流通少カラスノ取締ヲ達ス 三月	五六四
六一六	天皇及ヒ藩知事一門ノ名字ヲ個人名ニ使用スルヲ禁ス 三月	五六四
六一七	戸口調査ニ当リ其録上方ノ順序ヲ達ス 三月	五六五
六一八	島津家庶流ニ直別ノ家号ヲ称スルコトヲ許ス 三月	五六五
六一九	大久保利通ノ賞典返上願ヲ聽許ス 四月二日	五六七
六二〇	兵学寮及ヒ陸軍学舎ノ規定ヲ定メ諸藩士ノ入学ヲ許ス 四月三日	五六八

六二一	伊集院兼寛ヲ鹿兒島藩權大參事ト為ス	四月三日	五六九
六二二	琉球藩取扱ニ関シ從來支那ト交際上ノ振合等調査ヲ鹿兒島藩ニ命ス	四月三日	五六九
六二三	海軍省ヲ東京ニ陸軍省ヲ大阪ニ新置ス	四月四日	五六九
六二四	朝廷ニテハ癸丑以來時事ニ奔走シカヲ困事ニ効セシ者ノ事蹟ヲ録上セシム	四月五日	五七一
六二五	癸丑以來元閔白・議伝兩奏職事等勤メタル者ノ日記其他ヲ進致セシム		五七一
六二六	諸藩ニ癸丑以來旧幕府枢要ノ職ヲ勤メシ者ノ日記其他ヲ進致セシム		五七二
六二七	静岡藩ヲシテ旧幕府日記・文書ヲ進致セシム		五七二
六二八	練兵天覽ノ節須知条件	四月五日	五七二
六二九	諸藩ヲシテ印鑑ヲ駅通司ニ進致セシム	四月八日	五七三
六三〇	英国公使・水師提督參朝ノ節ノ不都合ニ付澤宣嘉謹慎並ニ寺島宗則ノ進退伺	四月	五七三
六三一	諸藩無用ノ銅製大砲ノ買上ヲ止ム	四月十二日	五七四
六三二	獨逸公使ノ中国・四国・九州諸港巡視ヲ聴許シ之ヲ沿海諸藩県ニ告知ス	四月	五七四
六三三	福岡藩知事黒田長知藩情視察ノタメ來着島津忠義霧島ヨリ十七日帰麿ス	四月	五七五
六三四	集議院判官神田孝平諸藩公議人ニ會議ノ趣旨ヲ訓示ス	四月十三日	五七六
六三五	大久保利通ヨリ島津久光ノ上京猶予願ヲ奏上シタルコト其他ヲ知政所ニ告知ス		五七七
	四月十四日		五七七
六三六	藩士菊地主膳ノ系図並由緒書ヲ公用人田中清之進ヨリ進致ス	四月十五日	五七八
六三七	諸軍ヲ駒場野ニ親閱シ勅語ヲ賜フ	四月	五七九

目次

六三八	吉井友實ヲ民部少輔兼大藏少輔ニ任ス	四月	五八五
六三九	綸旨ヲ宣旨ニ改ム	四月二十日	五八五
六四〇	海軍天覽ヲ令ス	四月二十日	五八六
六四一	弘曆ノ外頒曆ヲ嚴禁ス	四月二十二日	五八六
六四二	外国人ニ対スル負債償却ノ目的ヲ録上セシム	四月二十二日	五八六
六四三	藩庁村田経満ヲ参政ト為ス	四月二十三日	五八八
六四四	種痘法ヲ普ク施行セシム	四月二十四日	五八八
六四五	吉井友實賞典ノ奉還ヲ願ヒ聽許セラル	四月	五八八
六四六	貨幣私鑄赦宥仰出サル	四月二十九日	五八九
六四七	罪案押印ニ小印ヲ用キシム	四月二十九日	五八九
六四八	府藩県ヲシテ自今伺届等ニ庁ヲ用ルコト莫ラシム	四月二十九日	五八九
六四九	藩庁勅命ニヨリ大参事及ヒ権大参事トシテ桂久武以下ヲ任ス	四月二十九日	五九〇
六五〇	大迫貞清ヲ鹿兒島藩権大参事ト為ス	四月	五九〇
六五一	藩庁ニ駅遞司ヨリノ達ニヨリ諸道通行印鑑ノ改正ヲ達ス	四月	五九一
六五二	藩庁ニ郷ヲ三俣及ヒ高城ト改称セシム	四月	五九一
六五三	藩庁鹿兒島神社旧別当支配所ヲ神主代ニ管セシム	四月	五九二
六五四	藩庁士分ノ過失アル者ニ親族共ヨリ自殺セシムルヲ禁シ公裁ヲ仰カシム	四月	五九二
六五五	藩庁篠原國幹ヲ参政ニ其他地頭副役等ヲ任命ス	四月	五九二

- 六五六 藩庁洋学局諸生ノ人員並俸禄ヲ定ム 四月…………… 五九三
- 六五七 山口藩知事毛利廣封木戸孝允等ヲ従へ藩情視察ノ為メ鹿兒島ニ来ル 五月二日…………… 五九四
- 六五八 藩庁篠原國幹ニ参政ヲ命シタルモ固辞シタルニヨリ大隊長ヲ命ス 五月…………… 五九七
- 六五九 上野景範ヲ民部権少丞ト為ス 五月…………… 五九七
- 六六〇 西郷隆盛ノ位記返上ヲ聴許セラル 五月…………… 五九八
- 六六一 英國留学生戸田三郎学費金並在米永井五百介等御手当金等ニ関スル伺 五月七日…………… 五九八
- 六六二 郭内外諸邸宅中発銃ヲ嚴禁ス 五月七日…………… 六〇〇
- 六六三 駅々並川場ニ免租地ヲ附スルヲ廢シ免租税高ヲ以テ交附ス 五月七日…………… 六〇〇
- 六六四 藩庁定場外ニ於テ猥ニ銃器ヲ弄フコトヲ嚴禁ス 五月八日…………… 六〇〇
- 六六五 親王・華族ノ府・藩・県学校ニ於テ修学スルヲ許ス 五月八日…………… 六〇一
- 六六六 藩庁門閥・家従・士族登用ノ制規ヲ定ム 五月九日…………… 六〇二
- 六六七 来十五日招魂社祭ニ付陸海軍ヲシテ祭砲ヲ行ハシム 五月九日…………… 六〇二
- 六六八 兵部大丞黒田清隆ヲシテ開拓次官ト為ス 五月九日…………… 六〇三
- 六六九 藩庁権大参事俸禄納付願ヲ聴許ス 五月十日…………… 六〇三
- 六七〇 藩庁郷名ヲ勝目・山田ト改称ス 五月十二日…………… 六〇四
- 六七一 藩庁神職ハ神祇道修練ノ者ヲ撰用ス 五月十四日…………… 六〇四
- 六七二 陸軍国旗章並諸旗章及兵部省幕・提灯ノ印ヲ定ム 五月十五日…………… 六〇四
- 六七三 弾正台ヨリ府藩県監察掛ニ探索ヲ命スルコトヲ令ス 五月十五日…………… 六〇四

目次

六七四	中村半次郎ノ一大隊帰藩ス	五月……………	六〇五
六七五	宮・華族・門跡尼・御所家来ノ名前・宿所等ヲ録上セシム	五月十七日……………	六〇七
六七六	華族他所ノ入学ノ輩ニ路費・支度料・月手当ヲ給付ス	五月十七日……………	六〇七
六七七	藩庁馬牛改方日限及場所ヲ指定ス	五月十七日……………	六〇七
六七八	彈正大忠海江田信義ノ謹慎ヲ釈ス	五月十九日……………	六〇八
六七九	藩庁權大参事伊地知正治ニ公議人ヲ兼ネシメ上京セシム	五月十九日……………	六〇九
六八〇	彈正少弼黒田清綱ヲ徳島藩ニ遣シ藩士私闘ノ情状ヲ審札セシム	……………	六〇九
六八一	奏任官以下参内ノ節名刺差出方ヲ定ム	五月二十二日……………	六一〇
六八二	藩庁猪獵発銃ノ乱暴ヲ戒飭セシム	五月二十八日……………	六一一
六八三	集議院開院ニ付議員ニ公平協議セシム	五月二十八日……………	六一一
六八四	府藩県ニ令シテ堤防・用水・悪水路等修繕費ヲ管内社寺領ニモ公平ニ賦課セシム	五月……………	六一二
六八五	諸藩ニ令シテ石高・戸口ヲ録上セシム	五月……………	六一二
六八六	藩庁船舶積入米穀ニ制限ヲ置クコトヲ達ス	五月……………	六一三
六八七	藩庁医学学校・病院職員ノ分担・等級ヲ改メ生徒ニモ等級及勤怠ニヨリ食料ヲ給ス	五月……………	六一四
六八八	外城方ノ役衙ヲ新設スルコトヲ達ス	五月……………	六一六
六八九	来十四日氷川祭ニ付神事中重軽服者並僧尼ノ参朝ヲ止ム	六月二日……………	六一七
六九〇	藩庁諸島風災ニ付賑恤及藩庁用途補充ノ為メ諸官ノ俸禄減給ヲ達ス	六月三日……………	六一七
六九一	大山綱良ニ權大参事同様事務取扱ヲ命ス	六月三日……………	六一九

六九二	国事犯罪者ヲ寛典ニ処セシム	六月八日	六二〇
六九三	兵庫県権知事税所篤ヲ正六位ニ叙ス	六月九日	六二〇
六九四	民部省ニ東京長崎間伝信機ヲ建造セシム	六月十日	六二〇
六九五	諸藩ニ軍防・軍務両局及軍務官等ノ諸達書類等ヲ兵部省ニ進致セシム	六月十日	六二一
六九六	藩庁足輕勤役退避ニ付テ嚴達ス	六月十二日	六二一
六九七	彈正大巡察岸良兼養ヲ長崎表ヘ差遣ス	六月十三日	六二二
六九八	楠社造営ヲ兵庫県ニ委シ金穀等寄附ハ同県ヘ納メシム	六月十七日	六二二
六九九	上野景範ヲ大蔵大丞ト為シ特例弁務使トシテ英国ニ派遣ス	六月十七日	六三〇
七〇〇	待詔局ニ建議セシ小事件ハ各官省府県ニ廻致セシム	六月十九日	六三三
七〇一	堀基ヲ開拓監事ト為ス	六月二十五日	六三四
七〇二	藩庁軍役高出米ヲ秋季定総ニ復ス	六月二十八日	六三四
七〇三	藩庁諸士持高ヲ尔後軍役高ト改称ス	六月	六三五
七〇四	藩庁足輕等ニシテ拔群ノ功勞アル者ハ身分ノ昇格ヲ許ス	六月	六三五
七〇五	藩庁管内諸神社社号改称方ヲ達ス	六月	六三五
七〇六	御国絵図改正ニ付府藩県ニ其地図ヲ進致セシム	六月	六三八
七〇七	国絵図改正ニ付各藩支配地ノ内飛地モ査点セシム	六月	六三八
七〇八	偽造宝貨律ヲ制定シ府藩県ニ即決セシム	七月二日	六三九
七〇九	藩庁再ヒ西郷隆盛ヲ大参事ト為ス	七月三日	六四〇

目次

七二〇	府藩県ニ令シ管内港灣ノ方向・広狭等ヲ録上セシム	七月五日	六四〇
七二一	諸港取調ニ付民家ノ数等ヲ查点シ外務省ニ進致セシム	七月五日	六四一
七二二	府下諸藩官邸・私邸ヲ一箇所ニ定メ其余ハ上地セシム	七月八日	六四一
七二三	府藩県ニ令シ管下諸港ノ戸数等ヲ録上セシム	七月九日	六四一
七二四	民部・大蔵ニ省ヲ分チ管轄事務ヲ分ツ	七月十日	六四二
七二五	前田十郎左衛門・伊月一郎英国ニ於テ海軍学研究ヲ行フコトヲ出願ス	七月十日	六四九
七二六	藩庁鹿兒島近在檢地ニ関シ宅地内踏入ノコトヲ達ス	七月十二日	六五一
七二七	仮ニ時価ヲ以テ錢貨ヲ通用セシム	七月十三日	六五一
七二八	藩庁藩内檢地ノコトヲ布達ス	七月十三日	六五二
七二九	在京宮・華族並元諸官人等ニ其家内人員ヲ録上セシム	七月十八日	六五三
七三〇	鹿兒島藩外三藩徴兵ノ兵食並月給等渡方規則ヲ定ム	七月十九日	六五四
七三一	開拓次官黒田清隆樺太島事務ノ兼知ヲ命セラル	七月十九日	六五四
七三二	藩庁檢地中農作上田畠地ニ障害アル樹木伐除ヲ命ス	七月十九日	六五五
七三三	小松清廉卒去ス	七月二十日	六五六
七三四	大友帝・廢帝・九條廢帝ニ諡号奉上ニ付祭典ヲ執行ス	七月二十二日	六五七
七三五	三帝祭典ニ付神事中重輕服者・僧尼ノ参朝ヲ憚ラシム	七月二十二日	六五八
七三六	大友帝・廢帝・九條廢帝ヘ諡号奉上	七月二十四日	六五八
七三七	赤塚源六ニ小艦隊ノ指揮ヲ命シ兵庫港ノ守衛ト山陽・南海海岸ヲ兼護セシム	七月二十	

- 五日……………六五八
- 七二八 藩庁検地ニ付其境標等ニ妨害セサル様敵達ス 七月二十五日……………六五九
- 七二九 横山安武時弊十条及ヒ征韓ノ非ヲ集議院ニ陳疏シテ自刃ス 七月二十六日……………六五九
- 七三〇 諸藩ニ大学南校貢進生ヲ進致セシム 七月二十七日……………六七二
- 七三一 藩庁軍務局・大蔵局ヲ合併シテ軍神社ヲ新営シ更ニ練兵場ヲ拡張セシム 七月二十七日……………六七四
- 七三二 橋口與一郎ニ学館ノ監督ヲ命ス 七月二十七日……………六七四
- 七三三 藩庁庶人ノ猥リニ刑場ニ入ルコトヲ嚴禁ス 七月二十八日……………六七五
- 七三四 鮫島尚信ヲ東京府大参事ト為ス 七月二十八日……………六七五
- 七三五 李佛兩國交戦ニ付局外中立ヲ令ス 七月二十八日……………六七六
- 七三六 府藩県ニ管内寺院本末寺号等ヲ録上セシム 七月二十八日……………六七九
- 七三七 永山盛輝ヲ伊那県少参事ト為ス 七月二十九日……………六八三
- 七三八 西郷隆盛福岡ニ出張シ同藩贖札事件ヲ周旋尽力ス……………六八三
- 七三九 藩庁聴許ヲ得スシテ神社ノ营造ヲ許サス 七月……………六八六
- 七四〇 藩庁諸郷寄留者土着転籍取扱方ヲ達ス 七月……………六八六
- 七四一 田尻務ヲ監察総裁ト為ス 七月……………六八七
- 七四二 知藩事並隠居・嫡子ヲ七節ニ参賀セシム後ニ隠居 嫡子ノ参賀ヲ停ム 七月……………六八七
- 七四三 諸藩ヲシテ願伺届等署名調印方ヲ定ム 七月……………六八七
- 七四四 藩庁下諸神社ヲ合祀シ其氏子ノ所属ヲ定ム 八月二日……………六八八

七四五 藩庁大砲塾移転ノ為メ邸地引上ヲ令ス 八月二日 六八九

七四六 鮫島尚信ヲ外務大丞ト為ス 八月五日 六九〇

七四七 元諸侯元服請願方ヲ定ム 八月五日 六九〇

七四八 兵学寮ニ教官ヲ置ク 八月七日 六九〇

七四九 城下士族ニ準シ諸郷士族ノ従僕者ノ土着ヲ聴許ス 八月八日 六九一

七五〇 寺院ニ令シ末寺ノ住職継襲等ハ各管轄庁ニ稟シテ処分セシム 八月九日 六九一

七五一 民部・大蔵ニ省所屬ノ寮司及ヒ事務章程ヲ更定ス 八月九日 六九二

七五二 販売鴉片煙律及ヒ生鴉片取扱規則ヲ頒布ス 八月九日 六九四

七五三 支那人ノ我カ童男女ヲ買取ル者ヲ提警セシム 八月十三日 六九六

七五四 普佛戰爭見聞ノ為大山巖・品川彌次郎・林有造ヲ歐洲ニ差遣ス 八月十四日 六九七

七五五 藩庁西郷隆盛ヲ以テ鹿兒島藩ノ大參事ト為ス 八月十五日 七〇二

七五六 有馬次兵衛ヘ李瀟生国留学ヲ命ス 八月十七日 七〇二

七五七 藩庁横山安武ヘ下賜ノ祭祀料目錄ヲ返上稟請ス 八月十八日 七〇三

七五八 海江田信義ヲ奈良県知事ト為ス 八月十九日 七〇三

七五九 税所篤ヲ堺県知事ト為ス 八月十九日 七〇四

七六〇 府藩県ヨリノ上納金並囚人等護送中ノ宿泊所ニ不寝番ヲ置カシム 八月二十日 七〇四

七六一 西郷従道ヲ兵部権大丞ト為ス 八月二十二日 七〇五

七六二 本藩並金澤以下十九藩ニ民政ニ熟練ノ者各一人ヲ撰出セシム 七〇五

七六三	諸藩及旧幕旗下土地村々四五年検見ノ上豊凶平均ヲ見テ定免ヲ稟候セシム	八月二十
	四日	七〇六
七六四	大山巖歐洲派遣ノ同行ヲ吉田清成ニ命ス	八月二十五日
七六五	藩庁郷士持高兼併ノ積弊ヲ矯メ一郷中協心戮力スヘキヲ令ス	八月二十五日
七六六	鹿兒島藩士湯地定基ヘ米因留学ヲ命ス	八月二十五日
七六七	兵部省ヨリ深川仙臺堀鹿兒島藩上邸跡ノ貸与方ヲ稟請ス	八月二十五日
七六八	藩庁従来宮繕役職ノ輩ニ与フル慰勞金ノ給与方ヲ停止ス	八月二十七日
七六九	宇佛兩國交戦中局外中立ノ前令ヲ改メ更ニ府藩県ニ令ス	八月二十九日
七七〇	藩庁一二等官役職者ノ俸給差減率ヲ令ス	八月
七七一	藩庁管内里程改定表ノ建設方ヲ令ス	八月
七七二	藩庁伊藤彦介ヲ以テ家令ト為ス	八月
七七三	藩庁三帝追諡ノコトヲ藩内ニ令ス	八月
七七四	藩庁外国人雇使規則ヲ藩内ニ達ス	八月
七七五	各藩支配地收納六箇年平均額ヲ録上セシム	八月
七七六	米金授受ノ節勘合印影ヲ進致セシム	八月
七七七	騎兵・砲隊・銃中队半隊長以下ノ月給額ヲ定ム	八月
七七八	町田久成ヲ以テ大学大丞ト為ス	九月二日
七七九	鹿島・香取両社遙拜ニ付諸官省長官ヲ參朝セシム	九月二日

目次

七八〇	申ネテ逃籍士民ノ復貫条規ヲ頒ツ	九月四日	七二六
七八一	藩庁民事局人別方出銭定額ヲ令ス	九月四日	七二八
七八二	諸官員並宮・華族ノ家来下向滞在者ニ留守官印鑑ヲ交付ス	九月四日	七二八
七八三	諸官員・宮・華族等家来ノ氏名・居所ヲ京都府ニ開申方ヲ止ム	九月五日	七一九
七八四	宮・華族・門跡等家来ノ氏名・宿所ヲ弾正台ニ開申方ヲ改ム	九月五日	七一九
七八五	弾正台京都出張所ヲ廢ス	九月五日	七一九
七八六	集議院長官・判官及ヒ議員ヲ參朝セシム	九月八日	七一九
七八七	越中島ニテ薩・長・土・肥四藩兵ノ操練ヲ天覽偶暴風雨ニテ遽ニ還幸セラル	九月	七二〇
七八八	藩制太政官ヨリ布告セラル	九月十日	七二四
七八九	諸藩知事一門ノ輩ニ位階ヲ賜フヲ停ム	九月十日	七二六
七九〇	皇族・華族ノ臣隸職員ヲ定ム	九月十日	七二六
七九一	集議院ヲ閉ツ	九月十日	七二七
七九二	集議院議員ヲ帰藩セシム	九月十日	七二七
七九三	三條右大臣ニ練兵代覽ヲ令ス	九月	七二七
七九四	大中小藩大属以下ノ官位相当ヲ定ム	九月十三日	七三五
七九五	鮫島尚信へ歐羅巴派遣ヲ命ス	九月十三日	七三六
七九六	藩庁硫黄島・口永良部詰ノ検事ヲ廢シ生産奉行ニ之ヲ管セシム	九月十四日	七三六
七九七	藩庁城下外城ニ至ルマテ諸屋敷ノ檢地取扱方ヲ令ス	九月十四日	七三七

七九八	東京徴兵第四大隊鹿兒島ニ帰着ス	九月……………	七三九
七九九	諸藩ノ願伺等ハ自今藩名ヲ以テ之ヲ進致セシム	九月十七日……………	七四一
八〇〇	藩制発令前正権大少参事在職・解官共更ニ稟候セシム	九月十九日……………	七四一
八〇一	庶人氏ヲ称スルヲ許ス	九月十九日……………	七四二
八〇二	天長節百官及ヒ外国使臣ニ醮宴ヲ賜フ	九月……………	七四二
八〇三	宮・華族ヲシテ其家十三代相恩ノ者ヲ録上セシム	九月二十三日……………	七四六
八〇四	町田久成実名ヲ通称ニモ使用ヲ届出ツ	九月二十五日……………	七四七
八〇五	海軍資金上納方ヲ定ム	九月二十五日……………	七四七
八〇六	従前ノ軍資金ヲ廢ス	九月二十五日……………	七四七
八〇七	藩庁軍務局墊移転ニヨリ軍務局前通り往来止メヲ令ス	九月二十七日……………	七四七
八〇八	府藩県管内開墾地規則ヲ定ム	九月二十七日……………	七四八
八〇九	藩庁士族持高増減毎二届出方ヲ令ス	九月二十八日……………	七四九
八一〇	諸藩ノ常備兵額ヲ定ム	九月二十八日……………	七四九
八一一	藩庁谷山宮締人外三締人ヲ廢止ス	九月二十九日……………	七五〇
八一二	米三十万石及ヒ諸藩所納ノ海軍資金ヲ以テ海軍費ニ充ツ	九月二十九日……………	七五〇
八一三	銀台二分金十二月十五日ヲ限り引替シム	九月二十九日……………	七五〇
八一四	藩庁士族ノ御免借地ノ年貢上納ヲ当分通りトス	九月晦日……………	七五〇
八一五	諸藩参事在京判任黜陟ノ開申及石高称呼ノ方ヲ定ム	九月晦日……………	七五一

八二六	藩庁楽長並楽隊小頭長ヲ置ク	九月	七五一
八二七	藩庁黒田彦左衛門ヲ以テ三俣外二郷ノ地頭ト為ス	九月	七五二
八二八	藩庁梶山・勝岡ヲ合セ上荘内地頭ニ高原・高崎ヲ合セ小林地頭ニ夫々管轄ヲ移ス	九月	七五二
八一九	藩庁借地払方心得ノ事項ヲ令ス	九月	七五二
八二〇	常備兵員ヲ定メ海軍ハ英国式陸軍ハ佛国式ヲ採ル	十月二日	七五四
八二一	海軍旗・皇族旗・大中小旗等ノ徽章ヲ定ム	十月三日	七五六
八二二	海軍学寮創立ニ付府藩県ノ海軍志願者ノ姓名等ヲ録上セシム	十月三日	七五九
八二三	藩庁神道ノ講義ヲ開キ一般ニ聴聞セシム	十月七日	七五九
八二四	安藤則命ヲ東京府大属ト為ス	十月七日	七六〇
八二五	藩庁横山安武ヲ靖献霊社ニ合祀ス	十月八日	七六〇
八二六	永山盛輝ヲ伊那県大参事ト為ス	十月九日	七六二
八二七	諸藩歳出入表及編制例則・分類略解ヲ頒ツ	十月九日	七六三
八二八	卒族ヲ卒ト单称セシム	十月九日	七六三
八二九	諸藩庁並藩邸・飛地出張所等門・玄関紋ノ幕挑灯ヲ使用セシム	十月十日	七六三
八三〇	弾正少弼黒田清綱帰省願ヲ提出ス	十月十二日	七六四
八三一	諸藩知事朝集ノ順序ヲ定ム	十月十三日	七六四
八三二	藩庁屋久島在番ノ職制ヲ廃止ス	十月十四日	七六七
八三三	宮・華族家十三代相恩者ニ查点条件ヲ定ム	十月十五日	七六七

八三四	華族隱居剃髮ノ輩ヲシテ復飾セシム	十月十五日	七六七
八三五	職員記名ノ界紙並書式ヲ諸藩ニ交付ス	十月十七日	七六七
八三六	外国公使旅行ノ節取扱方ヲ定ム	十月十七日	七六八
八三七	藩庁有馬新助ヲ鹿屋・始良・大始良・高隈ノ地頭ト為ス	十月十七日	七六九
八三八	諸御門警衛ヲシテ宮・華族家人・職員中ノ執事ヲ家令ト改称セシム	十月十八日	七六九
八三九	酒井忠篤來麿ニ付其接待方ヲ令ス	十月十九日	七六九
八四〇	河島醇ヘ東伏見宮英国留学ノ随從ヲ命ス	十月二十日	七七〇
八四一	地方官朝賀規則ヲ定ム	十月二十二日	七七一
八四二	元旦及天長節両辰士族ノ拜賀ハ府藩県長官ヲシテ之ヲ受ケシム	十月二十二日	七七一
八四三	藩庁定時用封ノ煩多ニ過クルヲ以テ之ヲ戒メ制限セシム	十月二十二日	七七一
八四四	藩庁織物所ヲ蚕織方ト改称ス	十月二十二日	七七三
八四五	林清康ヲ兵部少丞ト為シ従六位ニ叙ス	十月二十二日	七七三
八四六	押小路三丸英国勤学ニ付西直八郎ヘ随從ヲ命ス	十月	七七三
八四七	神祇官ヲシテ大小神社順序定額並祭典式神官職制等ヲ查点セシム	十月二十五日	七七四
八四八	元中大夫席菊池次郎家来小河小藤太ヘ留守史生ヲ命セラル	十月二十五日	七七四
八四九	藩庁国鈔引換及ヒ其取扱順序ヲ令ス	十月二十七日	七七四
八五〇	諸官員・宮・華族以下京都府下人民抱入方ヲ定ム	十月二十八日	七七五
八五一	兵部省管轄兵隊復籍後府藩県ニ任用ノトキハ兵部省ニ稟候セシム	十月二十九日	七七六

目 次

八五二	藩臬各管内石炭等産出ノ地名並産額ヲ録上セシム	十月	七七六
八五三	藩庁敬神説略ヲ刊行シ一般ニ頒売ス	十月	七七六
八五四	諸郷蔵々貢米收納ニ関シ繩俵等粗製方ヲ戒飭セシム	十月	七七七
八五五	天長節定マリ之ヲ藩内ニ達ス	十月	七七七
八五六	藩庁自今諸願ノ稟請ニハ藩名ヲ用ヰルコトヲ令ス	十月	七七八
八五七	藩庁医学校兼病院職員ノ等級ヲ定メ新ニ職員ヲ置ク	十月	七七八
八五八	藩庁医学校並病院生徒取締及ヒ授読等ノ規則ヲ定ム	十月	七七九
八五九	鮫島尚信ヲ少弁務使ト為シ英・佛・亨へ差遣ス	閏十月二日	七八〇
八六〇	鮫島武之助ノ自費佛國遊学ヲ聴ス	閏十月二日	七八一
八六一	外務省中大中少弁務使・正權大少記ヲ置ク	閏十月二日	七八一
八六二	知藩事臨時出京ノ節ハ予メ稟候セシム	閏十月二日	七八二
八六三	旧垂水・宮之城屋敷ヲ練兵場トナス	閏十月二日	七八二
八六四	朝廷ニ於テ賞秩渡方ヲ定ム	閏十月三日	七八二
八六五	森有禮ヲ少弁務使ト為シ米國駐劄ヲ命ス	閏十月	七八三
八六六	松方正義ノ日田県知事ヲ罷メ民政部大丞ト為ス	閏十月三日	七八三
八六七	藩庁現米壺石ヲ以高壺石ト為ス	閏十月三日	七八四
八六八	藩庁夏作賦課ヲ免シ麦作培植方ヲ令ス	閏十月三日	七八四
八六九	貢進生学費ハ各藩適宜本人ニ交付セシム	閏十月四日	七八四

八七〇	大久保利通ノ民部省御用掛ヲ解ク	閏十月五日	七八五
八七一	藩庁紙札発行ニ付通融方ヲ令ス	閏十月五日	七八五
八七二	官省關係ノ事件ハ来ル十一月ヨリ弁官ニ進達セシム	閏十月七日	七八五
八七三	諸向願伺届等弁官ヨリ其官省ニ廻付シ官省查点後太政官ニ進致セシム	閏十月七日	七八六
八七四	藩庁練兵中国旗ヲ掲ケ通行人ヲ戒飭セシム	閏十月十二日	七八六
八七五	新金引換期限ヲ藩内ニ伝達ス	閏十月十二日	七八六
八七六	海軍学寮生徒募集ニ付之ヲ藩内ニ伝達ス	閏十月十二日	七八七
八七七	新金引替方留守官管轄官・華族以下ニ達ス	閏十月十五日	七八七
八七八	華族隱居願並元服及養子願ノ規程ヲ定ム	閏十月十七日	七八八
八七九	士族隱居・養子兩願ノ規定ヲ定ム	閏十月十七日	七八八
八八〇	天社神道土御門家免許ヲ禁ス	閏十月十七日	七八八
八八一	藩庁南方郷内鹿籠村ヲ分割ス	閏十月十七日	七八八
八八二	諸藩ノ陸軍生徒ヲ大阪兵学寮ニ出サシム	閏十月二十日	七八九
八八三	岸良兼養小倉出張ニ付金ヲ賜フ	閏十月二十日	七八九
八八四	川村純義ヲ兵学頭ニ兼任ス	閏十月二十三日	七九〇
八八五	脱籍無産ノ輩復籍ノ節府藩県護送者等ノ賄方ヲ定ム	閏十月二十三日	七九〇
八八六	官・華族並諸官員ノ家来等復籍シ難キ者其旧籍・行状等ヲ録上セシム	閏十月二十四日	七九〇
八八七	海軍資金上納石代相場ヲ定ム	閏十月二十六日	七九一

目次

八八八	藩庁下馬札ヲ設ケ下乗札ヲ廢棄ス	閏十月二十七日	七九一
八八八	藩庁田中清之進ヲ伝事ト為ス	閏十月二十七日	七九一
八八〇	府藩県管内社祠ノ祭神・班次・領地及ヒ祠官・職位等ヲ檢覈録上セシム	閏十月二十八日	七九一
八八一	山口藩通逃ノ徒取締ヲ布告ス	閏十月二十八日	七九二
八八二	藩庁庶民七拾九歳以上ノ者ヲ查点シ稟告セシム	閏十月二十九日	七九三
八八三	藩庁新嘗祭ト併セ鶴嶺神社ノ祭祀ヲ行フ	閏十月二十九日	七九三
八八四	藩庁附士分地別立許可ニ制限ヲ置ク	閏十月二十九日	七九三
八九五	藩庁島津家祖靈看守ノコトヲ達ス	閏十月	七九四
八九六	藩庁書記並書記見習ヲ任命ス	閏十月	七九四
八九七	民事局居宅検地ノ手續ヲ令ス	閏十月	七九四
八九八	新金引換手續ヲ定メ其取扱方ヲ令ス	十二月	七九六
八九九	府藩県ニ令シテ斗南藩貨幣偽造ノ徒ヲ緝捕シ律ニ照シテ処断セシム	十一月三日	七九七
九〇〇	華・土族ノ縁組規則ヲ定ム	十一月四日	七九七
九〇一	特旨ヲ以公現王ノ宮号復活並改名ト普国留学ノ請ヲ聴ス		七九八
九〇二	太政官制服ヲ定ム	十一月五日	七九九
九〇三	正租雑税不当ノ仕来取調ノ事ヲ布告ス	十一月五日	八〇〇
九〇四	中村博愛ニ兵部省出仕並大坂出張ヲ命ス	十一月五日	八〇〇
九〇五	諸藩雇ノ外国船乗組官員旅費ノコトヲ達ス	十一月九日	八〇〇

- 九〇六 諸藩支配所漬地代米永ヲ廢シ高内引ト為サシム 十一月九日 八〇一
- 九〇七 黒岡帯刀ニ英國勤学ヲ命ス 十一月九日 八〇一
- 九〇八 府藩県他貫属士族借受ノ節双方ヨリ開申セシム 十一月十日 八〇一
- 九〇九 銀台二歩金ノ引替方ヲ申ネテ十二月十五日迄延期ス 十一月十日 八〇一
- 九一〇 徴兵規則ヲ頒ツ 十一月十三日 八〇二
- 九一一 帯刀ノ者横濱其他外国居留地関門通行ニ印鑑ヲ使用セシム 十一月十四日 八〇四
- 九一二 官員外ノ者ニ宣教掛ヲ命スルトキハ参事或ハ属准席タラシム 十一月十四日 八〇五
- 九一三 百姓・町人ノ袴高袴・割羽織着用並長脇差ヲ禁ス 十一月十四日 八〇七
- 九一四 北海道流所規定成立迄ノ間准流法ヲ設ク 十一月十七日 八〇七
- 九一五 開拓次官黒田清隆ヲ欧州並清国ニ差遣ス 十一月十七日 八〇八
- 九一六 元武家華族東京住居仰付ラル 十一月二十日 八〇八
- 九一七 京都府ニ字魯西人ヲ雇入語学ヲ教授シ伝習ヲ欲スル者ハ出願セシム 十一月二十日 八〇九
- 九一八 露国軍艦アルマ号鹿兒島ニ入港ス 十一月 八〇九
- 九一九 南校外国教師ヲ傷ツケシ者ノ搜索ヲ達ス 十一月二十四日 八一〇
- 九二〇 吉井友實ヲ民部大丞ト為ス 十一月二十五日 八一二
- 九二一 伊東祐磨ヲ海軍少佐・龍驤艦副長ト為ス 十一月二十五日 八一三
- 九二二 勅使岩倉具視ヲ薩長ニ遣シ参議木戸・大久保ヲ各其藩ニ遣ス 八一三
- 九二三 川村純義ニ大坂出張ヲ命セラル 十一月 八二七

目 次

九二四	中島四郎ヲ龍驤艦艦長ニ伊東祐磨ヲ同副艦長ニ任ス	十一月二十七日	八二八
九二五	鹿兒島藩献上ノ春日艦ニ付兵部省稟申ス	十一月二十五日	八三〇
九二六	府藩儀寺院廃合ノ分寺号・宗派等ヲ檢覈録上セシム	十一月二十八日	八三一
九二七	府藩儀交渉訴訟准判規程ヲ頒ツ	十一月二十八日	八三一
九二八	府藩儀ヲシテ各其管内社寺領現収六箇年平均ヲ録上セシム	十一月二十八日	八三四
九二九	山口藩通逃ノ徒豊後地方ニ横行ス	十一月二十九日	八三五
九三〇	民部大丞松方正義ヲ日田県ニ差遣ス	十一月晦日	八三六
九三一	春日艦ニ横濱港警衛並ニ諸港応援ヲ命ス	十一月晦日	八三九
九三二	大山綱良ニ上京ヲ命ス	十一月	八三九
九三三	外国公使旅行ノ節取扱方ヲ藩内ニ達ス	十一月	八三九
九三四	藩庁公用方ヲ庶務方ト改称ス	十一月	八四一
九三五	藩庁廃寺ニ於ケル僧侶ノ活路ナキ者ヲ稟申セシム	十一月	八四一
九三六	藩内諸官社代拝ノ節頭頭在番ニ支障アルトキハ副役・詰檢事ヲ代理セシム	十一月	八四一
九三七	糺明局宗門掛ヲ解キ本局ニテ之ヲ取扱フ	十一月	八四一
九三八	藩庁皇軍神社十座ヲ列祀スルコトヲ令ス	十一月	八四二
九三九	藩庁蚕糸養殖ヲ奨励シ製品買上方ヲ達ス	十一月	八四二
九四〇	加藤權兵衛ヲ長島地頭ト為ス	十一月	八四三
九四一	川畑伊右衛門ヲ伊作外五郷ノ地頭ト為ス	十一月	八四三

九四二	田原陶吉ヲ大隊長ト為ス	十一月	八四三
九四三	藩庁諏訪瀬島ノ開拓ヲ聴ス	十一月	八四三
九四四	藩庁皇軍神社遷座式執行ヲ令ス	十二月朔日	八四五
九四五	赤塚源六海軍中佐ヲ辞スルモ聴許ナシ	十二月三日	八四五
九四六	侍従高辻修長ヲ京都ニ遣シ勅書ヲ岩倉具視ニ伝フ	十二月三日	八四六
九四七	黒田清隆ヨリ岩倉具視ヘ書翰	十二月五日	八四八
九四八	藩庁岩倉具視下向ニ付警衛奉迎方ヲ達ス	十二月十五日	八四八
九四九	勅使下向ニ付民事局外五局ヘ接待方ヲ令ス	十二月	八四九
九五〇	藩庁勅使岩倉具視來藩ニ付一般ニ達シ戒飭セシム	十二月十八日	八四九
九五一	岩倉具視鹿兒島城内滞在ヲ辞シ客屋滞留ニ付ソノ旨ヲ藩内ニ令ス	十二月二十日	八五二
九五二	藩庁勅使登城ニ付歡迎並警衛方等ノ準備手續ヲ令ス	十二月	八五二
九五三	勅使練兵閲覽アルコトヲ令ス	十二月	八五四
九五四	勅使入城島津久光代忠義勅書ヲ拜受ス	十二月二十三日	八五五
九五五	島津久光岩倉具視ニ勅書ノ請書ヲ奉呈ス	十二月二十四日	八五七
九五六	勅使ノ発途ヲ示シ其時日ヲ沿道ニ達ス	十二月	八五九
九五七	岩倉勅使其従士北村繁ヲ久光・忠義ニ遣ハシ淹留中ノ款待ヲ謝ス	十二月二十八日	八六〇
九五八	鹿兒島藩士種子田清一外三名ヲ勤学ノ為メ米國ヘ差遣サル	十二月三日	八六三
九五九	藩庁東目諸郷ニ作硝廠設立ノ計画ヲ令ス	十二月十日	八六五

目 次

九六〇	皇族・旧堂上・華族及ヒ旧官人以下ノ禄制ヲ定メ地方貫屬タラシム	十二月十日	八六五
九六一	禄制改定ニ付宮・華族ニ諭達ス	十二月十日	八六七
九六二	諸藩海軍資金上納濟大蔵省証印ヲ以テ兵部省ニ開申セシム	十二月十四日	八六七
九六三	諸藩海軍資金一季上納毎ニ大蔵省ヨリ兵部省ニ交付セシム	十二月十四日	八六七
九六四	在藩知事・非役華族ノ天機伺及参事・属等ノ参朝ヲ止ム	十二月十四日	八六八
九六五	藩庁大工日雇賃銀ノ定限ヲ定ム	十二月十五日	八六八
九六六	鹿兒島藩士川南門次郎ノ所属勤務指定ニ関シ伺	十二月十五日	八六九
九六七	宮・華族ノ輩士族・卒相對抱ヲ止メ家人規則ヲ定ム	十二月十五日	八六九
九六八	宮・華族ノ家来三代以下ノ者ノ出所・姓名ヲ録上セシム	十二月十五日	八七〇
九六九	前田獻吉及高橋新吉西洋各国経歴願ニ対スル弁官ヨリ外務省ヘノ稟申	十二月十八日	八七〇
九七〇	乾行艦乗組一統ノ賜暇鹿兒島藩知事出願ニ付キ兵部省ヨリ弁官ヘ稟申	十二月十九日	八七〇
九七一	四條隆訶巡察使トシテ日田県差向ニ付林清康ニ同行ヲ命ス	十二月十八日	八七一
九七二	藩庁一門登城ノ節昇降口並控口ヲ指定ス	十二月十九日	八七二
九七三	野村盛秀ヲ日田県知事ト為ス	十二月十九日	八七二
九七四	藩庁神社境内ノ竹木等伐採スルヲ禁ス	十二月二十日	八七三
九七五	相州劍崎ニ燈明台ヲ建設シ来正月十一日ヨリ点火ヲ令ス	十二月二十日	八七三
九七六	在官及非役有位ノ輩署名式ヲ定ム	十二月二十二日	八七四
九七七	大蔵省ニ令シテ新二度量衡ヲ製セシム	十二月二十二日	八七四

- 九七八 各藩常備兵編製定則ヲ頒ツ 十二月二十二日…………… 八七四
- 九七九 海外留學生官私ノ規則ヲ定メ大學ニ隸ス 十二月二十二日…………… 八七六
- 九八〇 在官並有位ノ輩署名式・平日往復文書等ハ略式ヲ用イシム 十二月二十三日…………… 八七八
- 九八一 民部大丞吉井友實・兵部權少丞澤宣種ニ徵兵三中隊ヲ付シテ中野県ニ赴カシム 十二月二十四日…………… 八七八
- 九八二 私ニ寺院ヲ処分スルヲ禁ス 十二月二十四日…………… 八八〇
- 九八三 請人証書無キ者ノ雇役ヲ禁ス 十二月二十四日…………… 八八一
- 九八四 庶人ノ双刀ヲ佩スルヲ申禁ス 十二月二十四日…………… 八八一
- 九八五 文武諸技芸師家ノ私塾ヲ開ク者ハ地方官許可ヲ受ケシム 十二月二十四日…………… 八八一
- 九八六 三府及ヒ開港場警備規則ヲ頒チ藩県モ之ニ準拠セシム 十二月二十四日…………… 八八二
- 九八七 岩下方平ニ官祿ノ三分ノ一ヲ終身下賜シ東京府貫屬ヲ命ス 十二月二十四日…………… 八八三
- 九八八 三俣郷内飛地村落ヲ山之口郷ニ併合ス 十二月二十五日…………… 八八四
- 九八九 御記録編輯ニ付華族現存者ノ履歴ヲ録上セシム 十二月二十六日…………… 八八四
- 九九〇 諸藩ノ製造札二通ヲ大蔵省ニ進致セシム 十二月二十七日…………… 八八五
- 九九一 藩庁西郷隆盛ニ勅使ニ附隨シ出府ヲ命ス 十二月二十八日…………… 八八五
- 九九二 藩庁式内・式外ノ神社十八社及五社ニ奉幣使ノ次第並年頭祝賀ノ順序ヲ令ス 十二月…………… 八八五
- 九九三 忠義公所勞ニ付正月遙拝式ニハ出座ナク諸神社ヘ獻幣使ヲ遣ス 十二月二十九日…………… 八八七
- 九九四 藩庁民事局城下土ヘ植杉料金ノ賦課並納期ヲ達ス 十二月…………… 八八七

九九五	藩庁下検地ノ心得ヲ達ス	十二月	八八八
九九六	藩庁紙札引換期限延長ヲ令ス	十二月	八八八
九九七	紙札真贋鑒別ノ為鑒定人ヲ新シク置ク	十二月	八八九
九九八	藩庁図書講義日ヲ定メ五等以上ニ聴聞ヲ許ス	十二月	八八九
九九九	火薬運搬ノ通行路ヲ指定シ之ヲ戒飭ス	十二月	八九〇
一〇〇〇	伊久ヲ島津第七代ニ加ヘル	十二月	八九〇
一〇〇一	来十五日島津忠義御書院ニ出座初謁見ノコトヲ達ス	十二月	八九三
一〇〇二	福昌寺門前ヲ池上下改称ス	十二月	八九四
一〇〇三	藩庁銃器擅使者ノ過失ノ罪律ヲ擬定シ一般ニ戒飭ス	十二月	八九四
一〇〇四	藩庁射的場内ニ入り銃丸採掘スル者ヲ嚴禁ス	十二月	八九五
一〇〇五	朝廷海軍新設ニ付藩庁ノ海軍方ヲ廢止ス	十二月	八九五
一〇〇六	藩庁新金引換ニ会計局預札ヲ發行スルコトヲ達ス	十二月	八九五
一〇〇七	藩庁窃盜等ノ警戒ヲ嚴ニセシム	十二月	八九六
一〇〇八	島津忠義所勞ニヨリ新年ノ諸礼式等ヲ中止ス	十二月	八九六
一〇〇九	藩庁島津齊彬ノ真影ヲ照國社へ廣大院画像ヲ神産日神社ニ合祀ス	十二月	八九七
一〇一〇	記録編輯ニ付維新以來朝官拜命ノ者ノ履歴ヲ録上セシム	十二月	八九八

明治四年(辛未)

- 一〇二一 藩庁年初ノ式礼ヲ達ス 正月朔日 …………… 八九九
- 一〇二二 勅使乗船ニ搭シ西郷・大久保等上京ス 正月二日 …………… 八九九
- 一〇二三 社寺領ノ上地ハ府藩県ニ管轄セシム 正月五日 …………… 九〇〇
- 一〇二四 勅使一行三田尻ニ着船上陸ス 正月六日 …………… 九〇一
- 一〇二五 藩庁有馬新助外二名ニ地頭ヲ命ス 正月十日 …………… 九〇二
- 一〇二六 藩庁鶴ヶ嶺神社及新嘗祭ノ祭日ヲ達ス 正月十日 …………… 九〇二
- 一〇二七 西郷・大久保毛利親子ト時務ヲ議ス 正月十日 …………… 九〇二
- 一〇二八 私ニ空地開墾或ハ地目変換ヲ禁シ漸時定制ニ帰セシム …………… 九〇三
- 一〇二九 西郷・大久保・木戸等高知ニ発航ス 正月十六日 …………… 九〇三
- 一〇三〇 藩庁指南役ノ職級ヲ置クコトヲ達ス 正月十二日 …………… 九〇四
- 一〇三一 浮浪ノ徒豊後地方ニ横行スルヲ以テ京阪・箱館・新潟地方ノ警備ヲ命ス 正月十七日 …………… 九〇四
- 一〇三二 藩庁刀剣ノ技術研磨スヘキコトヲ訓達ス 正月 …………… 九〇五
- 一〇三三 藩庁小学校員外諸生入学ヲ聴ス 正月十八日 …………… 九〇六
- 一〇三四 高知藩庁・文武館・騎兵屯所等見物ス 正月 …………… 九〇六
- 一〇三五 高知藩知事西郷等ノ議ヲ容レ追テ確答ノ旨ヲ答フ 正月二十日 …………… 九〇七
- 一〇三六 藩庁地頭副役ヲ罷メ民事職役ニ兼掌スルコトヲ達ス 正月二十五日 …………… 九〇七
- 一〇三七 藩庁盗難等ノ事変ハ巡察方江申告スヘキヲ達ス 正月二十七日 …………… 九〇八

目 次

一〇二八	藩庁地頭ノ職責ヲ訓示シ管掌ノ条件処分ヲ達ス	正月二十七日	九〇八
一〇二九	西郷・大久保等一行外国船ニテ東京ニ向フ	正月	九〇九
一〇三〇	徴兵ノ行装料及ヒ旅費定則ヲ頒ツ	正月晦日	九一〇
一〇三一	藩庁小学校生徒操行ヲ慎ムコトヲ達ス	正月晦日	九一一
一〇三二	藩庁生子隠殺ヲ戒飭シ其罪条ヲ達ス	正月十日	九一一
一〇三三	藩庁本学校及小学校ヲ設置シ職員ノ等級ヲ達ス	正月十日	九一二
一〇三四	藩庁小学校生徒入学人員及其手續ヲ達ス	正月	九一三
一〇三五	藩庁検地着手ノ期ヲ定メ其注意ヲ達ス	正月	九一三
一〇三六	藩庁検地職員宅地等立入ノ旨ヲ達ス	正月	九一四
一〇三七	藩庁十二夜祭ヲ停止シ宮比神初午祭ヲ挙行スルコトヲ達ス	正月	九一四
一〇三八	贖金兌換ノ期過クルニ由リ極印下付スヘキヲ令ス	正月	九一五
一〇三九	上納金ニ付大蔵省ヨリ達ス	正月	九一五
一〇四〇	諸藩ノ私ニ租法ヲ改正スルヲ禁ス	正月	九一五
一〇四一	新潟外国人居留地関門通行其所轄ノ印鑑ヲ用ユヘキヲ達ス	正月	九一五
一〇四二	西郷隆盛小話三節池上日記		九一六
一〇四三	寺師宗道日記	正月	九一六
一〇四四	道島正亮日記		九一七
一〇四五	海舟秘記		九一七

一〇四六	日光山一件	正月……………	九一八
一〇四七	廣澤參議變死二付司法卿へ上申案……………		九一九

明治元年(1868)

〔稿本表紙〕

明治元年
十月 忠義公史料 一

〔稿本にて補正〕

一 大総督府ヨリ本藩等五藩へ長日月参戦ノ
功ヲ感賞シ、凱陣休戦ノ旨令セララル

明治元年十月朔日、大総督府本藩及ヒ長門・土佐等ノ五
藩ニ令シテ、長日月参戦ノ功ヲ感賞シ、凱陣休兵セシム、
其ノ文左ノ如シ、

各通

薩州兵隊

長州兵隊

土州兵隊
彦根兵隊
大垣兵隊

春已来長々出張遂苦戦、遂ニ賊城ヲ令没落候段、深ク
感賞被

思召候、依テ速ニ凱陣休兵可致旨

御沙汰候事、

十月

東征総督記 朔日、
井伊直憲家記・大垣藩記

総督記ニ、各通ニテ二本松へ出ストアリ、

二 藩庁ニテ管内米穀密輸出取締ノ事ヲ達ス
コノ日、藩庁ニテ管内米穀密輸出取締ノ事ヲ達ス、其ノ
文左ノ如シ、

今般上方表米価、別て致騰貴候哉ニ相聞得、御領内之
儀は、全体米穀不足之場所候処をも不顧、奸商之者共
密々米穀積出候儀も難計、抜物取締之儀は、兼て申渡
置候趣も有之候得共、尚又御当地は勿論、諸郷・私領
津々浦々迄、嚴重取締行届候様、津畑出張抜物取締横
目并番所詰横目江申渡、地頭・領主・郡奉行・取納米

差引横目江も早々可申渡候、

明治元年辰十月朔日

川上久麿
龍衛

三 本藩兵若松城下撤退ノ概況島津伊勢日記

二日、是ヨリ先若松城下ニ集リタル官軍ノ諸部隊モ、若松城開城、容保父子降服謹慎ニ付、漸次凱旋ノ途ニ就キタルカ、吾藩ノ残部隊モ警衛兵ヲ除クノ外、悉ク此ノ日撤退シタリ、其ノ概況左ノ如シ、

島津伊勢日記

朔日^十 雪甚シ

薩州藩

三小隊

肥後父子等御所置被仰渡迄ノ間、当地警衛被仰付候条、在陣各藩申談可相勤候事、

十月

右ノ通惣督正親町様ヨリ被仰渡候付、番兵六番隊・諸組遊撃隊・私領^{宮之}城^之四番隊臼砲手当、城下為警衛召揃、本宮方ヨリ為差引、和田矢之助・梅北休兵衛相残居候間、相達候事、

一、九番隊

一、十一番隊

一、十二番隊

一、三番大砲隊

一、彈葉警衛

一、番兵一番隊

一、私領^{知覽}鹿^鹿二番隊

右明二日七字出立ニテ左ノ通、

二日^{重下}壺落シ一泊

三日苗代田一泊

四日二本松着

一、七番隊

一、輜重警衛隊

一、外城二番隊

一、外城四番隊

一、私領^{加治}木^三番隊

右八字出立ニテ左ノ通、

二日關ノ脇一泊

三日横川一泊

四日二本松着

右ノ通諸隊江相達候事、

一私領一番隊ノ儀ハ、猪苗代勤番ニテ、今朝ヨリ当地線出、近々米澤人数江交番ノ筈候事、

一米澤ノ方江差越候得能良助ヨリ問合ノ趣、庄内表モ既ニ平治ニ属シ、当地在陣ノ諸兵隊戦功ノ次第、監軍江

相達、巨細書面ヲ以テ取調差出候様、左候ハ、
朝廷向江御届可相成トノ儀、小松帯刀殿ヨリ致承知候
付、其通相達可呉トノ事候間、島津隼人殿江モ引合置、
拙者一列ノ兵隊ハ、於二本松諸隊江相達管候事、

二及候儀、伊勢守不堪感泣候、依之微力行届兼候得共、
聊豊國之祠ニ薄奠ヲ供度奉存候間、此段被 仰付被下
候ハ難有仕合奉存候、伊勢守御暇ヲ賜リ帰邑罷在候間、
前条之儀不取敢家来共ヲ以奉申上候、可然御奏達奉願
上候、以上、

四 毛利高謙瓦ヲ献シテ、豊國社造宮ノ用ニ
充テンコトヲ請ヒ、許可セラル

毛利伊勢守内
明治元年十月二日
平野左橋
弁事御役所

コノ日、毛利高謙伊勢守、豊
後佐伯領主瓦ヲ献シテ、豊國社造宮ノ用
ニ充テンコトヲ請ヒ、許可セラル、更ニ仮管地ノ復還ヲ
請フ、聴サレス、ソノ願書左ノ如シ、
四ノ二

請願書

副申書

薄奠

閏四月六日、神祇官並ニ大坂裁判所へ御沙汰之写拜見
仕候処、豊臣太閤之大勲偉業ヲ被為遊

瓦 五千枚
但代金

御欽慕、大坂城外ニ於テ祠宇造宮、並ニ阿弥陀峰旧塋
ヲモ再興被

右之通献備仕度奉存候、此段奉伺候、以上、
毛利伊勢守内

仰出、列侯士庶ニ至ル迄恩義ヲ蒙候者ハ、俱ニ合力旧
徳ニ可報旨奉謹承候、伊勢守先祖高政モ姻属ニ連リ、
恩義ヲ蒙リ候事不少、元和以後豊國廟祠モ廢壞、窃ニ
痛心仕候処、今般 御一新ニ際会シ奉リ、右之御沙汰

明治元年十月二日
平野左橋
弁事御役所
御中
批紙

神祇官へ上納可致候事、

毛利高謙家記

批紙ノ日ヲ伏ス、因リテ本日ニ収ム、

四ノ三

奉歎願候口上書

伊勢守御領地高二千石之儀ハ、初代伊勢守本領二万石之内分地仕、追々年換り候内、不所存之者相統仕、本家伊勢守ニ戻リ、自分愚存ヲ以幕府へ差出、蔵米ニテ給り度段相願候処、願之通被申付、其砌ヨリ領地ト罷成候得ハ、外御預り地ト事替り、本領之中央ニ混雜罷在、殊ニ本領二万石之儀ハ、山谷海岸多之磯地ニテ、穀物少之土地柄、在方浦辺ト相半シ、尤其内海岸之向人多ニテ、在浦小民合テ人別彼是七万ニモ相余り候得ハ、領内之者共年々食物他所ヨリ買求メ候テ、糊口仕候儀モ不一形、依之伊勢守歴代格別心配罷在、家来共ヨリ幕府其筋へ懇願等仕候儀モ、度々有之候得共、兎角行届兼候哉、其趣意貫徹不仕、殊ニ二十四五年來浦方不漁打統候内、海岸防禦之術打混、小民活計之儀モ難行届、窮乏之向ニ至テハ、家什ヲ鬻候テモ不足仕、餓孳ニモ立至り候程之儀、悲惨実ニ甚敷、尤不漁年々其

向々へ鐵扶持等差遣候得共、分ニ過數多之人民ニ候得ハ、其内ニハ離散流亡之者モ不少由相聞、乍小藩為地頭救助之術ニ乏ク、小民ヲシテ此極ニ令至候儀、伊勢守始家來共慚愧至極、何共奉恐入候得共、前条之旨趣如何共難仕、且又近年來穀價沸騰之折柄、諸國津留ニ罷成候テハ、代金之高下ニハ不拘、買入之手段モ尽果、動レハ數万之小民餓孳ニモ立至候儀モ難計程ニ、伊勢守始家來共一統心配仕居候、今般

朝政御一新、人民御救助之折柄、右御預地乍恐旧領復古被 仰付被下候ハ、小民救乏之一端ニモ罷成候半軟ト、只管奉懇願候、右願之通被 仰付被下候ハ、難有仕合可奉存候、以上、

毛利伊勢守内

明治元年十月二日

平野左橘

弁事御役所

御中

毛利高謙家記

批紙ヲ伏ス

五 大總督府安藝・備前二藩兵及ヒ參謀萬里

小路ヲ遣シテ、水戸ノ賊兵ヲ追討セシム

コノ日、水戸ノ藩兵、奸徒ヲ撃チテ之ヲ走ラス、是ヨリ先越後ニ走リタル水戸ノ奸徒市川弘美・朝比奈泰尚等、會津・長岡等ノ殘兵ト共ニ、水戸城ヲ襲ヒテ弘道館ニ侵入シタルヲ以テ、藩兵之ヲ擊退シタルナリ、然レトモ悉ク逮捕スルニ至ラス、状ヲ大總督府ニ稟シ、尚ホ下總方面ニ追撃シテ朝比奈ヲ斃シ、市川ヲ逸ス、大總督府乃チ安藝・備前二藩兵ヲ応援トシテ出張セシメ、土浦・笠間ノ在京兵ヲ帰國セシメ、參謀萬里小路通房ヲ遣ハシテ、賊ヲ討タシムルニ至レリ、ソノ概況左ノ如シ、
五ノ一 國元戰爭之概略

当月朔・二日、大手門ニテ昼夜炮戰ニ及ヒ、賊弘道館内へ乱入致シ候付、城中ヨリ破烈彈丸打入レ、文武稽古場不殘燒失仕リ、賊兵勢留リ兼、脇門ヨリ南三ノ丸松平安房之邸宅へ押入候間、城兵進撃ニ及ヒ、南三ノ丸重臣ノ邸宅不殘燒亡仕リ、一手之賊ハ、北三ノ丸山野邊主水正邸宅へ乱入屯集致シ、南三ノ丸ニ侵入シ、賊又々一手ニ相成リ、北三ノ丸ニ引退キ候付、諸隊奮戰進撃致シ候処、賊頗疲弊、第一玉葉竭乏之上、糧食

ニ窮シ候様子相見、二日夜四ツ時過自分山野邊氏之邸宅ヲ放火致シ、不殘南方ヲ指シ逃出申候、其内凡四十余人、翌三日払曉長岡宿^{原註、城下}ヲ去ル^{三里}ニテ食物ヲ侵掠仕リ、処々商民之屋ヲ狼藉仕リ立去申候所、一人ノ殘賊ヲ生捕、小幡関門出張之目付朝倉五郎右衛門兵隊ニテ四五人生捕仕リ、旁糺明仕候処、殘賊百五十余人計ニ相成リ、下総路ニ向ヒ、追々 東京府迄押入候含ニ有之趣申出候、一体下総路ハ先達ヨリ賊徒潛匿之趣報知モ有之、一兩輩捕亡ハ致候へ共、川々舟行自在之場所柄、出沒隱現不常ニ付、何分追捕之手段モ六ヶ敷地形ト申、脱徒潜伏之輩モ不少様子ニ相聞へ、又々右等之徒勾連相應シ、如何様之變災相釀シ候哉モ難計、仮令疲散之流賊ニハ御座候へトモ、戰場老練ノ上、地利案内モ承知居、兎角避実討虚之術ニ相慣居候趣ニテ、諸藩応援之兵隊早ヤ着陣ニモ可及模様ヲ察シ、尚又城兵不可敵之勢ト考へ、殘奸之徒内起之力モ不見、旁右等之機ヲ察シ候哉、禽奔獸走仕リ、打洩候儀多少之遺憾ニ付、陣將代三木參政等初諸隊追蹤進撃仕リ、礮川邸ヨリ繰出申候兵隊ハ、脱賊之行先ヲ橫擊致候為、乗船ニテ刀根河ヲ下リ向候趣ニ御座候、諸持口出張之兵隊ヨリ報

告參考仕り、此段不取敢御届申上候、尚更生捕打取等ハ多分ニ御座候へトモ、混雜中取調兼申候間、此条ハ追テ委細御届可仕候、以上、

十月六日

三条家叢書

五ノ二

七日上申書

追々御届申上候国許へ来襲之奸賊共、屢及接戦、過半討取候処、残賊百五拾人程去二日夜四ツ時頃城下脱遁致、長岡・秋葉村等ヲ指小川・玉造村辺へ逃去候由、仍テハ下総・上総辺へ趣候事ニ可有之、就テハ追討人数等神速差向候得共、領外之儀、殊ニ

臨幸前追々御府内近へ相迫、実以恐入候次第、不取敢御届申上候、向後水戸表へ、御親兵御差下シ之御模様ニモ被為在候ハ、前頭兩総之方へ御差向被成下置候ハ、難有仕合ニ奉存候、仍テ此段申上候、以上、

水戸中納言家来

十月

杉山総兵衛

鎮将府日誌 七日・三条家叢書・徳川昭武家記

五ノ三
当春国許脱走之奸徒市川三左衛門・朝比奈彌太郎等其

他會賊共、去月廿八日頃領内へ相迫候ニ付、早速人数差出候処、廿九日未明城西北之方小野河岸ト申小渡場、間道故小人数出張之処へ、姦賊大勢押来候ニ付、出張之人数及防戦候得共防兼、右河岸ヲ被渡、午刻石塚ト申候処ニテ及再戦、奸徒盛焰甚敷、遊撃隊之内死傷有之候得共、遂ニ防兼順退イタシ、城下於金町家老山野邊主水正一手防戦之処、敵大勢味方小勢、引返々々接戦之処、終ニ弘道館へ押入必死奮戦、朔日未明ヨリ双方互ニ接戦、翌二日烈敷及攻撃候処、敵難支故カ弘道館内並南北廓中へ放火致シ、同夜四方へ散乱之処、味方死傷並賊討取別紙之通御座候由、東京小石川屋敷表ヨリ概略申来候間、不取敢御届申上候、猶委細之儀ハ再報之上御届ケ仕候、以上、

水戸中納言家来

十月廿三日

大野謙介

弁事

御役所

行政官
徳川昭武家記

五ノ四
大総督府達書

各通 藝州藩

備前藩

今般脱走之賊徒水戸表へ相迫候趣、為応援神速出張可有之旨、

御沙汰候事、

十月

東征總督記二百
浅野長敷家記

五ノ五

各通

土浦藩

笠間藩

常州表乱賊暴行之聞有之、領内為取締、東京詰兵隊早

々帰国可有之旨、

御沙汰候事、

十月

東征總督記二百
土屋拳直家記

五ノ六

萬里小路左少弁

水戸表不穩形勢ニ付、為鎮定急速出張可有之旨、

御沙汰候事、

十月

東征總督記四日
萬里小路通房履歷書

五ノ七

鯉淵四郎

水戸表へ出張被申付候条、出張中可為軍監旨、
御沙汰候事、

十月

東征總督記四日

五ノ八

久留米藩

其藩兵隊水戸表へ出張之内ヨリ百人、参謀へ随從可致旨、

御沙汰候事、

十月

東征總督記四日
有馬頼成家記

五ノ九

武田金次郎

水戸表擾乱之聞有之候ニ付、御守衛被免候条、可為帰

国旨、

御沙汰候事、

十月

東征總督記四日
徳川昭武家記

六 林忠崇仙臺ノ老臣ニ就キテ平潟口総督ノ

軍門ニ降ル

三日、林忠崇^勲之、仙臺ノ老臣ニ就キテ、平潟口総督ノ軍門ニ降ル、総督乃チ忠崇ニ謹慎ヲ命シ、仙臺老臣ヲシテ監守セシム、ソノ關係文書左ノ如シ、
六ノ一

歎願書

微臣儀

当四月徳川家存亡之際、一時頑陋之心衷ヨリ過激之挙動ニ及、甲州黒駒迄罷越候処、田安中納言ヨリ種々説諭之趣モ有之、一ト先江戸表へ引戻候節、不図於箱根戦争ト相成、同所敗走後房州館山港迄引去候途中、仙臺藩之者ニ出会候処、懇情之次第モ有之候ニ付、当国小名濱へ着船仕、其后仙臺家へ依託罷在候処、熟思慮仕候ニ、素ヨリ恐多モ奉対

天朝毛頭異心無御座候得共、徳川家へ忠節相尽申度一時之志願ヨリ、是迄之挙動ニ及候儀ニ御座候処、既徳川家モ相統被

仰付候上ハ、此上何ヲ希望仕候ト申儀無御座、偏ニ悔悟謝罪恐惶之外他事無御座候間、何卒覆載之

御仁慈ヲ以、寛大之御処置被成下候様泣血奉歎願候、誠惶誠恐頓首謹言、

十月

忠崇花押

平潟口総督日誌
三日・林忠弘家記

六ノ二

五日督府達書二通

林昌之助

降伏歎願書御落手相成候条、追テ御達モ可有之、城下最寄寺院ニ謹慎可罷在候事、

十月

平潟口総督日誌
五日・林忠弘家記

仙臺

重役共へ

林昌之助義、其方共へ御預ケニ相成候事、

但シ降伏歎願書御落手ニ相成リ、仙臺城下最寄ニ謹

慎罷在候様申付候条、此段可相心得事、

十月

平潟口総督日誌

林忠崇手記ニ云、^略十月三日、降伏謝罪ノ歎願書案ヲ以問合セシニ、追々修飾シ文詞初テ一定ス、大野友彌麻上下着用、仙ノ監察伊藤十郎兵衛案内、参謀衆宿陣

片倉邸ニ到リ、於応接所仙ノ重臣大町因幡差副ニテ歎願書進達ス、御使番永見和十郎・磯部鹿之進之ヲ受取、直ニ參謀衆へ持參セラレ、磯部氏再出座、參謀方慥ニ落手、追テ總督御入城之上差出スヘク、其上御沙汰有之ヘシ、猶是迄之通謹慎スヘシ、且謝罪ノ実効トシテ兵器可差出旨ヲ命セラレ、大町氏兵器ハ既ニ仙臺藩ニ預リ有之旨ヲ答フ、サラバ仙藩ヨリ差出スヘキ旨ヲ命ス、

四日、仙ノ監察伊藤十郎兵衛ヨリ文通、左ノ書面差越ス、參謀衆ヨリ仙ノ重臣迄相渡サル、由、

林 昌之助

歎願書御落手相成候ニ付、為御礼明五日十字、無相違參謀衆宿陣へ可罷出旨、可被相達候事、同五日辰ノ刻出院、參謀衆宿陣片倉邸ニ至リ、大町氏・伊藤氏諸事取扱ヒ、応接所ニ於テ參謀寺島秀之助出座、御使番鈴木董太郎侍座、左之書附^{上ノ達書}ヲ指^下ス、相渡サル、

七 藩庁開拓方發行ノ銅判摺紙幣通用ノ件ヲ布達ス

コノ日、藩庁ニテハ、開拓方發行ノ銅判摺紙幣通用ノ件ヲ管内ニ布達シ、又急變ノ時、其ノ実場ニ駆付クヘキ人数調査ノ件ヲ各役場ニ命ス、其ノ文左ノ如シ、

銅判摺紙札

錢三貫文

但開拓方印

右ハ、諸郷田地開拓方為御本手出来相成候付、此節ヨリ外紙札同様御領内通融被仰付候、左候テ追々右開拓地所務米ヲ以、時々引揚之賦ニ候条、此旨向々江致通達、諸郷・私領ヘモ不洩様可被申渡旨、地頭・領主ヘ可申渡候、

明治元年辰十月三日

(程久武)

右衛門

(川上久麿)

龍衛

八 車駕入京ノ日近キヲ以、七日ヨリ五日間、外国人ノ大磯東京間ノ遊歩ヲ停ム

四日、外国官副知事東久世通禧書ヲ各国公使ニ贈リテ、車駕入京ノ日近キニ在ルヲ以テ、来ル七日ヨリ五日間外

國人ノ大磯東京間ヲ遊歩スルヲ停ム、ソノ文左ノ如シ、
以手紙致啓上候、然ハ今般我

天皇東京行幸ニ付、去月廿日京師

発輦、東海道筋下向、来ル七日大磯泊、同八日藤澤泊、
同九日神奈川泊、同十日品川泊、同十一日東京着相成
候ニ付テハ、都合五ヶ日之間、東海道筋先後供奉往来
繁雜ニ付、右筋へ貴国臣民遊歩無之様イタシ度、尤
通輦ニ付貴国臣民差越度向ハ、神奈川駅輕井澤へ其タ
メノ場所取設置候間、同所へ罷越度我士官へ承り合候
様、当港居留之貴国臣民へ毎々御布令之儀、貴国岡士
へ我判事ヨリ及通達候、右之趣可得御意如斯御座候、
以上、

辰十月四日

東久世中将花押

北日耳曼公使

(Von Brandt)

フホン・ブランド閣下

外務省記

按スルニ、各国公使へノ移牒モ亦同一ナラン、今原
記ヲ佚ス、

九 車駕岡部駅到着時水戸ノ警報達シ、長州

藩兵ノ東下ト佐賀藩兵ノ警衛ヲ命ス

五日、車駕岡部駅ニ着御、コノ時水戸ノ警報達ス、乃チ
長門藩兵一大隊ニ急速東下ヲ命シ、佐賀藩兵ヲシテ之ニ
代ラシメラル、ソノ概況左ノ如シ、

九ノ一

木戸孝允手記摘要ニ曰、十月五日、天晴、六字 御出
輦、今日供奉ナリ、至岡部從大村益次郎書面到来、會
津領高田ニ屯在セシ水府脱走、桑名脱走、徳・會脱走
ノ賊徒凡千五百、去廿九日追水府城、終ニ拔水府城ト
云、然シ已ニ定策相立、来ル十八日ヲ期シ、誓屠没ニ
決スト云、三字過経鞠子、駿府へ御着、于時又大村益
次郎ヨリ片山正作ニ托シ書面ヲ送ル、正作ハ一番大隊
之嚮導也、會津容保之謝罪状ヲ送り、容保父子並家来
等ノ処置ヲ窺ヒ来ル、七時半江尻駅へ 御着輦也、余
三戸彌左衛門方へ宿ス、夜 行在所へ出、衆議決定之
上、容保父子家来等之御処置ノ次第ヲ認ム、水府一条
ニ付、遊撃軍御先へ東下ノ御沙汰アリ、

九ノ二

此程及言上候會津ヨリ脱走人、水戸表へ襲来ノ賊徒、城
内人数頗ル苦戦ヲ遂、去ル二日夜賊徒共散乱及鎮定候、

彼是御心配ト存候故、任幸便此段申上候、以上、

十月六日

大村益次郎

行在所弁事

御中

東征總督記

九ノ三

達書三通

長州兵隊一大隊

此度大總督府ヨリ言上之趣有之候ニ付、供奉被免、速

ニ東下被

仰付候事、

但到着ノ上、直ニ督府へ可届出事、

十月

弁事

東巡日誌日五

鍋島鷹之助

此度大總督府ヨリ言上之趣有之、供奉兵隊之中、急速

東下被

仰付候ニ付テハ、幸其方兵隊引卒滞留之折柄、右代り

トシテ臨時供奉被

仰付候事、

十月

弁事

東巡日記
鍋島直大家記

鍋島鷹之助

其方引卒ノ兵隊、今度臨時供奉被

仰付候ニ付、金三百兩下賜候事、

十月

弁事

鍋島直大家記日五

直大家記ニ云、今般鍋島鷹之助儀、野州表ヨリ繰込、

京都罷登候途中 御東幸ニ付、岡部駅ニオイテ御書付

被相渡之、

一〇 田村邦榮平潟口總督ノ軍門ニ降ル

コノ日、田村邦榮右京大夫
ノ隱藩主 仙臺ニ於テ、平潟口總督ノ軍

門ニ降ル、督府命シテ其ノ藩内ニ謹慎セシム、

臣邦榮恐懼頓首泣血奉歎願候、今般順逆ヲ誤リ抗

官軍奉惱

宸襟候段、恐懼至極、臣子ノ分不相立、先非悔悟今更

何共可申上様無御座候次第、臣乍不肖素ヨリ奉抗敵

朝廷存意ハ毛頭無御座候得共、遠境隔絶ノ僻土ニ罷在、
春來天下ノ事情形勢モ一々承知不仕、多恐モ

叡慮ノ旨モ具ニ不奉伺、遂ニ右様ノ事件ニ立至リ候段、
甚奉恐入候間、速ニ在所ヘ引籠、恭順謹慎奉仰

朝裁、一藩誓天地勤 王之外他志無御座候、何卒御寛
典之御処置被成下候様、冒万死偏ニ奉歎願候、誠恐誠
惶謹言、

十月五日

臣坂上邦榮花押

田村崇顯家記

崇顯家記ニ云、十月五日、於仙臺降伏謝罪歎願書、

宗家一同差上候、十一日右歎願書御落手、居館外寺

院ノ内ニテ謹慎之儀御達有之、直ニ一關帰着、祥雲

寺ニ於テ謹慎罷在候、

一一 牧野忠訓越後口総督ノ軍門ニ降ル

六日、牧野忠訓越後長岡藩主米澤ニ在リテ、越後口総督ノ軍門ニ

降ル、

臣忠訓恐惶稽首奉歎願候、先般賊徒御征伐之師御差向
相成候折柄、不弁大義名分犯臣子之大道、遂ニ奉抗

王師ニ本國逃遁仕候段、先非悔悟恐縮至極奉存候、全
臣不肖罷在、且ツ春來上國之事情モ不奉伺所ヨリ右様
ノ次第二立至、死猶不容誅之大罪重々奉恐入候、最早
上下一統勤王之外聊他念無御座候、就テハ為実効兵器
等悉皆奉差上、謹テ奉仰 朝裁罷在候、然処天地間無
所容身、実ニ進退切迫罷在候ニ付、此上奉恐入候得共、
旧領寺院等ニテモ立帰謹慎恭順罷在、家來末々迄嚴敷
謹慎申付、何分ニモ奉蒙此上之御所置度味死奉歎願候、
誠惶謹言、

牧野忠毅家記

忠毅家記ニ云、五月廿八日、忠訓若松城下ニ投シ、尔
來郭外寺院ニ寄留ス、八月二十三日、若松城切迫ニ付、
城北小荒井ヘ出張、各所ニ散屯シアル所ノ手兵ヲ招募
シ、廿四日夕、先ツ聚ル所ノ兵二百余名ヲ繰出シ、廿
五日若松ノ急ニ赴カシム、廿六日、家臣数名ヲ供シ米
澤ニ至リ、又山形ヲ経テ九月十五日仙臺城下ニ抵ル、
此時手兵猶會津地方各所ニ散戦ス、

九月廿二日、謝罪歎願トシテ仙臺出立、米澤城下ヘ相
越ス、越後口総督府仁和寺宮新發田御在陣ニ付、十月

六日重臣稲本右門、三間織部ヲ以テ、軍監坂田潔方取
合ニテ、參謀衆ヘ右之歎願書差出ス、

同月十三日、兵器悉皆、総督府器械方多々良勝太郎
ヘ引渡ス、

十三日ニ至リ越後口総督、忠訓ニ命シテ東京ニ至リ
謹慎セシム、

一二 紙幣ノ通用ヲ阻碍スル者ヲ搜捕セシメ、
諸藩ニ普ク紙幣ヲ通用スヘキヲ達ス

七日、府県ニ令シテ、紙幣ノ通用ヲ阻碍スル者ヲ搜捕セ
シメ、又諸藩ニ普ク紙幣ヲ通用スヘキヲ達ス、其ノ令達
左ノ如シ、
三ノ一 令達

今般厚キ

思召ヲ以テ、世上為融通金札通用被

仰出候処、間々不心得ニテ彼は申難シ通用ヲ妨ケ、奸
曲之所行致シ候者有之哉ニ相聞、以之外之事ニ付、府
県ニ於テ嚴重遂詮議、右様不心得之者於有之ハ、早速
召捕可遂吟味候事、

十月〔七日〕

行政官

官中日記七日
毛利元徳家記

二ノ二
今般厚キ

思召ヲ以テ、世上為融通金札通用被

仰出候処、諸藩之内間々未タ通用不致向モ有之趣相聞
ヘ、以之外ノ事ニ候、

皇国一円通用之儀ニ付、藩々ニ於テモ追々相当之拜借
仕ナカラ、不融通之向有之候ハ、全ク

朝命ヲ拒ミ候節ニ相当リ候付、向後右様不心得之向於
有之ハ、屹度

御沙汰ノ次第モ可有之候条、兼テ被

仰出候通、正金同様令通用候様、僻邑遐陬ニ至ル迄、
速ニ可相達旨被

仰出候事、

十月〔七日〕

行政官

官中日記七日
毛利元徳家記

一三 鎮將府弁事・判事・史官ニ令シテ出征諸藩
ノ戦功賞格ノ意見ヲ上ラシム

八日、鎮將府弁事・判事・史官ニ令シテ、出征諸藩ノ戦功賞格ノ意見ヲ上ラシム、ソノ令達及ビ十二月ニ至リ江藤胤雄平新ノ上リタル意見書、左ノ如シ、

二三ノ一
軍功之諸藩戰士之輩、賞典之儀実ニ国家之大事ニ候間、各見込之処、以封書可差出候事、

十月 鎮將府

弁事

判事

史官

別本官中日記口

按スルニ、戦功賞典ノ等級ヲ定メ、及ヒ督府以下ニ殿最ヲ檢覈セシムルノ令ハ、八月末ニ載ス、又意見封事、江藤胤雄ヲ除クノ外皆佚ス、

二三ノ二

当閏四月ヨリ、諸道軍監被

仰付、関東出張中、見聞又ハ大久保参与ヨリ承候

事等ヲ以、賞典愚考、左之通ニテ御座候、

御中興之御大業、至速維新ニ有之候儀、固ヨリ

聖運之所使然ニテ候得共、人謀ナクンハ

聖運モ独リ不能開候得ハ、補助之功亦大哉、宜ク明賞

典シテ、後來之大善ヲ御勸メ被遊度奉存候、依テ賞功之

儀、分テ三等トス、條公・岩公・薩州・長州、徵士ニ

シテハ大久保・西郷・木戸・大村ヲ上功トス、有栖川

宮・土州、徵士ニシテ後藤・伊地知・板垣・海江田・

木梨ヲ中功トス、宰府御下向之諸卿、且又西四辻・橋本・

柳原・大原・九條・澤・尾州・因州・藤堂・大垣・松

代・大村、徵士ニシテ、河田左久馬・渡邊清左衛門・

林玖十郎等ヲ下功トス、固ヨリ賞ハ、即今人情之折合、

後來之勸善ヲ目的ト致候得ハ、上下転倒ハ不待論、下

等之功ヲ中等ニ進ムレハ、下等ハ悦ヘトモ、中等之人

ハ不平ヲ抱ク訳有之候得ハ、能々此義ヲ明ニシテ、其

中正公平ヲ以御処置ナクンハ不可有也、因テ分条尚細

論ス、如左、

一岩公・條公・薩・長、是ハ其功烈天下之所知、不待

言候事、

賞ハ二公兩藩トモ、各十方石内外ナルヘシ、但シ長

州ハ石州ヲ其俸賜リテ可然歟、其他ノ地ハ民部官御

立之上、同官ニテ取調有之度事、

一薩ニシテハ大久保・西郷、長ニシテハ木戸・大村、

是又其功勞人之所知、不能詳、但其賞ハ万石以上ヲ

賜ハリ、永ク藩屏之列ニ被 仰付可然歟、

一有栖川宮ハ官軍ヲ督シテ、終ニ徳川氏ヲ服セシメ、其城ヲ全シテ御請取、其府下百万之戸口モ、全シテ御請取有之候、是ハ宮ノ功也、

但賊徒上野ニ集リ、徳川氏ヨリ城地被下候ハ、賊徒自ラ鎮定可致杯、願書差出候通之形勢ニ立至リ候ハ、其全功ヲ欠ク也、相考候処、土州ト同様之賞典ニ被行候方可然欵、

一土州ハ第一、昨年政權返上之事尽力有之、其上當春以來出兵向ニテ、戰場之功不少、但シ昨冬會議之節異論有之、条理不貫、是カ為ニ

廷上之御苦辛不少候趣、彼ト是ト引合、其上相考候処、其等ノ功ヲ下ル事、上条ニ比例スレハ隔ルコト遠シ、宜ク其賞地老式万石ナルヘシ、

一後藤・伊地知正治・板垣退助・木梨精一郎・海江田武次、皆戰場之功勞不少、宜ク三千石内外ヲ賜リ、中下大夫ニ被 仰付、永ク

朝臣ニ被 仰付可然欵、

一宰府御下向之諸卿之事ハ、人々所知ニ付、不詳言候、一西四辻・橋本・柳原・大原・九條・澤諸卿、戰場之功勞不少候間、宜ク五千石以上賜リ可然欵、

一尾州・因州・大垣・大村・藤堂・松代、是ハ功勞不少、其實五千石内外ナルヘシ、

一河田左久馬・渡邊清左衛門千石内外ヲ賜リ、下大夫之列ニ被 仰付、永ク

朝臣ニ被 仰付可然欵、

右之外ニモ段々功勞之人可有之候得共、其功勞之次第等、審ニ不心得ニ付不申上候、以上、

明治元年

辰十二月廿四日

江藤新平

三条家叢書

一三ノ三

附録一条

一横濱御取鎮之儀、全東久世公

少将様御苦勞故ト奉存候、

一当閏四月ヨリ五月迄ノ当地ノ形勢、上野増上寺・淺

草・濱御殿、其外数万之賊徒分テ屯集、只官軍ハ御

城而已也、是時

宮様・條公ヨリ御相談之末、

少将様則横濱ヨリ江戸之方御進ミ有之、両野州被遊御鎮撫、御手勢之内ヲ分テ、今市へ被遣、土州ト交

代、

御身ハ江戸へ御止り被遊候付、余程官軍之重キヲナシ、其上五月十五日上野攻之時ハ、纒之御手勢不残出張ヲ被仰付、

御身ハ城中へ御出有之、彼是ト御指引被成、上野黒門口、薩州其外之手ニテ攻破事ニ付テハ、御國之大砲手、加賀屋敷ヨリ打出候アルムストロンク之功不_レ少、同十七日上野点見被命候付罷出候処、黒門口台場之大木大砲ニテ不_レ少折居候、大砲銃丸ニテ斃候賊之死骸モ不_レ少、其後上野其時居合候坊主之話ニ、加賀屋敷ニ亘り候方ヨリ参り候銃丸ニテ、何分難堪トテ愁傷致シ居候中、四五発の中、賊勢動揺、右往左往ニ相成候由、然ハ上野攻之時ノ功モ不_レ少奉存候、一野州モ眞岡代官ヲ屠リ、殊ニ大原・藤原ヲ攻落シ、賊勢畏縮候付、八州モ自然ト安堵ニ相趣候、其功モ不_レ少ト奉存候、

右旁ハ旧藩之訳ニ付、御互ニ何分用捨御座候得共、御國之人氣モ不_レ折合候テハ、

朝廷之御為不相成ニ付、尚御差含可被下候、

十二月

江藤新平

三条家叢書

原記日ヲ佚ス、案スルニ、少将ト称スルハ鍋島直大ヲ指ス、本書、蓋肥前藩徴士ノ参与等ニ贈リシモノナラン、

一四 島津式部以下ニ慰勞品ヲ賜フ

コノ日奥羽ヨリ東京ニ凱旋シタル島津式部以下ニ、慰勞品ヲ賜ハル、ソノ品目及ヒ人名左ノ如シ、

薩藩総轄

短刀一段
縮緬一段

島津式部
相良治部

於御前被下

同隊長

縮緬一段ツ、

鈴木武五郎
邊見十郎太

篠原冬一郎

川村與十郎

野津七左衛門

野津七二

明治元年(1868)

八丈一段ツ、

同監察

小倉壯九郎	飯牟禮喜之助	大山彌助	平吉左衛門	榊山休兵衛	肝付郷右衛門	土持左平太	河野四郎左衛門	高城十左衛門	仁禮新左衛門	千田傳一郎	有馬休八	永山彌一郎	伊集院直右衛門	山口仲吾	兒玉平藏	奧青輔	兒玉四郎太
-------	--------	------	-------	-------	--------	-------	---------	--------	--------	-------	------	-------	---------	------	------	-----	-------

一五 白川口本藩出軍ノ諸隊長ニ總督正親町中

奈良原長左衛門	三原平吉	川崎正右衛門	同半隊長	河野喜八郎	左近允新六	和田乘太郎	黒木七左衛門	野間孫兵衛	讚良清藏	吉利壯之助	紀尾新七	同斥候	平田九十郎	上原藤十郎	法元常次	濱田源兵衛	曾山喜之助
---------	------	--------	------	-------	-------	-------	--------	-------	------	-------	------	-----	-------	-------	------	-------	-------

將ヨリ感状並褒詞ヲ賜フ島津伊勢日記

コノ日福島城ニテ、白川口本藩出軍ノ諸隊長ニ、總督正親町中將ヨリ感状並ニ褒詞ヲ賜ヒ、兵士ニハ酒ヲ勞ヒ、速ニ凱陣スベキヲ達セラル、ソノ達書及ビ概況左ノ如シ、

島津伊勢日記

八日 晴

一今朝八字ニ諸隊一統二本松繰出、十一字ニ福島江致着陣候事、

一御總督正親町様事、福島城江御滞陣ニ付、薩州兵隊唯今当所着陣相成候、御届ニ拙者直ニ参候、其序ニ拝謁願申上候処、直ニ拝謁被仰付候付、仙臺表其余ノ事情カタカタ御尋申上候処、仙臺ノ情実詳ニ不相分候得共、脱徒ノ人数江イマタ随従ノ者有之、十分ノ所置附兼、脱徒モ五十人計ト云説アリ、又相馬口ヨリ相聞得候ニハ、老幼男女込テ五十人計ト云説モアリ、南部ハイマタ能事情不相分、佐竹ノ方九條様江恭順ノ筋申出候カ、一円事情不相通、松平肥後父子護送ノ儀、大総督府へ申上置候得共、是以イマタ如何御沙汰モ無之、乍併両三日中ニハ何分相分リ可申、其上ハ薩兵若松警衛ノ三

小隊モ、直様引揚候テ可然トノ御咄ナリ、

一此度會津追討ニ付、孤兵ヲ以日光モ三斗小屋口ヨリ数十里ノ除地数所賊壘攻破、遂ニ其巢窟ニ討入、連日烈戦ノ故巨賊以下及降伏候次第、稀有ノ功劳存候、仍感状如件、

明治元戊辰十月

白川口總督

正親町中將御判

薩州藩

隊長御中

右御感状ハ、日光三斗小屋ヨリ進入ノ私領^{加治木}三番隊

江ノ御感状、隊長ハ山田司、關山ニテ戦死、跡ノ隊長

野崎平左衛門也、

一多日征戦励候故ヲ以、

皇威遠蹶ニ振興、就中此節為會津追討、母成口ヨリ進撃、転戦三日、其巢窟ニ討入攻囲三旬、遂ニ巨賊以下令降伏候始末、拔群ノ功劳感悦ノ至候、仍褒詞如件、

白川口總督

明治戊辰十月

正親町中將御判

薩州藩隊長中

右二通、拙者正親町様江罷出候節、御渡相成候事、

一 総督府正親町様ヨリ諸兵隊江御酒被下候事、

一 薩州兵隊

春以来長々出張遂苦戦、遂ニ賊城ヲ令没落候段、深く

感賞被

思召候、依テ速ニ凱陣休兵可致旨、

御沙汰候事、

十月

一六 藩庁医学院ノ役名及ヒソノ俸禄ヲ定ム

コノ日、藩庁ニテハ、医学院ノ役名及ヒソノ俸禄ヲ定メ、

漢・洋両医道ノ長短ニヨリ取捨研究シテ、濟生ノ目的ヲ

達スヘキヲ令ス、ソノ文左ノ如シ、

一 医学院教授其外御役名等被召建候段、申渡通候、抑医

道之儀、人命濟生之職掌不輕業ニテ、

大信院公御以来追々御手も被召附、当世態猶深御手を

被尽、人民御養育之御仁道盛大御施行可被遊、厚

思召之訳被為、在、御役名等被召建候付、以来洋学医・

漢医両道相混、各其才能之者より可被仰付候条、尔来

教講以下代合之節は、人柄致吟味、教授より可申出、

教授無之節は助教より可申出候、左候て両道順熟、無

区別長を取短を補ひ、本体を不失、濟生之大志を体認

し、本科・外科之区別も無之様、諸生可致教導候、且

又鍼科之儀は、即今軍事方江は難被召仕候付、外科致

稽古、両科西洋道可致伝習候、左候て追々軍事方手伝

等ニも可被召仕候、尤西洋医法之儀は、毎々解體実験

等いたし、地方之経度、寒熱之氣候風土随ひ病根を詳

ニ致吟味、其術道内景之究理ニ基き、綿密ニ有之、就

中外科之儀は、当時至急之科道ニ付、折角御手を被尽、

西洋医生御取立可相成候間、其志有之者は、此涯洋学

局ニて当分通学問勉強可致候、

一 漢医之儀も、以来外科道は西洋法致伝習候様被仰付候、

右之通被仰付候条、此旨医学院助教江申渡、向々江

も可致通達候、

十月

右衛門

一 医学院教授

一 御役料米七拾五俵

一 拾四人賄料

一 教授次席

一 医学院助教

一 御役料米五拾俵

一 六人賄料

一 助教次席

一 医学院訓導師

一 御役料米四拾俵

一 四人賄料

一 訓導師次席

右之通御役名被召建、教授・助教之儀は、依時宜御

拜診をも可被仰付候、

但御役料米之儀、大頭右之通ニ候得共、持高之員

數ニ依り不被下も可有之候、

一 医学院教講

一 役料米三拾五俵

一 医学院句読師頭取

一 役料米三拾俵

一 医学院句読師

一 役料米式拾五俵

一 医学院句読助(師脱九)

一 御扶持米句読師助之通四石之割

右之通役名被召建候、

但役料米之儀前条同斷、

右之通被仰付候条、此旨医学院助教江申渡、向々江も

可致通達候、

(卷一明治元)
辰十月八日

右衛門

一七 牢舎者衣食支弁方ノ規程ヲ達ス

コノ日、又牢舎者衣食支弁方ノ規程ヲ達ス、ソノ文左ノ如シ、

一 牢舎者飯米之儀、親類等無之者ハ、慶賀主取ヨリ取替

ヲ以賄置候処、不致返米モ有之、及迷惑候段相心得候

付、以来右体之者召込候節ハ、其者之中ヨリ屹ト致

返米候様申付候、

一 無宿者召込候節ハ、飯米等夫々御物ヨリ被相渡事候処、

是迄多クハ病氣死去等有之、畢竟宛通不相渡、食事乏

敷所ヨリ右次第之哉(看脱九)ニモ相聞得、如何之至候、就テハ

當時諸色高料之折柄ニ付、是迄之木賃錢三百文ニ壹貫

貳百文相重、都合壹貫五百文相渡候条、以来嚴重賄料

等行届候様、触役ヨリ氣ヲ付可致取扱候、

一牢舎者湯浴ヲ有之候ハ、横目差越候節ハ横目ハ勿論、

付役等牢中之事体巨細致見聞、時々形行糺明奉行へ可

申出候、

一牢舎者之内無宿者ハ勿論、身近キ親類等無之、寒氣堪

兼候者ハ、触役ヨリ御用人江申出候上、物奉行方ヨリ

揚物看板等相渡事候付、以来右体之節ハ速ニ相渡候様

可取計候、自然在合無之節ハ、上下町会所在合之關所

品相渡候様申付候、

右之通申付候条、糺明奉行并触役江申渡、可承向へ

モ可申渡候、

〔采〕「明治元」
辰十月八日

龍衛

一八 御諱惠・統・睦三字欠画ノ制ヲ定ム

九日、御諱惠・統・睦ノ三字ハ、名字ニ用フルヲ禁シ、

且刻本等ニハ欠画スヘキヲ達セラル、ソノ文左ノ如シ、

惠

統

睦

右三字

御諱ニ付、名字等ニ相用申問敷儀ハ勿論、刻本等ニハ

闕画可致候事、

十月

行政官

官中日記
毛利元徳家記

按スルニ、五年正月ニ至リ此制ヲ廢ス、

一九 出征諸藩ニ令シ、小藩ノ其宗藩若クハ大

藩ニ隸属セシ者ハ其功勞ヲ精覈セシム

コノ日、出征諸藩ニ令シテ、小藩ニシテ其ノ宗藩、若ク

ハ大藩ニ属シテ報効シタル者ハ、宗家大藩ニ於テ其ノ功

勞ヲ精覈シ、隠没ノ憾ナカラシムヘキヲ達セラル、ソノ

文左ノ如シ、

征討諸軍久々遠境ニ暴露し、碎身粉骨、連リニ捷功を

奏候段、深

ゝゝゝ被為在候、然ル処小家之向ハ独任不相叶、或ハ宗

家ニ附属し、又ハ大藩ニ依頼し、其力を効し候類も往

々有之候処、自然其功勞隠没不著候ては、甚以 遺憾

之至ニ被

思食候条、宗家・大藩ニ於て、精々取調功勞隠没せしめざる様可致旨被

仰出候事、

十月

行政官

太政官日誌九日
毛利元徳家記

按スルニ、遠境ノ字、官中日記及ヒ諸家記概テ殊方ニ作ル、今日誌ニ從フ、

二〇 朝廷ヨリ海岸要所ニ燈台築造場所選定ノ為、汽船佐多岬へ出張ノ旨藩内ニ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、今回朝廷ヨリ海岸ノ要所ニ燈台築造場所選定ノ為メ、佐多岬へ汽船出張セシメラレ、場合ニヨリテハ、鹿兒島へモ廻船スベキニヨリ、予メ其ノ意ヲ得ヘキ旨ヲ、海陸軍ノ掛役・台場受持ノ者並ニ沿海地頭・領主・遠見番等ニ達セリ、ソノ文左ノ如シ、
一 今度海岸要所江

朝廷ヨリ燈明台築造被 仰付、地所為撰、英国器械匠 志人・會計官権判事真田藩中長谷川三郎兵衛同伴、火船にて近々佐多岬江廻着之筈申来、依時宜は前之濱江

廻艦も難計候付、其段相心得居候様、海陸軍掛之御役々々は勿論、台場受持之面々並海岸相抱候地頭・領主江早々申渡、遠見番江も可申渡候、

(朱)「明治元」
辰十月九日

良馬

二 諸侯ノ多ク駒從ヲ率ユルヲ禁シ、庶民モ貴人ニ礼ヲ失フコト勿ラシム

十日、諸侯ノ多ク駒從ヲ從へ、自尊ノ弊ニ陥ル者アルヲ戒メ、庶民モ亦貴人ニ敬意ヲ失セサル様、申諭スヘキヲ府藩県ニ達セラル、ソノ文左ノ如シ、

諸侯供廻リ多分召連、尊大華麗ケ間敷儀ハ、昇平之久シキ自然ト驕侈ニ赴キ弊弊風ニ付、先達テ古今之形勢御参考之上、簡易ヲ主トシ供連定則被

仰出候処、頃日浴中之往来ニ供人多分召連、間々挾箱等為持、或ハ先供之者喝道ニ齊シキ挙動有之哉ニ相聞へ、

御趣意ヲ不弁次第ニ相当リ以之外之事ニ候、自今右様之儀無之、御定則通り屹度相心得候様
御沙汰候事、

但供廻リ之多少ニ依リ、貴賤ヲ相別候訳ニ無之、貴

ハ自ラ貴ク、賤ハ自ラ賤シキ道理故、道路ノ往来

各自ニ其分ヲ弁ヘ、互ニ相譲リ、通行妨ケ無之ハ

勿論ニ候得共、諸列侯ヘモ右本分ノ通被

仰出候上ハ、庶民末々ニ至ル迄、此旨篤ト領会致

シ、貴人ト行違候節、礼儀ヲ尽シ不敬等決テ無之

様可相心得事、

右之通被

仰出候間、府藩県ニ於テ、其支配所之末々之者ニ至ル迄、不洩様兼テ可申諭置候事、

十月

行政官

官中 日記十日
嵯峨実愛・毛利元徳家記

供連定則及ヒ鳴道之禁ハ、閏四月二十三日及ヒ二

十四日ニアリ、

二二ノ二

十三日達書

徴兵其他巡邏兵等、隊五行列之規則モ可有之候得共、

往来之節、官・堂上・諸侯等別テ御役有之候方々ニ行

違候砌ハ、道路半ヲ相譲リ、不失礼節様

御沙汰候事、

十月

行政官

官中日記十三日
毛利元徳家記

二三 古金銀ヲ蔵スル者、金・銀座両局及ヒ

商法会所ニテ通貨ニ兌換セシム

コノ日、古金銀ヲ蔵スル者ハ、金・銀座両局及ヒ商法会所ニテ通貨ニ兌換スヘキ旨ヲ、会計官ヨリ達書アリ、ソ

ノ文左ノ如シ、

三二一 会計官達書

兼テ古金銀歩増之儀、

御布告有之候処、取引不融通之趣モ相聞候ニ付、左之

分今般引替被

仰出候、

一古文字書法類編元文字ニ作ル金百兩ニ付 引替金四百九十一兩

一真字式分判文政金百兩ニ付 引替金四百式拾七兩

一壹朱金百兩ニ付 引替金式百拾壹兩

一草字式分判百兩ニ付 引替金三百七十六兩

一古式朱金百兩ニ付 引替金式百四十一兩

一五兩判百兩ニ付 引替金三百拾八兩

一保字金憲法類編天保金ニ作ル 百兩ニ付

引替金三百六十八兩

一正字金百兩ニ付

引替金貳百九十五兩

一安政貳分判百兩ニ付

引替金百四十九兩

一慶長銀量壹貫目

代金八十九兩

一元祿銀同上

代金七十壹兩三朱

一宝永銀同上

代金五十五兩

一永世憲法類編永字ニ作ル 銀同上

代金四十四兩壹分

一三ツ宝銀同上

代金三拾五兩壹分

一四ツ宝銀同上

代金貳拾壹兩三分二朱

一銘元文字銀五匁銀同上

代金五拾一兩

一草文字銀同上

代金三十九兩三分

一保字銀同上

代金貳拾八兩二分二朱

一政字銀同上

代金拾二兩三分三朱

一古二朱銀百兩

引替金百六十兩

一文政二朱銀百兩

引替金百十五兩

一古一分銀百兩

引替金百七兩

右之品所持罷在候者、金・銀座憲法類編座字ナシ 兩局並商法会所

へ引替差出可申候、尤古金銀差出候日限ヨリ日數二十五日過代リ金之儀ハ、定価之内書面之通吹元諸雜用ヲ

引被渡下候間、銘々不貯置引替差出可申候、

十月〔十日〕

憲法類編十日
本莊道美家記

道美家記ニ、會計局へ御呼出ニテ御渡トアリ、又家記十一日トス、今憲法類編ニ從フ、按スルニ、新旧金銀貨ノ価位ヲ定メシハ、閏四月十四日ニアリ、

三ノ一
古金銀分増之儀ニ付、別紙之通

御布告ニ相成候間、領中へ不洩様可相觸旨、被仰渡奉畏候、

但本文之數引分ケ、速ニ御布告行届候様可取計旨、別段御達相成、是亦奉畏候、以上、

本莊宮内少輔家来

明治元辰年十月十一日

鈴木勘右衛門印

本莊道美家記

本条所謂別段御達書ハ、之ヲ佚ス、蓋府藩臬モ亦同
一ナルヘシ、

二三 英・佛兵隊等神奈川駅傍芝生村ニ車駕ヲ

拜シ、各国艦船祝砲ノ儀ヲ行フ

十一日、車駕藤澤駅ヲ発シ、神奈川駅ニ抵ル、外国人モ多数神奈川駅傍芝生村ニテ拝観シ、各国艦船祝砲ノ儀ヲ行フ、其ノ概況左ノ如シ、

二三ノ一

東巡日誌ニ云、十一日快晴、卯之半刻藤澤駅 御発輦、

股野村御小憩、戸塚駅御昼休、境木村・程ヶ谷駅御小

憩、申之刻神奈川駅 御着輦、是日、外国人芝生村ニ

テ御行装ヲ拝観シ、 御通輦之節、碓泊ノ外国艦ヨリ

祝砲ヲ発シ、神奈川府殿台ヨリ応砲ヲ発ス、

二三ノ二

六日達書

近々 御東幸ニ付、神奈川最寄御道筋へ、外国人多人数拝礼トシテ罷出度願之趣、勝手ニ差許候テハ、同所最寄御道筋立廻リ、処々乱雑可致候間、神奈川宿手前芝生村辺広場之処ニ、拝礼所取設候積リニ有之、且万一外国人共 御通輦ニ差掛リ、小路等ヨリ突然罷出候節ハ、其俣片脇ニ為扣可申候へ共、礼讓モ殊ナル儀ニ付、御国人同様之取扱ニハ致シ兼候間、右之段兼テ申進置候、以上、

九月十三日

神奈川府知事

外国官判事御中

右之通申來候間、為心得申達候、且其日供奉一同、騎馬之輩ハ可為騎馬事、

十月

弁事

二三ノ三

九日達書

今般 御東幸、 御通輦拝礼致シ度外国人申出、程ヶ谷宿ツ、キ芝生村地内ニ於テ拝礼所取設ケ、右場所ニテ為拝候ニ付、其段各国コンシユルへ相達候処、英国コンシユル申立候ハ、我国ニテハ皇帝其他高貴之者へ行達候節、冠リモノヲ取り候ハ勿論、手ヲタ、キ、声ヲ立候ヲ恭礼ト致シ候へ共、貴国ノ内ニハ、外国之情態御承知無之人々モ有之哉ニ付、声ヲ立、手ヲタ、キ候儀ハ不致様、普ク通達致シ置、外力国々へモ同様申通儀ニハ候へ共、各国ノ儀故、自然不行届儀モ可有之旨申聞候間、右之趣御同勢並前後兵隊等へモ、不洩様御通達有之度、且外国人ノ儀ハ、拝礼ノ節御国人ノ如ク平伏ハ不致、其余御道筋等へ猥ニ不立出様、役々附添、精々制シ方致シ候へ共、万一途中御先供等へ出達候節ハ、言語不通ノ者故、諸事物和ラカニ取扱、行達

東巡日誌六日
神奈川具史料

等無之様、是又御通達有之度候事、

辰十月

神奈川府

右之通通達有之候間、為心得申達候、家々末々迄急度可被申聞候也、

十月九日

弁事

東巡日誌
加藤明実家記

三ノ四

木戸孝允手記摘要ニ云、十月十一日晴雨、三日前ヨリ

寒風尤甚、今日外国人拜礼ヲ願ヒシ故、供奉之面々当

非ナシ、十字前戸塚へ 御着輦、二字過程ケ谷へ 御着

輦、是ヨリ供奉之面々皆騎馬ナリ、三字ヨリ四字之間

ニテ、拜礼被 仰付ル、ノ 御沙汰ナリ、芝生村へ拜

礼所之任構アリ、御通輦之御折、各国之モノ男女拜

見ニ出ルモノ其数ヲ不知、米恐ハム・英之兵隊凡一大隊

右側ニ連列シ、御通輦之御折拜礼之式ヲ行フ、五字

神奈川へ 御着輦ナリ、

二四 奥羽鎮撫総督九條道孝・副総督澤為量等

凱陣ノ途ニ就ク

コノ日、奥羽鎮撫総督九條道孝・副総督澤為量等、凱陣

ノ途ニ就ク、是ヨリ先奥羽已ニ平定ニ就クヲ以テ、督府

令シテ征討諸軍ヲ班ス、ソノ令達及ヒ概況左ノ如シ、

奥羽之賊徒悉ク降伏、謝罪歎願有之候ニ付、近日久保

田表 御出馬、最上筋御通行、一先東京へ 御凱陣ニ

テ、大総督府へ御伺之旨被 仰出候、右ニ付速ニ解

兵、各藩兵隊軍列嚴肅ニ引揚可申、且新ニ降伏之國中、

市民之狐疑勿論ニ付、末々之者共粗暴之振舞無之様、

屹度相達、別紙之通相心得候様御達有之候事、

總督府

辰十月三日

參謀

東征日誌
久保田藩記

別紙

一先陣 大村 薩州 佐土原

右ハ山形宿陣

一總督府並副督御本陣 薩州 長州 筑州

右ハ漆山宿陣

一肥州前手小倉

右ハ天童宿陣

一肥州後手筑州

右ハ楯岡宿陣

一平戸 雲州 因州

右ハ尾花澤宿陣

右之通前・中・後宿陣致シ、近々 総督府奉迎、御着陣之上御指図相待候様可相心得候事、

十月三日

但差掛り宿割等不都合之儀モ有之候ハ、其宜キニ 随ヒ申談可取計候事、

総督府

参謀

羽州官軍長官中

東征日誌

東征日誌略ニ云、九條殿・澤殿・醍醐殿奥州引揚ケ、先陣ハ大村、次ハ薩州、斥候ハ佐土原、中軍ハ長州・筑前・薩州・肥前鍋島孫六郎ノ兵、次ハ小倉、次ハ長崎、次ハ肥前鍋島上総ノ兵、後陣ハ筑前・因州・平戸・島原・雲州ノ兵等、順々ニ引揚ル、

九條道孝事蹟ニ云、十月奥羽合従謝罪歎願、遂ニ平定ニ付、一先諸軍東京ヘ引上、十月十一日横手発軍、同

十七日羽州漆山ヘ着陣、同月廿七日同所進発、十一月

二日奥州福島城ヘ着陣、五日滞陣、同所同七日進発、

同十八日東京下谷佐竹邸ヘ凱陣、即日参 朝、奥羽御

平定ノ趣言上、並ニ伺 天機、翌十九日御旗ニ流返上、

同廿四日依 召参 朝、天盃頂戴、

醍醐忠敬手記ニ云、十月十一日秋田ヲ発ス、十三日横

手城下ニ宿ス、而シテ兩督諸司既ニ最上ニ移陣、書ヲ

遣り余ヲ促ス、十四日横手ヲ発ス、二十日漆山ニ着ス、

是ヨリ先兩督諸司皆至リ会ス、廿七日兩督共ニ漆山ヲ

発ス、十一月十七日千住駅ニ次ス、十八日千住ヲ発シ、

小塚原ニ憩シ、淺草ヲ過キ、下谷佐竹氏ノ邸ニ憩シ、

而シテ後凱歌ヲ西城ニ奏シ、錦旗ヲ奉還シ、天顔ヲ拜

シ了退城、而シテ佐竹邸ニ次ス、

二五 藩庁先月廿二日會津降伏ノ事ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、先月廿二日會津降伏ノ事ヲ管内ニ 達ス、其ノ文左ノ如シ、

官軍會津城江押詰、連日攻撃之処、賊徒敗北、先月二 十二日城主肥後父子を初、別紙之通謝罪状差出、同日

出城、脱劍ニテ軍門江降伏ニ付、同所近辺妙國寺江被
遭謹慎、殘党は猪苗代江是亦謹慎、兵器等も総て差出、
同廿四日居城御請取之賦候段申来候、且米澤之儀、降
伏之段も申来候、此旨向々江早々致通達、諸郷・私領
江も可被申渡旨、地頭・領主江可申渡候、

但本文之通會津降伏ニ付、忝番隊より六番隊迄、忝

番遊撃隊、忝番・忝番大砲隊、白川口臼砲打手之儀、
御国許江帰陣被仰付、先月廿四日會津被差立候、

十月

備後

圖書

右衛門

龍衛

内膳

良馬

辰十月十一日

御本文、諸御役人・御一門方・島津左衛門一列・諸大
身分・無格地頭・領主へ申渡候、

【参照一】

慶應四辰九月廿二日、若松城下ニヨヒテ、參謀軍監相
付、一通り歎願書差出、會津肥後守父子軍門へ罷出、

改服無刀ニテ降伏ノ事、

但城下天寧寺へ蟄居謹慎、

同廿三日、家中一同家老始同断ノ事、

同廿四日比城受取ノ筈、砲器類同断ノ事、

御国ノ軍兵モ、一番ヨリ六番隊迄ハ廿四日出立ニテ、

東京へ退陣、

右須磨敬二郎・平田休藏兩人、辰九月廿四日未明會津

出立ニテ、京都へ立寄、兵庫ヨリ英ノ便舟相頼候テ、

辰十月十一日五ツ時鹿府へ着御届ノ事、

【参照二】

今日飛脚着、會津ハ九月二十二日降伏落城、同二十三

日城受取、肥後守父子城下ヨリ二十町許有之寺へ、駕

籠ニテ刀袋入ニテ為持、家来三十人計無刀ニテ供ノ由、

薩兵一小隊・土州同断、御使番乗馬ニテ、先キニ警固

ノ由、誠ニ憐見物人多人ノ由、落城ニ付、一番ヨリ六

番隊迄、外ニ遊撃隊御暇ニテ帰国被仰付、右ノ書状九

月廿三日日付ニテ御座候、此旨早々為御安心御シラセ

申上候、

辰十月十一日写

【参照三】

會津落城降伏之件々ハ、先達テ須磨敬二郎・平田休蔵ヨリ急報ノ通ニテ、其後先月廿五日會津出立ノ長藩ヨリ報知ニ、仙臺並庄内モ降伏イタシ候由、最早奥羽北越一時ニ鎮撫ノ形、凱歌ノ声街ニ滿々タリ、不日ニシテ一番隊ヨリ六番隊迄、會津ヨリ帰陣ノ賦ニ御座候、尤奥羽鎮定ノ上ハ、自然解兵相成、追々凱陣ノ儀ト御同慶此事ニ御座候、尤戦死人遺髪等モ、不遠相達次第一緒ニ差下可申ト、先右ノ大略及御問合候、以上、

十月十二日

京都本營

二六 車駕神奈川駅ヲ発シ品川駅ニ抵ル

十二日、車駕神奈川駅ヲ發シ、品川駅ニ抵ル、ソノ概況左ノ如シ、

東巡日誌ニ云、十月十二日卯之半刻神奈川駅 御發輦、川崎駅御昼休、梅屋敷御小憩、未ノ半刻品川駅 御着輦、

二七 榎本武揚等船艦ヲ率イテ蝦夷ニ走ル

コノ日、榎本武揚等、書ヲ總督府ニ上リテ、北地開拓ノ意ヲ陳シ、船艦九隻ヲ率キテ蝦夷地ニ走ル、初メ伊達慶邦ノ降ルヤ武揚等仙臺海口ニ在リ、平瀨口總督仙臺老臣ニ命シテ之ヲ招降セシム、從ハス、松平定敬・板倉勝靜・大鳥圭介等會津ヨリ来ルニ及ヒテ、帰順ヲ肯ンゼザル仙臺兵ト共ニ、艦内ニ来リ投セシニヨリ、此ノ挙ニ出テシナリ、ソノ歎願書左ノ如シ、
二七ノ一
一翰拜呈仕候、

總督様御機嫌克、随テ先生方御壯健、御繁務之筈ト奉賀候、一昨日当所着、昨日折濱迄出張之処、一昨日軍艦等ハ都テ出払、獲物一匹モ無之、兵士落力千万御座候、其上当藩ヨリ之届方始終間違而已ニテ、狐ヨリタマサレ候様ニテ、強腹之儀モ候得共、至極之田舎者、何様申候テモ、シカト徹不申模様ニテ、困入申候、金華山辺へ為追候様子モ承候間、探索差出置、其報知次第引払可申哉ト存候、路程モ十里計ノ由候得共、難場ニテ五六日ハ隙取候由、困入申候、澤氏被差遣候間、委細承申候、爰許ヘモ只今折濱ヨリ罷帰、明日大形御届モ可申上之処、澤帰便ニ付申上候、尚細事ハ同人ヨリ御聞取、宜御披露可被下候、荒々用向迄如此候、謹

言、

十月十四日

堀直太郎

石巻ヨリ

木梨先生

高橋先生侍史

追啓、榎本等ヨリノ書附、大田盛仙台家臣ト申者ヨリ差

出候間、差上申候、以上、

平潟口総督日誌

二七ノ二

仙臺藩記ニ云、元徳川臣榎本和泉事金次郎等、脱艦數

百人ニテ領内海岸へ着、陸地ヨリモ脱走人数多相集リ、

寒風澤並石ノ巻等へ屯居候ニ付、所置振參謀河田左久

馬殿へ奉伺候処、格別ノ御寛典ヲ以、死一等被相宥候

旨被仰渡候ニ付、夫々説得仕候処、承伏不仕ニ付、討伐

可仕ト奉伺候処、尚御説得ノ御見込有之候間、先々見

合置候様御話有之、其尽ニ仕置候処、其折左久馬殿急

ニ東京へ御登ニ被為成、仍テ參謀高橋熊太郎殿へ奉伺

候処、謹慎中ニ付テハ、兵ヲ用フルニ不及、官ニテ御

処置被成置由被仰談、則御出兵ノ処、右船既ニ脱艦ニ

及候由ニ御座候、

二八 車駕東京ニ抵リ大総督等奉迎ス

十三日、車駕東京ニ抵ル、大総督有栖川宮熾仁親王・鎮

將三條實美・東京府知事烏丸光徳等ハ、品川ニ奉迎シ、

呉服橋門内ニハ、諸官有司並列シ、議定以下三等官以上

及無役ノ諸侯ハ、坂下門外ニ奉迎ス、外国人亦祝砲ヲ発

シテ慶賀セリ、ソノ概況左ノ如シ、

東巡日誌ニ云、十月十三日午晴、卯之半刻品川駅 御

發輦、芝増上寺御小憩、午之半刻東京西城 御着輦、

是日大総督有栖川宮・鎮將三條公・東京府知事烏丸卿

等、品川駅迄御出迎、御先行、呉服橋門内ヨリ諸官有

司列立拝迎ス、外国人亦品川駅 御發輦之時ト、芝御

小憩及ヒ東京城 御着輦ノ時ト、凡テ三度祝砲ヲ發シ

テ慶賀ス、

二九 江戸城ヲ東京城ト改ム

コノ日、江戸城ヲ東京城ト改メ、群臣ノ登城出仕ハ參仕・

參内ト称スベキ旨ヲ達セラル、ソノ書左ノ如シ、

二九ノ一 達書

御東臨之節ハ、当城ヲ以テ

皇居ト被定候ニ付、以来東京城ト可称事、
但過日被

仰出候行宮之称被止候事、

〔十月十三日〕

行政官

別本官中日記・津和野藩記
井上正順家記 十三日

二九ノ二

群臣登、城出仕等、参仕・参 内ト可称旨被

仰出候事、

十月

行政官

別本官中日記十三日
東京城日誌

三〇 薩摩・安藝二藩兵ノ征討軍勞ヲ慰シ、酒

肴ヲ賜フ

コノ日、薩摩・安藝二藩兵ノ征討軍勞ヲ慰シ、酒肴ヲ賜
フ、ソノ慰勞文左ノ如シ、

(注意) 薩藩軍ノ大部隊ハ、右同文ヲ十月廿四日ニ下賜

セラレタレトモ、去月廿四日會津ヲ発途シタル第一小

隊ヨリ第六小队迄ノ小銃隊、並ニ一番遊撃、一番・二

番大砲隊及ビ臼砲手ニ与ヘラレタルモノカ、未ダ此ノ

方ノ記録ヲ見出サズ、

三〇ノ一

奥州ヨリ頃日引揚候官軍、明十三日

御着輦之節、便宜場所於テ拝礼可致旨、

思召ヲ以テ被

仰出候ニ付、此段可相達旨

御沙汰候事、

行在所

十月十二日

弁事

大総督府

浅野長勲家記

三〇ノ二

別紙ヲ指ス之通被

仰出候、明十三日五ツ時、呉服橋内へ可罷出旨

御沙汰有之候、尤御使番耆人罷出、都合等御打合可申

間、此段御達申候也、

大総督府

十月十二日

下参謀

藝州藩

隊長中

浅野長勲家記

長勲家記ニ云、永々之出陣大儀ニ 思召、此段イツレ

ヘモ可申聞旨、 主上御詞ニ候、

薩摩藩ヘノ達書、家記之ヲ伏ス、勅語及ヒ賜品亦同

シ、蓋ニ藩同一ナルヘシ、

三〇ノ三

本日達書

各通 薩州兵隊

藝州兵隊

久々之軍旅、殊ニ苦戦尽力之段連々被

聞食、

叡感不淺候、此度東京 御駐輦之折柄、帰陣ニ付、不

取敢為慰勞賜酒肴候事、

但東北一先ツ平定ニ至ルト雖モ、前途

皇国御維持之儀、深ク

御苦慮被為遊候ニ付、尚此上紀律嚴肅ニ相守リ、

誠実ヲ旨トシ、緩急可遂奉公旨

御沙汰候事、

十月

行政官

別本官中日記十三日
浅野長勲家記・慶応出軍雜記

長勲家記ニ、伊丹酒三樽・鯛三百枚下賜候事トアリ、

按スルニ、諸藩兵十九日以後陸続東京ニ凱還シ、二

十五日ニ至リ慰勞アリ、参看スヘシ、

三二 千種有任ヲ勅使トシテ病院ニ差遣シ、兵

士ノ創痍者ヲ慰問ス

十五日、千種少将^{有任}ヲ勅使トシテ、病院ニ差遣セラレ、

各藩ノ負傷者、病者ニ菓子ヲ下賜セラル、ソノ文左ノ如

シ、

明治元戊辰年十月十五日、千種少将公

勅使にて、各藩手負病人等に、御菓子

下賜候事、

久々之軍旅、各遂苦戦被創傷候段、御不慙被 思食候、

依之為 御慰勞 勅使被差立、 御菓子下賜候事、

辰十月

行政官

三三 奥羽・越已ニ平定セシヲ以、越後口総督

府諸軍ヲ慰勞シ、漸次其ノ兵ヲ班サシム

コノ日、奥羽・越已ニ平定セシヲ以テ、越後口総督府諸軍ヲ慰勞シ、令シテ漸次其ノ兵ヲ班サシメ、総督嘉彰親王新發田ヲ発セラレ、参謀西園寺公望留リテ警備兵ヲ督ス、ソノ重ナル令達左ノ如シ、
三ノ一
朔日達書

各通 御親兵

徵兵

諸藩

今般奥羽・越諸賊降服略及鎮定候条、全以各藩之尽力、

諸兵隊苦戦之儀ト、深大儀ニ被

思召候、尚追テ被

仰出候旨モ可有之候得共、一ト先可致帰休候様

御沙汰候事、

辰十月

北征日誌
飯山藩記朔日

三ノ二
五日達書三通

諸藩大砲・器械・彈藥其外差向入用無之品々ハ、新發田表ニ相残置、來春ニ至リ、海路運送御世話被下候条、成丈ケ新發田表ニ可相残、道中持帰リ候テハ、第一人馬多端ノ繼立ニ相成、宿々ニ於テ差間可申候ニ付、極

荷輕ニシテ可致帰国候事、

辰十月

金沢藩記
飯山藩記日五

此度藩々人数帰国被

仰付候ニ付テハ、手負並自然病者不殘柏崎表大病院へ

可引取、就テハ病人其外荷物等、都テ運送方取計向ハ、

柏崎大病院附會計方差凶ヲ受可取計候事、

辰十月

金沢藩記
飯山藩記日五

一諸藩兵隊為帰休、自国へ可差戻旨、被 仰出候ニ付テ

ハ、北陸道筋致通行候藩々ハ、其藩人数並人馬繼立高

等小書付ニシテ、前々日迄ニ柏崎表會計方へ申出有之

候得ハ、兵隊賄人馬繼立等無料ニテ差支不致様、先触

ヲ以宿駅へ相達可申候間、右様御承知可有之候、並信

州路其外等通行イタシ候藩々モ、前同様相心得、小千

谷ヨリ出張之會計方へ可申出候事、

但自国へ被差戻候ニ付、藩々ノ心得ニテ、道中筋休

泊賄人馬賃錢相払立、帰国致シ候向モ可有御座哉

モ難計候得共、此儀ハ堅ク御差留、一同無料ニテ

可被引取旨被仰出候間、向々ニ不相成様一手ニ可

被引取候事、

辰十月

會計本局

金沢藩記
飯山藩記
日五

三ノ三

明十五日巳ノ刻、 宮御方当表 御出駕被遊候ニ付、

加州兵隊明十五日当表出立指扣、 明後十六日出立可致

候事、

但諸兵隊不残出立、 一日充見合出立可致候事、

右之通、 加州ヲ始諸藩兵隊不洩様通達可被成候、 此段

早々相達候、 以上、

十月十四日

御本宮

【参照】

按スルニ、越後出征御親兵・徴兵、及ヒ加賀・薩摩以下四十二藩、今家記・藩記・家譜及ヒ軍務官記等ノ諸書ニ抛リ、兵員ヲ摘録スル左ノ如シ、

御親兵 二百五十人余

御旗本隊 二百余人

兵十二番隊 未詳

徴兵一番隊 未詳

加賀藩 三千九百四十余人

薩摩藩 二千二百四十五人

尾張藩 千四百十二人

安藝藩 六百六十九人

長門藩 二十三小队
第一砲隊

越前藩 千四百六十四人

彦根藩 二小队

土佐藩 六百三十三人

高田藩 千五百二十人余

小倉藩 三百二十人

小濱藩 三百四十五人

富山藩 五百九十四人

松代藩 千四百八十七人

大垣藩 二百十人

新發田藩 大凡千四百余人

高崎藩 一小隊

明石藩 七十九人

岩國藩 三百十一人

松本藩 三百九十二人

上田藩 百三十六人

𨮒肥藩 一番隊

府中藩	四百二十人
高遠藩	百二十七人
福知山藩	五十人
佐土原藩	百五十五人
高鍋藩	八十一人
足守藩	六十二人
飯山藩	百四十一人
與板藩	二百三十一人
飯田藩	八十人
龍岡藩	六十三人
三日月藩	五十人
岩村田藩	六十一人
須坂藩	百三十三人
椎谷藩	百六十九人
野村藩	百貳人
三日月藩	七人
小野藩	五十六人
三根山藩	未詳
小松藩	未詳

総計二万九千三百二十余人
 二十六小隊、第一砲隊一、番隊

三三 五代友厚ヨリ小松清廉へ大坂運上所ノ名
 称変更ニ関スル書翰

コノ日、五代友厚書ヲ小松清廉ニ贈リテ、大坂運上所ノ
 名称ヲ、大坂府外国事務局ト変更センコトノ意見ヲ陳述
 セリ、ソノ書左ノ如シ、

五代友厚小松清廉ニ贈ル書

以手紙致啓上候、然ハ当地外国事務取扱局ノ義、是迄
 運上所ト称ヘ来候ヘ共、全ク收税筋而已取扱候局ニハ
 無之、都テ外国交際上事務取扱候義ニテ、既ニ長崎・
 神戸・横濱・江戸等ハ外国事務取扱候局ヲ以、外国事
 務局又ハ外国管事務所ト相称ヘ、運上所ハ全ク收税筋
 而已取扱候儀ニ候ヘハ、当地ニ於テモ大坂府外国事務
 局ト相称ヘ、西口表大門ヲ以、外国事務局出入口ト取極、
 南口門ヨリ是迄收税筋取扱候場所ヲ以、運上所ト取
 極度、左候テ局中ノ区別ハ、二階ヲ以事務局ト定メ候
 得ハ、外方ヘ掛合等モ可宜、大坂府ニモ談判ノ上、此
 段相伺候、以上、

辰十月十五日

五代才助

小松玄蕃頭殿

三四 失踪中ノ元御小姓与萩原強之丞會津ニテ
戦死セシニヨリ、特別ニ葬式料ヲ下賜ス

コノ日、藩庁ニテハ、元御小姓与萩原強之丞失踪中ナリ
シモ、今回會津征討軍ニ加ハリ、戦死セシニヨリ、特別
ヲ以、葬式料ヲ下賜ス、ソノ達書左ノ如シ、

本御小姓与

萩原強之丞

金五拾兩

右ハ先年於江戸致欠落候者ニテ、被召放置候処、此節
會津征討付御国兵隊へ馳来、鈴木武五郎隊ニテ遂戦死
候付、別段之評議ヲ以、為葬式料右之通被成下候条、
親類へ可被申渡旨、大隊長へ可申渡候、

十月

良馬

辰十月十五日

御本文之通大隊長へ申渡候、

山内賢助

三五 東北平定ニ付藩兵ノ撤還ヲ命ス

十六日、出征諸藩ニ令シテ、東北平定ニ付、藩兵ノ撤還
ヲ命セシ者、兵士ハ直チニ帰藩セシメ、総括又ハ隊長ヲ
シテ東京ニ至ラシム、尋デ更令シテ一ニソノ総督ノ命ニ
從ハシム、ソノ達書左ノ如シ、

京師達書五通^(ママ)

出兵諸藩へ

東北平定、追々人数引払被

仰出候分ハ、都テ兵隊直ニ国邑へ可引取候、尤総括或
ハ隊長、帰途東京へ罷出候様申達候事、

十月〔十六日〕

軍務官

出兵之節、

御旗御下渡ニ相成居候藩々、帰陣之上、早々当官へ返
上可有之候事、

十月〔十六日〕

軍務官

池田輝知家記^{十六日}
上田藩記

二十五日達書

出兵諸藩へ

東北平定、追々人数引払被

仰出候分ハ、都テ兵隊直ニ国邑へ可引取候、尤総括或ハ隊長、帰途東京へ罷出候様申達置候得共、追テ東京ヨリ何分之御達モ可有之候間、先ツ出張先総督ヨリ初発御差函之通相心得、進退可有之候様更ニ相達候事、

十月(二十四日)

軍務官

毛利元徳家記二十五日
上田菰野藩記

諸藩

公用人

東北平定ニ付、凱旋ノ兵隊、出先ヨリ直ニ引揚帰国之向ハ、人員・名前尤凱陣帰休等ノ始末、巨細ニ取調可届出様申達候事、

但於東京為 御慰勞酒肴頂戴致シ候向ハ、其始末可

届出候事、

十一月(九日)

軍務官

浅野長勲家記
金沢藩記

三六 島津忠義近日中ニ上京スヘキ旨ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、今上東幸御不在中、忠義京師機務

ノ商議及ヒ警衛ノ為メ、上京ノ命ヲ蒙リタレトモ、出船ノ都合ニテ延引シタレハ、近日中ニ日ヲ定メテ上京スヘキ旨ヲ達セリ、ソノ書左ノ如シ、

今上今般御東幸ニ付、

太守様御儀、御留守中機務御商議、且京師御警衛向被為蒙仰、早速御上京之筈候処、御船繰等ニ付、是迄無抛御延引被為及、近々御船御修覆濟之上可被遊 御上京旨被 仰出候、此旨向々江不洩様早々可致通達候、

但御日限之儀ハ、追て可被 仰出候、

明治元辰十月十六日

備後

三七 天皇万機ヲ東京城ニ親裁ス

十七日 天皇万機ヲ東京城ニ親裁アリ、百官ニ詔シテ、同心戮力鴻業ヲ輔翼シ、正義直諫シテ忌憚スルコト勿レト、ソノ詔書及ヒ達書左ノ如シ、

詔皇国一体、東西同視、朕今幸東京、親聽内外之政、汝百官有司同心戮力、以翼鴻業、凡事之得失可否、宜正義直諫啓沃朕心、

明治元年戊辰十月

東京城日誌十七日
東京官中日記

三七〇二
達書

今般非常之
聖断ヲ以テ

御東幸、既ニ

御着輦ニ相成候処、東北略及平定 御満足被 思食候
得共、前途内外之形勢深ク 御懸念被為在、皇国一体
之 御成業弥以 御苦慮被為遊候ニ付、別紙

詔書之通、日々 臨御万機

御親裁被

仰出候、就テハ百官有司、質素簡易ニ原キ、至正公平

ヲ旨トシ、同心戮力益可励忠勤、尤御為筋存付候儀ハ、
何事ニ不依不憚忌諱、正義直諫可致様

御沙汰候事、

十月

行政官

東京城日誌十七日
東京官中日誌

三七〇三
十五日弁事回達

明後十七日第十字ヨリ出 御、万機

御親裁被為遊候旨被

仰出候ニ付、百官諸有司何レモ無遲滯出勤可有之様、

御沙汰候事、

十月〔十五日〕

行政官

別紙之通

御沙汰相成候付、為御心得申入候也、

十月

弁事

阿波中納言殿

東久世中将殿

長岡左京亮殿

参 与

大総督府

会計局

東京府

刑法官

別本官中日記十五

三七〇四
詔書

詔、崇神祇重祭祀、皇国大典政教基本、然中世以降政

道漸衰、祀典不舉、遂馴致綱紀不振、朕深慨之、方今更始之秋、新置東京、親臨視政、將先與祀典張綱紀、以復祭政一致之道也、乃以武蔵国大宮駅氷川神社、為

当国鎮守、親幸祭之、自今以後歲遣奉幣使、以為永例、

明治元年戊辰十月(十七日)
東京城日誌十七日
東京官中日記

三七ノ五
今般

御東幸被為遊候ニ付テハ、祭政一致之

思食ヲ以テ、別紙

詔書之通、武蔵国大宮駅氷川神社、以後当国之鎮守

勅祭之社ト被為定、当月下旬、

行幸

御参拜可被為遊旨被

仰出候事、

十月

行政官

東京城日誌十七日
東京官中日記

二十七日、大宮行幸之条参看スヘシ、

三七ノ六

木戸孝允手記摘要ニ云、十月十七日晴、十一字参

内、五字退出、今日始テ 臨御、祭政一致等之 歡慮被 仰出、

三八 鎮將府ヲ廢シ三條實美輔相故ノ如シ

十八日、鎮將府ヲ廢セラル、三條實美輔相故ノ如シ、ソ

ノ達書左ノ如シ、
三八ノ一
達書

東北未タ平定ニ至ラサルノ折柄、一先鎮將府被相立

候処、今般

御東臨被為遊候ニ付テハ、万機

宸断ヲ以テ被

仰出候御儀ニ付、自今鎮將府被廢候事、

十月(十八日)

行政官

東京城日誌十八日
東京官中日記

三八ノ二

三條右大臣

東北未タ平定ニ至ラサルノ折柄、一先鎮將府被相立候
処、今般

御東臨被為遊候ニ付テハ、万機

宸断ヲ以テ被

仰出候御儀ニ付、鎮將辞退之儀言上、其情実被

聞食、願之通被免候、尤輔相可為是迄之通事、

十月

行政官

東京城日誌十八日
東京官中日記

二条、東京官中日記・職務進退録並二十九日トス、
今東京城日誌ニ從フ、

三九 大総督府参謀伊地知正治ノ戦勞ヲ慰シ、

其ノ参謀ヲ罷ム

コノ日、大総督府参謀伊地知正治ノ戦勞ヲ慰シ、其ノ参謀ヲ罷ム、ソノ文左ノ如シ、

伊地知正治

其方事、春以来永々之対陣、矢石之間ニ艱難致シ、剩蒙創傷、不容易遂勤勞、竟ニ會城ヲ拔キ、奥羽平定之奏成功候段、

叡慮不斜、依之滞府申付、御用之品モ可有之処、疾病旁願之通参謀職令免許、帰国差免候得共、此上精々遂保養、尚国家之御為可尽忠勤候事、

十月

東京城日誌
東征總督記十八日

四〇 藩庁目下ノ急ヲ救フ為假病院ヲ製薬方ニ設ケルコトヲ達ス

〔頭註〕廿八日ノ達ニ
コノ日、藩庁ニテハ、曩時医学院ノ役名ヲ定メ、漢・洋兩医道ノ長短ヲ取捨研究シテ、済生ノ目的ヲ達スヘキヲ令シ、病院ヲ建設スヘキノ処、方今軍費多端ノ故ヲ以テ、目下ノ急ヲ救フ為メニ、假病院ヲ製薬方ノ一部ニ設ケテ、治療又ハ施療ヲナサシムベキヲ達ス、ソノ文左ノ如シ、
一 医道之儀人命済生之職掌不輕科業ニテ、当世態一涯人民御養育之御仁道御施行可被遊、深思召之訊被為在、
医学院教授御役名等被召建、医術教導方等之儀、先達テ細々申渡通ニ候、就ては洋漢折衷を以、第一実験之治道相開、済生之基本相立候様ト之
御趣意ニテ、涯々病院をも被召建、生民御懇育之道盛大御施行被遊度候処、方今御軍事莫大之御入費、一時之御施行被為調兼候間、追々其通之御取扱も可有之事ニ候、乍然当世一統困窮之砌、今日難決之者共薬用等届兼候向モ可有之、死生ニモ相拘、別て不便之事ニ被思

召上候間、此涯御製藥方之内一席可也之病院被召建、

医学院御役々等之内より相詰、極困窮之者一日大概百

人位之見当ニテ致療治様被仰付候条、洋漢医須熟深吟
味を尽し、長を取、短を補、厚 御慈育之御趣意行届

候様可心掛候、依之不依貴賤療治願之向は、病院へ罷
出、療治を受候様可致候、尤極困窮之者は、藥料等不

及上納、御物御構を以被成下候条重畳厚 御恩沢之程、

一統難有可奉承知候、此旨医学院助教並御製藥奉行被

申渡、向々江致通達、地頭・領主へも可申渡候、

但病院諸取扱仕向之儀は、医学院助教并御製藥奉行

局々致吟味、申出様可申渡候、

(奉)廿八日
辰十月十八日

右衛門

四一 蜂須賀茂韶・東久世通禧・大久保利通等ヲ

從來通本官ヲ以東京ニ在勤セシム

十九日、議定蜂須賀茂韶・東久世通禧・大久保利通等ヲ
シテ、從來ノ通本官ヲ以テ東京ニ在勤セシム、ソノ達書

左ノ如シ、

各通 蜂須賀中納言

東久世中將
大久保一藏

今般鎮將府被廢候処、是迄之通、以來本官ヲ以テ東京
在勤可有之様

御沙汰候事、

十月

行政官

職務進退録十九日・蜂須賀茂韶・
東久世通禧・大久保利通履歷書

四二 會津並其ノ附近ノ戰鬪ニ於ケル薩藩死傷

者ノ届出ヲナス

二十日、會津並ニ其ノ附近ノ戰鬪ニ於ケル薩藩死傷者ノ
届出ヲナセリ、ソノ書左ノ如シ、

去月廿二日、會津容保自身歎願書差出、謝罪降伏相成

候ニ付、右歎願書写相添、去ル四日須磨敬二郎ヲ以、

軍務御役所迄御届申上候次第御座候、右ニ付於諸所弊

藩死傷別紙之通御座候間、此段御届申上候、猶委細之

儀申越候ハ、其節御届可申上候、以上、

薩摩少将家来

(立去)

新納嘉藤二

十月

會津並於諸所進擊ニ付戰死

伊佐敷金之進

山内次郎

足輕 加藤次左衛門

右八月廿三日、會城攻撃之節手負、九月三日死、

竹内正介

右八月廿三日、同断之節手負、三春病院ニ於テ死、

川崎休右衛門

右八月廿三日、同断之節手負、同所ニ於テ九月十四日

足輕 木原藤一郎

夫卒 岩右衛門

右八月廿一日、會津領ボナイ峠ニ於テ戰死ス、

田中小太郎 上原正八郎 藤井才之助

川上彦八郎 藺田勇吉 中嶋岩次郎

山口彦八

米良仲之丞 猪俣壮七郎 奈良原彌六左衛門

右八月廿六日、同断之節手負、於同所九月六日死、

萩原強之丞 松崎壮八 丸田喜右衛門

山本中助

夫卒 小左衛門 富次 藤右衛門

右八月廿六日、同断之節手負、於同所九月五日死、

勝三郎 林太郎 藤助

諏訪次郎右衛門

藤左衛門 伝藏 喜之助

右八月廿七日、同断之節手負、於同所九月五日死、

玉ノ井村道案内 藤四郎 半左衛門 山下助右衛門下人 榮藏

川上四郎次

木場孝之助

右八月廿八日、同断之節手負、於同所九月五日死、

右八月廿三日、會城攻撃之節戰死、

藤崎勇藏

脇岡八郎 福富嘉右衛門

右八月廿九日、同断之節戰死、

右八月廿四日、同断、

夫卒 松藏

加藤郷兵衛 西田藤助

右九月九日夜、天寧寺町口ニ於テ戰死、

右八月廿六日、同断、

米良清之助

右九月十四日、川原町口ニ於テ戰死、

會津并諸所ニ於テ進擊之節手負

吉井七之丞

右八月廿一日、二本松領之内山ノ井ニ於テ手負、

平田九十郎

川上嘉次郎

右八月廿一日、會津領ボナイ峠ニ於テ手負、

佐々木清藏

右八月廿一日、二本松領玉ノ井村ニ於テ手負、

種子嶋宗之丞

堀八太郎下人

喜助

百幸衛下人
仲助

右八月廿二日、會津領ボナイ峠ニ於テ手負、

藤崎清之丞

夫卒源八

右八月廿二日、會津領於猪苗代手負、

大脇源左衛門 益山次左衛門 武郷兵衛

梁瀬源次郎 村田源助 筒井清五郎

毛利權之丞 左近允新六 川崎仲之丞

蒲生彦四郎 榎本源次郎 市來宗次郎

山田直四郎 小出健齋 若松喜介

白濱助之進 奥清輔 松方長作

飯牟禮休左衛門 梅北八郎左衛門 淵邊彦二

汾陽直次郎 肥後平八 梅北伊八郎

竹内惣七 大山彌助 新納莊右衛門

木藤吉左衛門 土師孫市 大山十郎次

淺田政次郎 川上源七郎 有馬七左衛門

種子島宇左衛門 鼻山源七 和田乘太郎

廻新次郎 山口直右衛門 福島良介

讚良竹五郎 市成彦右衛門 西佐一郎

松元彦四郎 酒匂軍助僕 金助

夫卒民助 仁助 清次郎 喜助 長藏 仲藏

右八月廿三日、會城攻撃之節手負、

古河源助

右八月廿三日、玉ノ井ニ於テ手負、

村山源左衛門 夫卒甚吉

右八月廿四日、手負、

夫卒松太郎

右八月廿五日、手負、

東郷巳之助 桐野藤五郎

右八月廿六日、手負、

郡山甚五左衛門 山形龍次郎

右八月廿六日、會城攻撃之節、於建福寺門前手負、

加治木彦太郎

右八月廿八日、手負、

竹山藤右衛門

夫卒小次郎

右八月廿九日、手負、

柏原吉左衛門

石原七郎太

右九月八日、飯寺ニ於テ手負、

夫卒伊助

勘太郎

右九月十一日、手負、

谷村孫七

右九月十二日、會城攻撃之節於六日町口手負、

二階堂彦太郎

右九月十四日、手負、

向井納四郎 肥田軍右衛門 豊丸與藤次

曾木彦次

右九月十四日、會城攻撃之節、於河原町口手負、

川南東右衛門

右九月十五日、青木村ニ於テ手負、

松田健四郎

右九月十七日、手負、

夫卒市之丞

右九月廿日、手負、

以上

四三 藩庁七島並口永良部島へ漂着ノ英人並朝

鮮人ノ処置方ヲ達ス

二十一日、藩庁ニテハ曩時領内七島並ニ口永良部島へ、英人拾貳人・朝鮮人九人漂着セシヲ送り届ケ来リシヲ以テ、ソノ処置方ヲ達シタリ、ソノ文左ノ如シ、

一英人拾貳人

一朝鮮人九人

右は七嶋并口永良部嶋江漂着、屋久島より詰横目遠矢彦右衛門警固ニテ山川迄送届、直ニ前之濱迄致廻船候段申来候付、其通取計候様可申渡候、左候て廻舟之上は、英人は磯異館江、朝鮮人之儀は南林寺寮舎之内江被召置、滞在中町役計を以、諸事相弁候様申付候条申渡、山川地頭并可承向江も可申渡候、

辰十月廿一日

龍衛

四四 東征大総督熾仁親王上表シテ賊徒平定ヲ

以其任ヲ解カンコトヲ請フ

二十三日、東征大総督熾仁親王上表シテ、賊徒已ニ平定ニ就クヲ以テ、其ノ任ヲ解カンコトヲ請フ、ソノ上表文左ノ如シ、

上表文

誠恐誠惶頓首、謹テ上表仕候、今春徳川慶喜等ヲ始メ不逞之徒、闕下ニ暴挙シ、奉驚

天聰、竟ニ天下之騷擾ヲ釀成候ニ付、不被為得止 王師振興之始ニ当リ、熾仁不肖之身ヲ以大総督之重任ヲ蒙リ、日夜勉勵仕候得共、素ヨリ鈍劣ニシテ為ス所ヲ不知、恐懼戰慄罷在候、然ルニ諸道之総督ヲ始メ、參謀其他列藩戰士ニ至迄、戮力勲勉ノ功ニヨリ、今般賊魁松平肥後及ヒ奥羽ノ逆徒、悉熾仁カ軍門ニ降伏シ、以天裁ニ随ハン事ヲ哀訴候、依之日ヲ刻シ、東京ニ護送スルノ運ニ立到リ候、尚宜シク典刑ヲ正シ、万歳之龜鑑タラシメン事ヲ奉希望候、素ヨリ今日ノ成功、聖運ノ然ラシムル所トハ乍申、偏ニ朝野之臣子、鞠躬尽カノ功ニ依リ、速ニ

皇運ヲ挽回シ、今日アル事ヲ致シ候、実ニ千歳ノ下、今日ヲ不可忘事ト奉存候、抑熾仁其任ニ雖不当、人々補助ノカヲ尽シ、以テ平定之功ヲ奉奏候、此ニ於テ始テ熾仁カ任滿リ、宜ク速ニ熾仁カ大任ヲ解キ給ハン事ヲ奉懇願候、熾仁誠恐誠惶頓首謹言、
明治元年戊辰十月廿三日 熾仁

有栖川宮家記

○二十八日ニ至リ其請ヲ聽ス、參看スヘシ、

○東征総督記ニ云、十月廿八日大総督府御返上之御書面、各藩へ布告相成候事、

四五 私ニ貨幣及紙幣ノ価格ヲ高低スルヲ禁ス

コノ日、府藩県ニ令シテ、私ニ貨幣及紙幣ノ価格ヲ高低スルヲ禁ス、ソノ文左ノ如シ、

御一新後、万国貨幣之釣合ヲ以テ、並錢始浪錢等、夫々直増通行御定被仰出候処、其国所ニ於テ心得違之者共、十二文通行ノ処、或ハ六文、或ハ八文位ニ取引致シ、其ニ準シ浪錢等ニ至ル迄、御定通ニ通用不致趣相聞へ、以ノ外ノ事

二候、元來貨幣ノ儀ハ、僻境遐陬ニ至ル迄、不一樣候
テハ不相濟事ニ付、先達テ金札通用向ニ付テモ、嚴重
被

仰出候通、府藩県ニ於テ嚴重ニ取調、天下一円定額之
通通用可致様

御沙汰候事、

十月〔二十三日〕

行政官

官中日記^二_三
毛利元徳家記^三_日

紙幣通行之諭令ハ七日ニアリ、

四六 軍務官ニ命シテ海陸軍制ヲ確定シ海軍局

ヲ東京築地ニ置ク

二十四日、朝廷軍務官ニ海陸軍制ヲ確定セシメラレ、十
一月二日ニ至リ、海軍局ヲ東京築地元濱御殿へ建設セラ
ル、

軍務官

海陸軍之儀ハ、当今第一之御急務ニ付、速ニ基礎相立
候様、講究可有之旨、

御沙汰候事、

十月〔二十五日〕

行政官

東京官中日記^二_四

別本官中日記ニ、京師ニ於テモ軍務官へ御達相成候
様、太政官へ申越候事トアリ、

十一月二日達書

東京府

今般築地字元濱御殿へ、海軍局御取建ニ相成候間、此
段相達候事、

十一月

行政官

東京官中日記^二_日

海軍省報告書ニ云、明治元年十一月二日海軍局ヲ東京
ニ置カル、三年二月濱殿離宮ヲ以テ海軍所ト定メラル、
三月五日離宮濱殿ヲ受取、閏十月廿二日築地濱殿ヲ以
テ、海軍所ト定メラル、ヲ止メ、代地トシテ東京築地
四丁目一番地、旧尾張・安藝・一橋・金澤・桑名・増
山邸地<sup>原註、七方七千
四百九十七坪</sup>等ヲ付セラル、

四七 薩州兵隊等ノ征討軍勞ヲ慰ス

コノ日、島津左衛門・島津伊勢以下統卒ノ將校ニ、大総

督府ヨリ拝謁ヲ賜ヒ、御下賜品アリ、兵隊へモ酒肴ヲ賜

フ、
四七ノ一

二十三日達書

各通 薩州兵隊

肥州兵隊

久々之軍旅、殊ニ苦戦尽力之段、速ニ被

聞食、 叡感不淺候、此度東京 御駐轡之折柄、帰陣

ニ付、不取敢為慰勞賜酒肴候事、

但東北既ニ平定ニ至トイヘトモ、前途皇国御維持之

儀、深ク

御苦慮被為遊候ニ付、尚此上紀律嚴肅ニ相守リ、

誠実ヲ旨トシ、緩急可遂奉公旨

御沙汰候事、

十月

行政官

東京官中日記
鍋島直大家記

四七ノ二

島津伊勢日記

廿四日 晴

一今日四ツ時、大總督府ヨリ島津左衛門殿・拙者并隊長ノ人数桂内記・永山左内・志岐正十郎・鮫島八十郎・

大迫新左衛門・伊東四郎左衛門、半隊長ニテ隊長ノ場

相動候大島羽左衛門・坂元彦右衛門、御用有之、当分

大總督有栖川宮様ニハ、因州ノ御屋敷御旅館故、右江

御留守居方附役隈元敬一郎同伴ニテ罷出候処、宮様御

事、東京城ヨリ急ニ御用召有之、御参 内中ニテ拝謁

無、御名代参謀穂波三位様ヨリ、長々ノ軍旅大儀ニ被

思召トノ事ニテ、御目錄ヲ以、

一白鞘短刀

一腰

一白縮緬

二疋

拝領被仰付、尤御短刀ハイマタ御出来合無之候付、追

テ国元ノ様可差遣トノ御沙汰ニテ、島津左衛門殿ニモ

同様、其外隊長ハ白縮緬一疋ツ、半隊長兩人ハ八丈

島一反ツ、皆々穂波様江拝謁席ニテ拝領被仰付候事、

目錄

一毛布

代金千五百九十六兩

一酒肴

代金二百六十六兩

右扣席ニテ、此節引揚候兵隊八小队江拝領被仰付トノ事也、

一十二字比、又々東京府弁事役所ヨリ、島津左衛門殿・拙者兩人宛ニテ、早々御用有之付、罷出候様致承知候付、御留守居内田仲之助同伴ニテ兩人罷出候処、千種中將様御出會ニテ、左之通致承知候、

薩州

兵隊

久々ノ軍旅、殊ニ苦戦尽力ノ段速ニ被聞食、叡感不淺候、此度東京 御駐輦ノ折柄帰陣ニ付、不取敢為慰勞賜酒肴候事、

但東北一先平定ニ至ルトイヘトモ、前途皇國御維持ノ儀、深ク 御苦慮被遊候付、尚此上規律嚴肅ニ相守リ、誠実ヲ旨トシ、緩急可遂奉公旨、

御沙汰候事、

十月

行政官

右ノ通御書附御渡、御酒五樽・錫五十連、拙者旅宿江持參ニ付、明日隊長御用差出、御書附拜見、酒肴渡付候儀取計筈候事、

四八 清水谷公考青森へ転陣シ榎本武揚五稜郭及ヒ箱館二分抛ス

二十五日、先是榎本等ノ箱館ニ逃ル、ヤ、勢猖獗ニシテ官軍屢々利アラズ、此ノ日、清水谷公考諸藩兵ヲ率キテ青森ニ走り、賊五稜郭及ヒ箱館二分抛ス、ソノ大要左ノ如シ、

○清水谷公考事蹟ニ云、十月廿四日総軍不利、諸隊引揚、翌廿五日奥州青森港着艦、十一月一日弘前浪岡転移、尚亦同月十六日黒石へ転移、

○津輕承昭家記ニ云、十月二十五日賊愈來侵、勢甚猖獗、官軍後援無之、終ニ清水谷殿青森へ御転陣、二十六日官軍尽ク青森へ引揚候事、

○津輕旧記ニ云、十月廿五日清水谷卿青森へ御着岸、同所蓮心寺へ御宿陣相成候、右御警衛之兵隊、親兵隊箱蓋所運心寺へ御宿陣相成候、右御警衛之兵隊、親兵隊箱蓋ヲ指ス五十二人、松前藩百五十五人、大野藩八十人、福山藩四百人、同廿七日箱館表戦爭難持怵ニ付、蒸氣艦ニテ木村奎之助手五小隊原註、賊死、四人アリ、並福山・松前・大野兵隊共凡千人程、青森表へ着岸、

四九 藩庁島津忠義婚儀ノ期日ヲ達ス

二十六日、藩庁ニテハ忠義公御婚姻ノ儀式、来十一月朔

日ニ執行セラルベキヲ達ス、

一御前様御事、是迄 御内婚之処、来月朔日

御婚姻之御規式被為整善候処、此旨向々江致通達、大

奧其外様江御祝儀外略ス、

(朱)
一明治元 辰十月廿六日

龍衛

取次

細瀧權八

五〇 藩治職制ヲ定ム

二十八日、朝廷各藩ノ藩治ハ、各其ノ家ノ前例ニ從ヒ、

職制区々ナリシヲ以テ、一軌ニ出テシムルタメ、ソノ大

綱ヲ定メ、之ニ基キソノ細則ヲ定メテ之ヲ上ラシム、ソ

ノ達書及ヒ本藩ノ職制左ノ如シ、

五〇ノ一 達書

天下地方、府藩県之三治ニ帰シ、三治一致ニシテ御国

体可相立、然ルニ藩治之儀ハ、従前各其家之立ルニ隨

ヒ、職制区々、異同有之候ニ付、今後一般同軌之

御趣意ヲ以テ、藩治職制大凡別紙之通、可相立旨被

仰出候事、

十月(二十八日)

行政官

○別紙

藩治職制

執政無定員

掌体認 朝政、輔佐藩主、一藩紀綱政事無不總、

参政無定員

掌參政事、一藩庶務無不与聞、

公議人

掌奉承 朝命、代国論備議員、

一執政・参政ハ藩主ノ所任ト雖モ、從來沿襲之門閥ニ

不拘、人材登庸務テ公挙ヲ旨トシ、其人員黜陟等時

々太政官ニ達スヘシ、

一執政・参政之外、兵刑・民事及庶務ノ職制、其藩主

ノ所定ト雖、大凡府県簡易ノ制ニ准シ、一致ノ理ヲ

明ニスヘシ、

但職制一定ノ上ハ、之ヲ冊ニシテ太政官ニ達スヘ

シ、

一藩主ノ側ハラ、從來所置用人等ノ職ヲ廢シ、別ニ家

知事ヲ置キ、敢テ藩屏ノ機務ニ混セシメス、専ラ内

家ノ事ヲ掌ラシムヘシ、

一 公議人ハ執政・參政中ヨリ出スヘシ、
一大ニ議事ノ制ヲ立ラルヘキニ付、藩々ニ於テモ各其
制ヲ立ツヘシ、

十月〔二十八日〕

行政官

官中日記二十八日
毛利元徳家記

五〇ノ二
○鹿兒島藩上申書

藩治職制

〔前註先二月廿日、從來ノ議政所被廢、家老職被免官被、仰出、島津多右衛門
伊藤珍助〕

一大政一新、各藩職制可相改

勅諭之趣有之、新ニ

御政体ニ法リ、旧制ヲ取捨シ、簡明守リ易カラシム、
希クハ藩屏ノ任ヲ竭シ、以テ皇基ヲ扶植セン、尔チ
諸有司須ラク此意ヲ体シ、勉勵奮發、少シク怠ル無
キヲ要ス、

一小権ヲ以テ大権ヲ犯シ、己ノ務ヲ措テ人ノ務ヲ問フ
勿レ、

一 各局事ノ相関涉スル者ハ、宜シク公同商議スヘシ、
妄ニ私権ヲ立、他局ト扞格支吾シ、以テ事ノ壅滯ヲ
致ス勿レ、

一 旧制某官ヲ帶ヒ、某職ニ居ル、名義不当、改正セサ

ル可ラス、今斯ニ俸禄ノ差等ヲ定メ、以テ功勞ノ輕
重ヲ著ハス、一切兼官ソレ之ヲ停罷セヨ、
一 官等ニ準シ、俸禄ヲ定ムト雖トモ、職務殊ニ繁劇ナ
ル者ハ、別ニ季禄ヲ給シ、以テ其勞ニ酬ヒ其生計ヲ
資ク、

一 官ノ為メニ人ヲ求メ、人ノ為メニ官ヲ求メス、若其
人ナケレハ其官ヲ闕クモ可ナリ、因テ今職務ノ閑劇
ヲ計リ、ソノ人員ヲ定ム、容易ニ加入シ、冗官幸位
アラシムル勿レ、

一 諸官二年ヲ以テ交代シ、三月ヨリ翌々三月ニ至ルヲ
任限トス、一官二員已上アルモノハ、今後交代ノ時
其半ヲ殘シ、一年ヲ延シテ交代シ、新旧相雜ハラシ
ムヘシ、

但 歎績著明、衆望所屬ノ者ハ不在此限、

一 新政一定、諸有司宜シク奉守、失フナカルヘシ、若
シ 眞実事ニ臨ムテ便ナラス、或ハ別ニ良制アラハ、
更ニ商議ヲ經テ改革スヘシ、

〔卷「職制」〕

政府五官

○知政所神社、伝書二丁、
学館、醫院ヲ管ス

〔頭註朱〕明治三年正月改、執政 朝政ヲ奉体シ、紀綱ニ主持シ、神事ヲ懲罰シ、諸官ヲ云々、執政一人

朝政ヲ奉体シ、紀綱ヲ主持シ、諸官ヲ統領シ、機務ヲ処決シ、号令・賞罰・黜陟ノ典ヲ明カニスルヲ掌ル、

參政八人

執政ヲ輔ケ、政事ニ參預シ、庶務ヲ議定シ、關藩ノ戸籍ヲ總領ス、

公議人一人

參政ノ中選擇シテ之ニ任ス、其職掌一ニ朝制載スル所ノ如シ、

公用人京師・東京・大阪ニ分遣ス

邸中ノ庶務ヲ知り 朝命ヲ伝達シ、藩事ヲ上稟スルヲ掌ル、

公用方理事

公用人ニ附屬シ、庶務ヲ理処スルヲ掌ル、

見習

書記

事ヲ受テ上抄シ、文案ヲ勅署シ、式例ヲ校定シ、及ヒ記録・監脩ノ事ヲ掌ル、

見習

掌同本官、編脩・繕写ノ事ヲ主当ス、

筆者

官中ノ簿書、雜務ヲ掌ル、他官ノ筆者此ニ準ス、

○神社方寺院ヲ兼ヌ

〔頭註朱〕神社奉行廢止、神事調役ヲ置キ、藩内神社・陵墓・祭典等ノ事ヲ議処スルヲ掌ル

奉行 藩内神社 陵墓、祭典祝部及ヒ諸寺ノ事務ヲ總

判スルヲ掌ル、

副役

奉行ヲ佐ケ、官事ヲ糺判スルヲ掌ル、他官ノ副

役此ニ準ス、

〔朱〕見習

筆者

一伝事方

伝事

〔朱〕「事」イ、シ及ヒ諸士ノ名簿ヲ掌リ、命令ヲ伝達スルヲ掌ル、内外庶務ヲ執達シ、及ヒ士民ノ名簿・戸籍ノ事ヲ掌リ、命令ヲ伝達ス、各分課シテコレニ專任ス、

〔朱〕副役

筆者

一学館和漢洋三学、及ヒ書・曆・算・術・歌・譜料ヲ包括ス

〔朱〕「道」

学頭三学ヲ分督ス

館事ヲ総判シ、学政ヲ提督シ、政治ノ得失ヲ預議スルヲ掌ル、

助

掌同学頭、館事ヲ糺判スルヲ掌ル、医院ノ助此ニ準ス、

都講

講義・課試ノ事ヲ掌ル、医院ノ都講此ニ準ス、

授読

音読ヲ教授シ、生徒ヲ監督スルヲ掌ル、医院ノ

授読此ニ準ス、

助

筆者

〔卷〕「洋学局調役」

書師

助

曆師

助

算師測量術ヲ兼ヌ

助

訳

読師

助

〔卷〕「筆者」

一 医院病院・製菓院ヲ包括ス

学頭和漢洋及ヒ、鍼科・製菓・病院ヲ分督ス

院事ヲ総判シ、医学ヲ講明シ、施治・製菓ノ事

ヲ掌ル、

助

都講

授読

助

○会計局民事・出納・生産・官繕・製造・糧餉六方ヲ管ス

総裁一人

内外ノ用度・租税・金穀・物産・管作・市政ノ

事ヲ総判スルヲ掌リ及ヒ戸口ヲ知ル、

奉行

掌同総裁

内一人市政ヲ主当シ、市中ノ庶務・訴訟ヲ聽

受ス、

副役

勘定役

算計総括ノ事ヲ掌ル、

助

筆者

一 民事方

奉行

田宅・租税・賦役・駅遞・水利・開墾・牧場・

馬政ノ事ヲ掌ル、

〔朱〕檢者田土ヲ巡視シ、農桑ヲ催督ス

見習

筆者

一 出納方

奉行

内外金穀ノ出納、倉庫・俸禄ノ事ヲ掌ル、其金

穀二項分課シテ専任スヘシ、

副役已下コレニ准ス、

副役

見習

筆者

内幾人、公用方ニ分属シ、各邸ノ簿書・雑務ヲ

掌ル、

一 生産方

奉行

国内諸島ノ物産ヲ富殖スルヲ掌リ、及ヒ製菓院

ノ事ヲ知ル、其諸島事務ハ別課専任スヘシ、副

役以下コレニ准ス、

副役

見習

筆者

一 宮繕方

奉行

土木・工作・道路修造及ヒ席蓋諸舗設ノ事ヲ掌

ル、

副役

見習

〔朱〕「役場」 監作

宮作監督ノ事ヲ掌ル、

筆者

一 製造方

奉行

製鉄・紡績・彈藥・銃器・諸新創製造ノ事ヲ掌

ル、

副役

見習

〔米〕「監作」

筆者

一糧餉方

糧餉役

平戦ノ糧餉・醬豉・席蓋・諸舖設諸飲食料ノ事

ヲ掌ル、

助

筆者

○軍務局海陸二軍・兵器方ヲ管ス

総裁一人

海陸軍庶務・守衛・簡閱、及ヒ兵士名簿・戎器修

造・軍功ヲ檢覈スル等ノ事ヲ総判スルヲ掌ル、

但金穀出納ニ関涉スルモノハ、会計局ト商議ス

ヘシ、

調役

総裁ヲ佐ケ、官事ヲ議処スルヲ掌ル、

指南役一等ヨリ二等ニ至ル、ノ一等ハ副役ノ上ニ序ツ

兵制ヲ諳熟シ、以テ人ヲ教授スルヲ掌ル、

〔米〕「而テ教ル所、多寡輕重ヲ以テ等級ヲ分ツ」

筆者

一海軍方

船將一等ヨリ四等ニ至ル

海軍兵士ヲ檢校シ、戎具ヲ充備シ、規律ヲ立、

操鍊指揮ノ事ヲ掌ル、而シテ砲門ノ多寡ヲ以テ、

等級ヲ分ツ、但船數ニ拘ラス、

一等船將

廿四封度以上ノ砲、十二門以上ヲ指揮スル者、

二等船將

廿四封度以上ノ砲、六門以上ヲ指揮スル者、

三等船將

廿四封度以上ノ砲、二門以上ヲ指揮スル者、

四等船將

コレヲ商艦ノ長トス、本局ノ調役之ニ任ス、

士官一等ヨリ四等ニ至ル、只曾コレニ做フ

船將ヲ輔ケ、艦内ノ規律ヲ守定スルヲ掌ル、但

シ属スル所ノ船将ニヨツテ、等級ヲ分ツ、一等
士官ハ一等船将ニ属スルノ類、見習及ヒ大砲・
器械・運用・医師・書算コレニ准ス、

見習

大砲士官一等ヨリ三
等ニ至ル

器械士官一等ヨリ四等ニ至ル、
運用以下此ニ倣フ

運用士官

軍艦ハ器械ヲ上席トシ、商艦ハ運用ヲ上席トス、

軍艦ハ蒸気、商艦ハ風帆ヲ主トスル故ナリ、

測量士官

医師

書算

小頭

陸軍小頭同等ト雖トモ、海軍ヲ以テ上席トス、

其ノ兵士モ亦コレニ准ス、

一陸軍方

陸軍規則、一ニ英式ニ依ル、故ニ各官職掌ノ詳

ナル、宜シク式内ニ就テ之ヲ明知スヘシ、

大隊長

大隊ヲ分督シ、操練・指揮及ヒ監察スルヲ掌ル

教頭

隊中ノ総教タリ、

教佐

砲兵一隊長

騎兵一隊長

歩兵一隊長

右三職、各其隊ヲ分督シ、操練指揮ノ事ヲ掌ル、

半隊長以下之ニ准ス、

半隊長

分隊長

歩兵小頭長

小頭

厩役

厩牧調習ノ事ヲ掌ル、

助

馬医

一兵器方

奉行

武庫ノ兵器ヲ主管シ、銃砲・彈藥・糧食ノ庶務、

各其本職ト商議区処スルヲ掌ル、

調役

掌同奉行、銃礮・彈藥・糧食ノ事ヲ分課ス、

筆者

○監察局

総裁一人

憲法ヲ執持シ、内外非違ヲ監察糾弾スルヲ掌ル、

監察

掌同総裁、兼テ礼儀・門衛ノ事ヲ掌ル、

巡察

巡邏・檢察ノ事ヲ掌ル、

〔卷〕「検事 掌同巡察」

筆者

糺明局

総裁一人

鞠獄刑名ヲ定メ、捕亡・贓贖ノ事ヲ総判スルヲ

掌ル、

奉行

掌同総裁、兼テ刑名ヲ審断シ、諸争訟ヲ判スル

ヲ掌ル、

副役

聴訟ノ事ヲ掌ル、余ハ他官ノ副役ニ准ス、

見習

筆者

地方官

○外城

地頭

所部ノ士民ヲ撫育シ、文武ヲ振ヒ、教化ヲ敦ク

シ、守保傳ノ任ニ居リ、輔導ノ職ヲ竭シ、主徳

ヲ贊成シ、内事ヲ総判スルヲ掌ル、内一人世子

ノ傳役ヲ兼ヌ、守禦ヲ嚴ニシ、操練・簡閲ノ事

ヲ統ヘ、租税・賦役・開墾・生産等ノ庶事・民

事・生産兩奉行ト協議処分シ、及ヒ部内社寺ノ

諸務ヲ兼管シ、訴訟ヲ聴受ス、其大ナル者ハ並

ニ申稟スヘシ、

副役

民事奉行副役及ヒ見習ヲ以テ之ニ任ス、

○諸島

在番

職掌、地頭及ヒ民事奉行ニ準比シ、生産ヲ富殖

スルヲ掌ル、而シテ島嶼ノ大小ヲ以テ等級ヲ立

ツ、

一等在番

大島ニ在勤ス、

二等在番

喜界・徳・永良部・屋久四島ニ在勤ス、

三等在番

七島ニ在勤ス、

巡察〔朱〕「検事(軼史)」

筆者

○内務局膳所・道具方・庭方・
医員・奏役ヲ管ス

知家事六人兩主ニ
分屬ス

保傳ノ任ニ居リ、輔導ノ職ヲ竭シ、主徳ヲ贊成

シ、内事ヲ総判スルヲ掌ル、

内一人世子ノ傳役ヲ兼ヌ、

侍直長

左右ニ昵近シ、起居行止ノ事ヲ掌ル、

内一人内庫ヲ主当ス、

侍直

宿直・使令ノ事ヲ掌ル、

筆者

一膳所

頭

助

内監

一道具方

頭

藏弃ノ器翫ヲ主掌シ、兼テ茶道ヲ知ル、

助

一庭方

頭〔朱〕
「園地掃灑ノ事ヲ掌ル」

〔朱〕「助」

一医員

侍医

内幾人内寝ニ侍ス、

助

一裏役

頭

内寝ノ庶務ヲ総判スルヲ掌ル、

助

内監

筆者

行政官記

○上申ノ月日ヲ伏ス、又執政・参政ノ姓名見ル所ナ

シ、

官等席次

一等官 執政

二等官 参政 公議人 神社奉行 會計總裁 軍務総

裁 監察總裁 札明總裁

三等官 公用人 伝事 学館学頭 医院学頭 會計奉

行 一等船将 陸軍大隊長 外城地頭 知家

事

四等官 會計奉行副役 民事奉行 出納奉行 生産奉

行 營繕奉行 製造奉行 二等船将 教頭

教佐 兵器奉行 監察 札明奉行

五等官 書記 公用方理事 伝事副役 一等指南役

一等士官 三等船将 一等大礮士官 礮兵一

隊長 歩兵小隊長 札明奉行副役 諸島一等

在番 裏役頭

六等官 神社奉行副役 学館学頭助 医院学頭助 勘

定役 民事奉行副役 出納奉行副役 生産奉

行副役 營繕奉行副役 製造奉行副役 軍務

調役 二等指南役 二等士官 四等船将 二

等大礮士官 半隊長 兵器調役 地頭副役

諸島二等在番 侍医 裏役頭助

七等官

書記見習 公用方理事見習 神社奉行見習

洋学局調役 民事奉行見習 出納奉行見習

生産奉行見習 營繕奉行見習 製造奉行見習

糧餉役 三等指南役 三等士官 一等士官見

習 三等大礮士官 分隊長 礮兵小頭 巡察

札明奉行見習 膳所頭 道具方頭 庭方頭

八等官

学館都講 医院都講 書師 曆師 算師 訳

師 糧餉役助 四等士官 二等士官見習 一

等諸士官 歩兵小頭長 既役 検事 侍直長

侍直 膳所頭助 内監 道具方頭助 庭方頭

助 侍医助

九等官

徇達 学館授読 書師助 曆師助 算師助

訳師助 検者 監作 海軍小頭 礮兵伍長

三等士官見習 二等諸士官

十等官

勘定役助 知政所筆者 會計局筆者 軍務局

筆者 監察局筆者 札明局筆者 内務局筆者

学館授読助 厩役助 四等士官見習 三等・
四等諸士官(マ) 諸島三等在番

十一等官 神社方筆者 伝事方筆者 学館筆者 民事局

筆者 出納方筆者 生産方筆者 宮繕方筆者

製造方筆者 糧餉方筆者 兵器方筆者 諸島

筆者 裏役筆者 馬医

一、二等官以上ヲ以テ重役トシ、其人員黜陟 朝廷ニ

奏達ス、

一、同官ハ俸禄ノ多少ヲ以テ席次ヲナス、勿論タルベ

シ、

以上

官等席次追補(十月)

侍直長一六等官二等在番ノ次、

軍務調役助一九等官監作ノ下、

一等医師一六等官二等指南役ノ下、

二等医師一八等官糧餉役助ノ下、

三等医師一十等官医院授読助ノ下、

礮台一隊長一五等官礮兵一隊長ノ次、

礮台半隊長一六等官半隊長ノ次、

礮台分隊長一七等官分隊長ノ次、

礮台小頭一九等官小頭ノ次、

築隊小頭一九等官礮台小頭ノ次、

◎徇達一伝事方副役ノ下ニ命令ヲ通伝シ、兼テ殿中

ニ直衛ス、

礮兵小頭一軍務局八隊長ノ下、

礮兵伍長一同局陸軍小頭ノ下、

軍務局調役ノ職掌ニ総裁ヲ佐ケ、官軍ヲ議処シ、輜

重ノ事ヲ総掌ス、

全助一軍務局調役ノ下、

医師一等ヨリ三等ニ至ル一軍務局指南役ノ下(海軍方ノ医師除ク)

礮台一隊長一軍務局礮兵一隊長ノ下、

礮台半隊長一同局半隊長ノ下、

礮台分隊長一同局分隊長ノ下、

礮台小頭一同局小頭ノ下、

築隊小頭一同局礮台小頭ノ下、

五一 薩藩士平田助左衛門ニ舍密局掛ヲ命ス

曩時開成所製薬局ヲ理化学講述場ト改メ、大坂ニ移シテ
舍密局トシ、本藩士平田助左衛門ヲシテ、ソノ取建ノ御

用掛タラシム、其ノ達書左ノ如シ、

島津少将

大坂ニ於テ舍密局御取立ニ付、其方家来平田助左衛門儀、御用有之御雇被

仰付候間、出仕可申付事、

十月

行政官

官中日記二十八日

五二 東征大総督宮熾仁親王其ノ任ヲ解カレ錦

旗・節刀ヲ奉還ス

二十九日、東征大総督宮熾仁親王其ノ任ヲ解カレ、錦旗・節刀ヲ奉還セラレ、手詔シテ其ノ成功ヲ賞セラレ、総督府參謀西郷隆盛・白河口參謀伊地知正治・參謀吉井徳春等、亦賞慰ニ与カル、ソノ達書左ノ如シ、
五二一

二十九日達書

有栖川帥宮

春來、軍務御委任之處、画策籌謀其宜ヲ得、東北速ニ及平定候段、
勲感不淺候旨、

御沙汰候事、

十月

行政官

東京官中日記二十九日
有栖川宮履歷書

五二二

詔書

春來、軍務委任之處、能ク衆議ヲ容レ、画策籌謀其宜ヲ得、東北速ニ平定之功ヲ奏候段、令感賞候事、

十一月二日

有栖川宮家記
有栖川宮履歷書

五二三

各通

吉井幸輔

西郷吉之助

伊地知正治

板垣退助

春來、久々之軍旅、兵部卿宮ヲ輔翼シ、画策籌略其機宜ニ中リ、速ニ東北平定之功ヲ奏候段、
勲感不淺候、今般凱旋ニ付、不取敢為御太刀料、金三百両下賜候事、

十月

行政官

東京官中日記三十日
吉井友美以下履歷書

五三 霧島神社修補ニ付修補料金ノ寄進ヲ達ス

藩庁ニテハ、霧島神社修補ニ付、有志ノ者ハ多少ニ拘ラズ修補料金ヲ寄進スベキヲ達ス、

一霧島神社痛損、御修甫被仰付筈候処、今般朝敵御征討之初より神武之御国威被為振、終ニ賊徒降伏、今日ニ至り全無御遺策御成功被為遂候、付ては尚又御酬愿之一筋を以、此涯御修甫被成進候付、御領内中志之者は、不拘多少御修甫料金錢寄進被仰付候条、寄進料其向ニおるて取揃、會計方江相納候様被仰付候、此旨向々江致通達、地頭・領主江も可申渡候、

(米)明治元
十月

右衛門

〔稿本表紙〕

明治元年
十一月 忠義公史料 一二

〔稿本にて補正〕

五四 薩州藩・長州藩兵ノ軍勞ヲ慰シ、酒肴ヲ賜フ

明治元年十一月大

三日、本藩及ヒ長州藩兵ノ軍勞ヲ慰シ、酒肴ヲ賜フ、ソノ達書左ノ如シ、

薩州兵隊

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、到ル処功ヲ奏シ、凱至之段、其勲勞不少候、此節東京 御駐輦中之儀ニ付、

不取敢為慰勞酒肴被下候事、

但春來兵事ニ付、大宮御所ニモ御内々御憂襟被為在、征討兵士之艱苦ヲ恤布被為思食、日夜平定而已御祈念之折柄、今般凱旋之趣御内聽被為在、御喜悅不斜候、猶又御留守中ニ付、帰陣之者厚ク慰勞候様、御内諭被為在候事、

十一月

行政官

五五 薩藩兵重創者ノ病情ヲ慰シ、物ヲ賜フ

又本藩兵重創者ノ病情ヲ慰セラレ、物ヲ賜フ、ソノ人名及ヒ達書左ノ如シ、

薩州藩

實吉 楨造

實吉 友助

松崎源左衛門

田中宗太郎

逆瀬川正之進

佐藤賢二郎

友野雄介

森川勇之進

論文左ノ如シ、

薩州兵隊

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、遂被重創、今般凱至之段、別て難勞之事ニ候、此節東京 御駐輦中之儀ニ付、不取敢為被慰病情、此品被下候、猶精々療養可相加事、

飯牟禮喜之助

肥後 平八

奈良原長左衛門

東江^{郷カ}巳之助

汾陽尚次郎

津田八之進

川上 孫七

龜澤源右衛門

桂 宗右衛門

柴 山矢八

深柄彦五郎

伊地知彌兵衛

五六 凱旋薩州兵ノ勲勞ヲ賞慰シ酒肴ヲ賜フ

四日、凱旋本藩兵ノ勲勞ヲ賞慰シ、酒肴ヲ賜フ、其ノ達書左ノ如シ、

軍隊慰勞御沙汰書

薩州

兵隊

久々遠路跋涉、攻撃 奏功、既ニ東京ニ於テ被為慰軍勞候得共、今般凱至ニ付、不取敢賜酒肴候事、

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、遂被創傷云々、

但春來兵事ニ付、 大宮御所云々、

薩州兵隊

飯牟禮猪之助

野村文左衛門

鎌田 織平

伊地知新四郎

五七 創傷者ヲ慰撫シテ物ヲ賜フ

コノ日、又創傷者ヲ慰撫シテ物ヲ賜フ、其ノ人名及ヒ慰

川上龍助
稻一留力八次
町田幸次郎
面高眞七郎
伊地知四郎
和田市五郎
桶口八太郎
伊藤善之助
柏原甚左衛門
永田新兵衛
長崎金兵衛
鬼丸半介
大廻追分直心
久留仙右衛門
若山次兵衛
宇野源太
市木英之丞
小田原六郎左衛門
園田良助
面高武輔

有高誠之丞馬力
僕與介
高崎荅助
松崎祐齋
山口傳左衛門
和田軍吉
宮原銀助
中原左郎兵衛
實吉友助
實吉禎造
馬渡十蔵
石神宅右衛門
松崎源左衛門六力
完野八太郎
田中宗五郎
中尾休右衛門
逆瀬川正之進
大山藤之丞
佐藤賢二郎
友野雄介

森川勇之進

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、遂被創傷云々、

十一月

芳、酒肴被下候事、

六〇 戦死者招魂祭举行ニ付、諸藩へ沙汰書

八日、今春来征討ノ為メ、忠奮戦死セシ者ノ招魂祭举行ニ付、死亡者ノ姓名月日等詳細調査ノ上、神祇官へ差出スヘキヲ達セラル、其達文左ノ如シ、

八日諸藩へ御沙汰書

春来征討ニ付、忠奮戦死之輩、招魂祭莫式被為在候間、藩々ニ於テ死亡士ノ姓名・月日等詳ニ取調、来ル二十五日迄ニ神祇官へ差出候様被 仰付候事、

薩州兵隊

五日、凱旋本藩兵ノ勲勞ヲ賞慰シ、酒肴ヲ賜フ、其ノ達書左ノ如シ、

久々遠路跋涉、攻撃奏功、既ニ東京ニ於テ、被為慰軍勞候得共、今般凱至ニ付、不取敢賜酒肴候事、

但春来兵事ニ付、大宮御所云々、

五九 同上

六一 島津忠義上京参内シ藩兵賞慰ノ恩ヲ謝ス

九日、忠義公鹿兒島ヲ発シテ上京ノ途ニ就キ、十七日着京シテ直チニ参内シ、藩兵賞慰ノ恩ヲ謝セラル、

九日、忠義鹿兒島ヲ発シ京師ニ向フ、

十一月十七日上洛、直ニ参内シ 天機ヲ伺ヒ、戦兵賞

典ノ恩ヲ謝ス、

薩州兵隊

七日、凱旋本藩兵ノ勲勞ヲ賞慰シ、酒肴ヲ賜フ、其ノ達書左ノ如シ、

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、到处功ヲ奏、其勞不少候、此節東京 御駐轡中ノ儀ニ付、不取敢為被慰軍

参考

〔朱〕「十七日カ」

一昨日ヨリ島津主殿殿伏見迄御迎ニ被差越候事、

一今朝六ツ半時伏見御立、伏見稻荷社家御小休、御着掛御参内、十一字比二本松邸へ御着、御家老初一統ノ御目見ハ為有之筋ニテ、御側役へ取会御祝儀申上候、御供ノ御家老ハ桂右衛門、御側役島津求馬・田尻務・米良助右衛門・奈良原幸五郎、其外諸役場一々不記候事、

一今日諸道へ繰出相成居候兵隊、御前へ被召出、御酒頂戴被仰付ノ筋ヲ以、島津左衛門殿・島津隼人殿・拙者初本營人数、隊長・監軍・兵隊人数・小荷駄方等無残御式台へ被召出、御口達之趣野島助七相広メ、銘々へ御酒代、左衛門殿・隼人殿・拙者へハ千五百疋、其余ハ多少アリ、兵隊人数へハ隊長へ取束、金子五拾兩ツ、被下候事、

六二 薩州兵凱旋者ノ勲勞ヲ賞慰シ、創傷者ヲ

慰撫セララル

十二日、本藩兵凱旋者ノ勲勞ヲ賞慰シ、又創傷者ヲ慰撫セララル、其ノ文左ノ如シ、

十一 御沙汰書

薩州兵隊

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、到ル処功ヲ奏シ、凱至之段其勲勞不少候、此節東京 御駐轡中之儀ニ付、不取敢為慰勞酒肴被下候事、

但春來兵事ニ付、大宮御所ニモ御内々御憂襟被為在、征討兵士之艱苦ヲ恤布被為 思食、日夜平定而已御祈念之折柄、今般凱旋之趣 御内聴被為在、御喜悅不斜候、猶又 御留守中ニ付、帰陣之者厚ク慰勞候様、御内諭被為在候事、

十一月

薩州

- 池田喜兵衛
- 坂元勇次郎
- 立石徳次郎
- 有村新右衛門
- 有馬愛十郎
- 谷山吉蔵

征討出張・遠路跋涉、日夜攻撃、遂被重創、今般凱至之段別テ難勞之事ニ候、此節東京 御駐轡中之儀ニ付、

不取敢為被慰病情此品被下候、猶精々療養可相加事、

六三 藩庁賄賂類似ノ行ヒヲ禁ス

十三日、藩庁ニテハ、諸願事等ニ贈物ヲ受用スル等、賄賂類似ノ行ヒナク、諸事廉恥ヲ旨トスヘキヲ達ス、其ノ文左ノ如シ、

一 賄賂ケ間敷儀有之間敷と之趣は、追々被仰渡、当春も分て被 仰出置候趣も被為在、弥廉恥之風被行候様無之候ては、不叶事候処、諸願事等付不相応之贈物等、受用いたし候様有之候ては、当世態決て不相濟事ニテ、御留守中ニは、就中

中將様万端御厚配被為 在、誠以奉恐入事候条、諸事廉直を心掛、右体不作法之儀屹と無之様、諸御役場筆者・小役人等ニ至り能々相守、奉安 尊慮候様可致精勵候、尤兼て見聞をも被掛置候付、不勤弁之族も候ハ、上下共可及迷惑候、此旨向々江不洩様可致通達候、

辰十一月十三日

備後

外ニ三人略ス、

六四 家老以下ノ役料高ヲ減シ、之ヲ軍費ニ充

用スヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、軍費多端ノ為メ、家老中ノ内願ニヨリ、家老以下役料高ノ減少ヲ為シ、之ヲ軍費ニ充用スヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一 御城代

一 御役料高八百石

一 御家老

一 御役料高五百石

一 若年寄

一 御役料高貳百石

一 神社奉行

一 持高四百石以下五拾石以上、御役料高九拾石

一 持高五拾石以下、百四拾石

一 下御役より位階迄被仰付候人は、持高三百石以下御

役料高九拾石

^{〔朱〕}

一 若年寄・大目附等ニテ、神社奉行動不及日勤面々は、依持高多少、御役料高都て神社奉行之通

一 御番頭

一 当番頭

一 持高三百石以下五拾石以上、御役料高九拾石

一 持高五拾石以下、百四拾石

一 下御役より位階迄被仰付候人は、持高三百石以下御

役料高九拾石、

一 大番頭・御番頭・当番頭・御用人にて不及日勤面々は、

都て御役料高九拾石、

一 地頭職にて御役被仰付置候人、是迄は御役料被下置候

得共、此節より都て地頭職分高百石、

右は御城代初其以下御役料高之儀、是迄御規定有之、

依持高之多少、夫々相応被成下来候得共、今般賊敵

御征討ニ付ては、大兵出軍被仰付、其他御軍費莫大

之折柄、逆も是迄之御規定にては御軍備付、第一基

本之御用途虚耗いたし候付、此節御家老中評議内願

之趣有之、別て御斟酌被 思召上候得共、無御掘御

城代初御役料之儀、右之通御減少被仰付、右減石之

余高は、都て御軍備ニ被振向置候条、当分御役料高

被下置候面々は、過上文銘々差上候様被仰付候、此

旨向々江不洩様可致通達候、

但本文外御役場御役料高等之儀、是迄通相替儀無

之候付、別段不及沙汰候、

十一月

備後

六五 島津忠義凱旋滞京中ノ諸兵隊ニ、慰勞ノ

酒肴料ヲ下賜ス

十八日、忠義公凱旋滞京中ノ諸兵隊ニ、慰勞ノ酒肴料ヲ

下賜セラル、

島津伊勢日記

一 今日諸道江繰出相成居候兵隊、御前ニ被召出、御酒

頂戴被仰付ノ筋ヲ以テ、島津左衛門殿・島津隼人殿・

拙者初、本宮人数・隊長・監軍・兵隊人数・小荷駄方

等、無残御式台江被召出、御口達之覚福島助七相広メ、

銘々江御酒代、左衛門殿・隼人殿・拙者ニハ千五百疋、

其余ハ多少アリ、兵隊人数江ハ隊長江取束、金子五十

両ツ、被下候事、

六六 島津忠義ニ留守中屢々參上シテ、心附ノ

件忌憚ナク言上スヘキヲ達ス

十九日、忠義公ニ御留守中屢々參上シテ、心附ノ件忌憚
ナク言上スベキヲ達セラル、ソノ文左ノ如シ、

嶋津少将

今度再上京付テハ、兼テ御依頼被為遊、殊ニ御留守中
之儀ニ付、猶屢參上心附之筋無忌憚可有言上旨、更ニ
御沙汰候事、

六七 曩時朝廷ノ徵士参与ヲ命セラレタル五士
ヨリ、藩ノ俸禄返上ノ願出指令ヲナス

コノ日、曩時(六月廿七日)朝廷ノ徵士参与ヲ命セラレ
タル五士ヨリ藩ノ俸禄返上ノ願出指令ヲナセリ、其ノ文
左ノ如シ、

一高三百五拾石

小松 玄蕃頭(清應)

一高二百五拾石

岩下 佐次右衛門(分平)

一高百五拾石

町田 民部(久成)

一高七拾石

一高五拾五石

大久保 一蔵(利通)

吉井 幸輔(友実)

右ハ、兼テ夫々其職掌勤勞之次第厚被 思召候処、今般
朝廷御一新付徵士被 仰付、御国家之御美目被 思召
上候、就テハ役禄返上之趣無余儀被 聞召通候、依テ
徵士期限復職迄之間、右之通被下置候条、

朝勤之暇時 御前へ罷出候儀ハ勿論、万端是迄之通被
仰付置候旨被

仰出候、昨十八日銘々名代へ申渡、向々へ申渡候、此
段申越候条、其許申渡等之儀何分モ可取計候、以上、

辰十一月十九日

桂 右衛門

島津備後殿

島津圖書殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

島津良馬殿

六八 京都本營ヨリ因許陸軍所へ凱陣諸隊ノ事

蹟ヲ詳細ニ調査スヘキヲ照会ス

コノ日、京都本宮ヨリ国許陸軍所へ、今回凱陣ノ諸隊ニツキ、詳細ニソノ戦鬪ノ次第、負傷・戦死者等ノ事蹟ヲ調査スヘキヲ照会セリ、其ノ文左ノ如シ、

此節東北征伐ニ付、戦鬪之次第、手負・戦死等之儀も、時々朝廷江御届相成居候得共、猶又精微ニ取調申出候様御達有之、直様其儀不相調候付、御猶予御願出相成居、就ては、爰許ニ於て、凱陣之面々江取調御達候得共、何分暫時之滞在ニて急敷、夫等之次第精微ニ届兼候付、於其許各隊は勿論、其外差引等之面々、着次第ニハ、所々戦鬪之手続、手負・戦死等之次第、精微ニ申出候様被相達、御取調被成度、未引揚無之兵隊も有之候得共、各隊長・監軍等相揃居候内ニ、取調無之、日延相成候ては、追々旅行旁ニて、行違取調届兼候儀も可有之ニ付、時々右之通御取調有之度、尤夫々御しらへも有之筈候へ共、為念此段御掛申進候、以上、

十一月十九日

京都本宮

御国許陸軍所

御役々

六九 藩庁諸座引付合ノ儀取扱嚴重ニ相濟マセ速ニ勘定局ニ報告スヘキヲ達ス

廿三日、藩庁ニテハ、諸座引付合ノ儀、取扱等閑ノ向ニ風聞有之ニヨリ、尔後各奉行頭人注意シテ嚴重ニ相濟マセ、速ニ勘定局ニ報告スベキヲ達ス、其ノ文左ノ如シ、一御高奉行所・物奉行所は勿論、諸座引付合之儀、取締第一之事ニて、不行届候ては不相濟事候処、此比ニ至り取扱等閑ニ有之、間ニは其蔵々手伝共江為取扱候向も有之哉ニ相聞得、別て如何之事候条、向後向々奉行頭人一漣氣を付取扱嚴重行届、速ニ為相濟勘定局江成行可相答候、万一乍此上等閑之聞得も候ハ、可及沙汰候、此旨向々江可申渡候、

辰十一月廿三日

龍衛

七〇 凱旋薩藩兵ノ勲勞ヲ慰シ創傷者ヲ慰撫ス
廿四日、凱旋本藩兵ノ勲勞ヲ慰シ、并ニ創傷者ヲ慰撫セラル、其ノ文左ノ如シ、

高津少将兵隊

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、到ル処功ヲ奏シ、凱至之段其勲勞不少候、此節東京 御駐轡中之儀ニ付、不取敢為慰勞酒肴被下候事、

但春來兵事ニ付、大宮御所ニモ御内々

御憂襟被為在、征討兵士之艱苦ヲ恤布被為 思食、

日夜平定而已 御祈念之折柄、今般凱旋之趣 御

内聴被為在、 御喜悅不斜候、猶又 御留守中ニ

付、帰陣之者厚ク慰勞候様、 御内諭被為在候事、

十一月

島津少将兵隊

丸田 仲二

福 永 十次

岡 山 平 吉

柚 木 莊 次 郎

福 永 十 郎

原 田 源 之 丞

土 橋 榮 吉

夫 卒 一 人

征討出張、遠路跋涉、日夜攻撃、遂ニ被創傷、今般凱至之段、別テ艱勞之事ニ候、此節東京 御駐轡中之儀

ニ付、不取敢為被慰病情、此品被下候、猶精々療養可相加候事、

七一 藩庁半朱錢ノ通融ヲ禁シ、新錢ト引替フ

ヘキヲ達ス

廿六日、藩庁ニテハ、領内通宝ノ半朱錢、來ル正月ヨリ通融ヲ禁スヘキニヨリ、鑄物方ニテ新錢ト引替フヘキヲ達セリ、其ノ文左ノ如シ、

一 御領内通宝之半朱、追々新錢を以繰替申渡置候付、來正月より諸向通融被差留、新錢を以御当地鑄物方ニおゐて引替申付候條、向々江申渡、地頭・領主江も不洩様可申渡候、

但年内ニても引替度者は、鑄物方江差出候ハ、即

引替候様申付候、

(朱) 明治元年十一月廿六日

龍衛

七二 島津久光学問ノ標準ヲ示シテ師員ニ諭シ

藩内ニ布達ス

廿八日、久光公學問ノ標準ヲ示シ、高上迂遠ノ空理ヲ議論セス、日用深切ノ実跡ヲ講習スヘキヲ師員ニ諭サレ、之ヲ藩内ニ布達ス、其ノ文左ノ如シ、

白鹿洞書院揭示

父子有親 君臣有義

夫婦有別 長幼有序

朋友有信

右五教之目、堯・舜使契為司徒敬敷五教、即此是也、學者學此而已、而其所以學之之序亦有五焉、其別如左、

博學之 審問之 謹思之

明弁之 篤行之

右為學之序、學問思弁四者取以窮理也、若夫篤行之事、則自修身以至於外事、接物亦各有要、

其別如左、

言忠信行篤敬

懲忿窒欲遷善改過

右修身之要

正其義不謀其利

明其道不計其功

右外事之要

己所不欲勿施於人

行者不得反求諸己

右接物之要

一學問之道は、先年来追々被

仰出、今更別ニ可申渡義も無之候得共、猶又別紙相渡候条、是を以標準とし、高上迂遠ノ空理を議論せず、日用深切ノ実跡を講習いたし候様、師員中篤く申談、

學業勉勵有之度存候事、

(元一明治元)
辰十一月

學問之儀ニ付、御別紙之通

中将様御書取を以被 仰出候条、一同奉承知候様、向々江可致通達候、

明治元辰

十一月廿八日

圖書

龍衛

内膳

良馬

七三 藩庁諸道通行ノ節新規定ノ印鑑ニテ通行

ノ旨ヲ達ス

卅日、藩庁ニテハ、京都駅通司ヨリノ達ニ基キ、出旅ノ者ハ新規定ノ印鑑ヲ持セシメ、予メ国境関所ニ渡シタルモノト同所ニテ契合改札セシムベキヲ達ス、其文左ノ如シ、

一 諸藩共諸道通行之節は、以来新規被仰出候ニ寸二分之印鑑ニテ可致通行旨、於京都駅通司より被仰渡候付、境内関所ニテは番人江為見届候上、致通行候様申付候、左候て京大坂着之上は、屹と可差出候、

一 印鑑九枚

右前条同断ニ付、諸所関所江銘々相渡置候条、通行之節は引合相改、於無相違は可差通候、左候て右印鑑相渡候者江は別段切手不相渡候、

(采一明治元)
辰十一月晦日

圖書

七四 参与岩下方平当分刑法官出仕ヲ命セラル

コノ日、参与岩下方平佐次右衛門当分刑法官出仕ヲ命セラル、

其ノ辞令左ノ如シ、

岩下佐次右衛門

当官ヲ以、当分刑法官出仕被 仰付候事、

七五 城下ニ出軍負傷兵ノタメ速ニ病院建設ニ

着手スヘキヲ達ス

曩時、城下ニ病院建設ノ議アリシカ、今般奥羽辺へ出軍ノ負傷兵漸次帰藩スベキニヨリ、速ニ着手シテ朝廷仁恤ノ御趣旨ヲ貫徹スヘキヲ達ス、其ノ文左ノ如シ、

一 此節 御城下江病院被召建候儀は、先達て被 仰出置候付、早々場所柄等吟味之上奉伺答候得共、今以無其儀、別て及遅引候、然処今般奥羽辺出兵之面々帰陣相成、追々致到着候処、手負之輩不少、其砌早速於朝廷御手厚御療養被成下候段被遊 御承知、御仁恤之程別て難有被

思召候上、遙々御国許江致帰着、向寒之砌万一も療養方不行届之儀有之候ては、邂逅從

朝廷難有被 仰出候

御仁徳之詮も無之、於

御両殿様も、別て 御遺憾被

思召上候間、病院場所之儀は、是迄之孔廟跡脇・開成所御見合之所江早々取建、第一追々帰陣出兵手負之者共療養方被仰付候間、関係被仰付置候御役々、早々出役万端無手拔様可取計候、外御用筋繁務多端ニ取紛、時日及遷延候ては、

御仁恤之 御趣意不致通徹、不可然事候条、御家老初末々深汲受、取扱候様被仰出候、此旨向々江早々可致通達候、

(采)「明治元辰」
十一月

圖書

七六 島津久治ヨリ小松清廉ニ帰京ヲ命ス

此ノ月、藩家老島津圖書ヨリ小松清廉ニ帰京ヲ命ス、其ノ文左ノ如シ、

小松帯刀

右御用有之、帰京被仰付候、

七七 薩藩士喜入嘉次郎等外国人殺害者ヲ寛典

ニ処スヘク建言ス

此ノ月、本藩士喜入嘉次郎・平田直之進、肥前・久留米等ノ諸藩士ト共ニ、(采)「筑前藩士」外国人殺害者ハ憂國ノ誠忠ヨリ出テタル者多ケレハ、可成寛典ノ所置アランコトヲ建言セリ、其ノ文左ノ如シ、

謹白、明府公閣下、皇国者義勇ヲ以、万国ニ御独立相成候御国体ニ候処、癸丑以来旧幕之賊吏、彼之虚喝ニ恐怖シ、終ニ今日之世態ニ押移リ、実ニ以痛息流涕之至、天下共ニ知ル処ニテ、素ヨリ論ヲ不待事ニ御座候、元来皇国之民夷狄ヲ惡ミ候者、皇国固有之大和魂、制シテモ不可制事ニテ、彼跋扈輕蔑之所業等有之候ハ、断然殺戮ヲ加ヘ候ハ当然之事、左有テ社彼モ輕侮スル事能ハス、是迄確乎御独立相成候事ニテ、朝鮮・安南之小国スラ今ニ独立スル、則同様ニ御座候、然ル所昨七月、於当地英夷殺害一件ハ、旧幕時代之事ニテ、既ニ応接モ相済候哉ニ承リ候処、当節猶又彼ヨリ申出、天朝御憂慮被為在候趣奉察、其節同行之筑前藩七人及自訴候由、窮鳥懷ニ入ル之類ニテ、可憐之次第、此末如何之御処置可相成哉、其刃之義ハ不奉伺候得共、世上巷説ニテ、万一嚴刻之御処置共ニ相成候ハ、只筑藩之事而已ニ無之、皇国之大義ニ関係シ、人心不服、

大變ヲ激生スルニ至リ可申、実ニ大切之御場合ト奉存候、併右七人之者トモ是非罪典ニ不被処テハ、御信義不相立訳ニ候ハ、以来英夷絶交相成候欵、居留地外遊歩相禁候欵、卓然彼ヲ制馭スル之御威光相立候様有御座度奉存候、左候得ハ罪ヲ得者モ甘心就刑、有志之者モ亦憤悶ヲ慰メ可申候得共、此举旧幕失政中之儀、且幸ニ本人ハ死亡致シ居候得ハ、余ハ御宥恕相成可然奉存候、殊ニ当春以来朝敵之如キハ、天地不可容之大逆賊ニ候得共、追テ寛典之御所置モ候処、蛮奴ニ対シ候事ハ根ヲ掘御穿鑿ト申候テハ、彼是顛倒ト申者ニテ、御国内人心怨憤離叛、朝廷ヲ指シテ旧幕ヨリ甚敷ト可申、実ニ恐多ニ御座候、御一新以来御国人ヲ赤子ト被仰候得ハ、父ハ子之為ニ匿シ、子ハ父之為ニ匿スト申場ニ至リ度奉存候、元来夷狄ハ禽獸ニテ、礼義ヲ不諭、驕傲無礼、只利ヲ是謀ルヲ以天性ト致シ候得ハ、我ヨリ信義ヲ被尽候迎モ、実ハ其詮無御座、却テ我ヲ恐レテ既往ノ事ヲ举ケ、同行之モノ迄罪ニ行ヒ候旨申、益皇威ヲ辱シメ、彼之猖獗ヲ増シ可申候、宋之金ニ於ル、徳川氏之衆夷ニ於ル、則殷鑒之昭々ナルモノニテ、上ハ朝廷御宸怒、下ハ人心離叛、終ニ貳百余年之政權

ヲ失ヒ候事ニ御座候、且先於当地仏夷我国人ヲ殺害致シ候得共、強テ詰問モ致サス、然モ又之ヲ罪シテ、我ニ謝スルノ道ヲ尽シ不申候、我之柔弱、彼之無信無礼大抵如斯ニ御座候、此節之義ハ筑前一藩之恥辱ニ無之、皇国之大恥辱ニ御座候、苟モ神州之民タルモノ、沈黙傍觀被在候テハ不相濟、每度於朝廷御布告被為在候儀モ御座候間、乍憚忌諱奉申上候、

辰十一月

肥前

嘉悦市之進

久留米

板垣鐵太郎

中村庫次郎

薩州

喜入嘉次郎

平田直之進

對州

相良丹藏

平戸

坂尾孫助

島原

鶉殿七郎右衛門

坪田嘉十郎

唐津

掛下金松

小川司馬太郎

大村

中尾静馬

田川節造

一瀬平右衛門

五島

林與一右衛門

明治元年(1868)

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年十二月

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

七八 大楠神社御鎮座祭式次第

明治元年十二月一日

七八

此度梅ヶ崎天神社内へ大楠神社御造宮、楠中将ヲ正殿、

左ニ大塔宮ヲ奉始、新田中将以下南朝ノ功臣、右ニ菊

池一家ノ靈ヲ相殿ニ御祭り有之、御鎮座祭式ノ次第、

明治元年十二月朔日大楠神社御鎮座祭式

当日早旦洒掃

神殿有清祓之儀

辰刻奉安

神影於神殿

其儀自楯山至神殿丁四人昇之、知府家司并宮作司

副之、

先是有知府着見繕之儀

先各參向

次立揖着座

次拍手再拜

次大奴佐式

次 神水式

次 散米式

次 切麻式

次警蹕并神於呂之

次吹笛弹琴

次玉串式

次大玉串式

次献供并吹笛

次 祝詞 知府自読之

此間知府侯便宜之所

次 詠歌

次 御神樂并奏樂

次 知府拜礼

次 判事以下拜礼

次 振遠隊發砲

其儀刻限各致

神殿庭上列立階前高聞傍布障間

知府之命令、運動凡三區分合了發砲還立千本所

次 軍曹以下隊中一同拜礼了、各退散

知府侯神前

次 知府以退去

次 雜人拜礼

次 撤供物

次 鎖内陣御扉

次 拍手再拜

次 立揖退下

次 直会式

以上

七八ノ二
祝詞

明加治免賜布事始乃免年十二月乃朔日旭陽乃豊栄昇浪乃

共依來留瓊浦任香細梅之崎乃地高德朝臣乃所縁有留兒
島乃里乃宮地内乎嚴乃盤境止齋比定免三吉野乃芳野乃
大宮尔御城登為利御千登為利仕奉利親王等大臣等物部
等乃神靈毛乎取総券招奉利令坐奉利此処乃知府從四位下
行右衛門權佐清原朝臣宣嘉畏美惶毛申久此神靈等波天
在哉

神皇祖命乃惟神留那本都道乃健久雄々乎志伎御心登志天地

止變利无久月日止落留事无久人倫乃綱常乎踏毘鎌倉乃

鷲志室町乃群流賊党乎數回討罰米賜附礼最末波湊川乃

水沫力多々良浜乃漂比黒丸乃闇乃夜乃境乃浦乃白浪乃

跡无久為礼々芳野山春乃花止句比秋乃紅葉赤心尔芳野

川清伎名乎遠日久流志賜比和魂波天翻朝廷辺民草乎

守利幸陪荒魂波国翔天醜虜逆臣乎罰米賜比天乃下所知

食布大御名乎令立外国波御奴国乃実乎令顯茂御代乃手

長乃御代登成幸陪賜止進都海川野山乃味物良乎種々取備

陪仕奉事乎安久穩尔所聞食止白須辞別比白佐東夷征罰

乃皇軍尔役之府兵軍卒等加功成志事畢之中尔千石乃五

百名止負持比大神等乃御尾前尔仕奉尔神靈乎惠美賜憐

美賜止陪大宮乃側尔靈招奉事乎所聞食止白須

七九 凱旋兵へ久光名代御目見目錄拝領仰付

達書

此節兵隊帰陣付テハ、各隊即

中将様御目見被仰付筈候得共、未

御病床ニ被為入、押テ難被遊

御出座候付、御名代

悦之助様、明後六日四時御対面所江御出、四番・五番

兵隊御目見御目錄拝領被仰付、分隊長以上之面々ハ

御盃、其外之數江ハ

御流頂戴被仰付、附役以下夫卒ハ同所庭上江一同罷出、

御目見被仰付候、左候テ右外隊々

御目見日限之儀ハ、追テ可申渡候、

但手負等ニテ当日難罷出面々ハ、名代へ御目錄拝領

被仰付候、左候テ附役以下之儀ハ、於陸軍所御酒

頂戴并御目錄拝領被仰付候、

一御酒頂戴付テハ、

二丸御納戸請持、

一附役以下

御目見付テハ、陸軍所調役引受、御目付申談可致差

引候、

右之通被仰付候条、大隊長江申渡、御手当向不洩様可

取計旨、向々へ可申渡候、

〔采〕 十二月四日

〔町田久憲〕
内膳

十二月四日

御本文之通、大隊長二丸御小納戸御目附、陸軍所調

役へ申渡、奏者番・御使番・御文書奉行・御右筆御

數寄屋頭へモ申渡候、

取次

新納主税」

八〇 勅使大廟参拝布告書

明治元年十二月八日

御布告

今般東北平定之成績、大廟へ被為告タメ海路還幸可

被遊 思食之処、御艦不相調、陸路還幸被為在候ニ付テ

ハ、御日合モ被為具、来ル二十五日先帝三年御忌辰ニ

余日モ無之条、不取敢以

勅使被為告、来年更ニ御参拝可被遊旨、被 仰出候事、

八一 東北諸藩へ金札割渡御沙汰書

明治元年十二月九日

東北諸藩へ御達書

当夏御発弘相成候金札之儀、東北紛乱中、其地方諸藩へハ、未タ御割渡不相成候処、今般平定ニ付テハ、石高割賦之内、当節ヨリ御渡シ相成候間、早々請取洽ク通用可致様御沙汰候事、

但委細之儀ハ、会計官へ可承合事、

右之通於東京被 仰出候間、相達候事、

八二 皇学所開講ニツキ入学奨励御沙汰書

明治元年十二月十日

御布告

来十四日 皇学所御開講被 仰出候間、官・堂上及非藏人諸官人ニ到迄、入学勉励可致候、尤兼テ御布告之通、三十未滿小番被免之輩ハ、専ラ勤学致候様可心掛候、近来皇国之学相衰へ、外国へ対シ候テモ不都合ニ付、今般更ニ皇国学盛大ニ御振起被遊度 思召ニ候間、各

御一新之 御趣意ヲ奉戴シ、異日国家之大用ニ相立候様、一同奮発勉強可致旨、御沙汰候事、

但追テ大学校御取建ニ可相成候得共、当分之処九條

家卜被 仰出候処、更ニ二條家ヲ被用候事、

一 御開講当日、卯半刻参集可有之事、

一 衣体之儀、堂上狩衣・直垂、地下麻上下之事、

規則

一 入学之儀、毎月四之日ニ被定候、尤入学当日可為正服、

束脩之儀ハ御用掛へ可伺出事、

一 入学願度輩ハ、其前月二十八日迄ニ弁官事へ可届出之

事、

一 元大学寮代へ参入之輩更不及入学式事、

一 毎年正月御開講日

古事記表文講義

二・七日 講釈 古事記

三・八日 同 令義解

四・九日 会読 続日本紀

五・十日 講釈 万葉集

一 講釈 自四時至九時

一 会読 同

一 素読 毎朝自六半時至八時

一 輪講 同 自八時至七時

一 対読 同 於諸局随意為之

一 歌詞會 二之日

一 詩文會 七之日

右二点ハ於局中為之、自七時至晚時、

八三 大津県へ沙汰書

明治元年十二月十日

御沙汰書

江州之内朝彦元領地、今般其県へ支配被仰付候条、当年之租税ヲ始、総テ管轄候様御沙汰候事、

八四 郡奉行達書

一 越後表諸所ニオイテ、軍戦手負之面々療養トシテ、温泉へ差越候節、人馬賃錢并船運賃之儀、上下町江吟味為致候処、旁過当ニヨリ馬疋、疋里ニ付四百文ツ、夫疋人同断ニ付式百文ツ、乗船之儀ハ海上一里ニ付、

八百文ツ、賃錢払ニテ致通行候様、左候テ、陸軍所

ヨリ問合ニテ、当座手形ヲ以差立候筋ニ被仰付度旨、

郡奉行申出 承之、

〔辰十二月十五日

申出之通申付候事〕

八五 大久保一蔵ヨリ桂右衛門へ書翰

十二月
八五ノ一

一 輪拝呈仕候、乍恐

君公ニモ御上京被遊、御機嫌能被為入、奉大慶候、

尊公様ニモ御供ニテ、弥御安祥被成御奉職候由、奉敬

賀候、此内ハ御懇書被成下難有拜見、早速御答可申上

之処、初終紛雜ニテ其儀不相調、大失敬仕候、被仰越

候条々、内田へモ相談シ置申候、東京モ別テ静謐、先

人心モ概略折合、且奥羽・北越諸藩御処置モ以

宸断御治定、夫々御沙汰相成、右ハ日誌一冊岩氏へ相

廻申候間、自ラ入御覽候事ト奉存候、御半途ニハ御座

候得共、

先帝御太祥之御祭モ、来ル廿五日ニ被為當、御追孝之

思食、旁ヲ以急々

還御被

仰出、御道中モ別テ御急キニテ、御通輦被為遊奉恐入候次第ニ御座候、初終弘暎ヨリ之御発輦ニテ、大
方夜ニ入候事ノミ御座候得共、

聖体何之御障モ不被為在、難有御事ニ奉存候、御聞及通箱館之事関心仕候処、昨日東京ヨリ奏

聞相成候趣、開陽・回天共ニ暗礁ニ当テ、中々運用等相調候丈ケニ無之、不日函箱府ハ復シ候トノ次第、英

船彼地ヨリ掃横ニテ、報知有之タル由、先以何ヨリ恐悦此事ニ御座候、格別之事ニハ及モイタス間敷候得共、

則局外中立之事ハ不及言、奥羽人心之向背大關係仕、其害不少候処、実ニ

皇運隆盛之機ニ臨ミ候得ハ、人力之外ニ御威靈相立候モノト感戴仕、此事件ハ

御両殿様ニモ御配慮被為在候半ト奉存候間申上候、君上御帰国御暇之一条、吉井氏ヨリモ被申越、其后如何之御都合欵ト奉案候、何分ニモ御国元之処モ此機會

ヲ以万端御基本相立、今一層御両殿様積年御尽誠之相趣意通徹、下一同シツマリ方向相定候様ニ、被為在

度事ニ不堪万折候、此先之御動靜吳々御大事ト愚考罷在候、自ラ御卓見モ被為在候事故、不日拝接可奉伺候、

先々就幸便右形行申上度、如此御座候、早々頓首、

十二月十四日

大久保一藏

桂 右衛門様

尚々乍憚御同役中へモ宜敷御伝被下候様、奉願候、

八五ノ二

別紙一昨夜仕出候賦ニテ認置候得共、御用封今晚迄延引、其假差上申候ニ付、御推読可被下候、委曲申上度

候得共、早朝ヨリ夜ニ懸色々多忙、其儀相叶不申、何

モ期拝接候、以上、

十二月十六日

一藏

桂様

從知經(池澤尉)

八六 公議所開議期日云々布告書

明治元年十二月十日

御布告

一公議所開議之期日、來巳年二月十五日ト被仰出候事、

一公議人員之議ハ、是迄大藩三人、中藩二人、小藩一

人之御規則ニ候処、以来各藩一人宛可差出事、

一公議人之儀ハ、是迄其藩論ニ可代人才差出候様、被

仰出有之候得共、右ハ執政・参政之中ヨリ一名、致撰

举可差出事、

一是迄主人在職之藩々、公議人差出ニ不及様、被 仰出

置候得共、以来主人在職之有無ニ不拘、各藩総テ可差

出事、

右之通被 仰出候事、

八七 太守公及毛利少将・池田中将九門内乗馬

御免ノ沙汰書

明治元年十二月二十日

御沙汰書

島津少将(忠義)

毛利少将(敬親)

池田中将(慶徳)

兼テ御沙汰之次第モ有之、格別之訳ヲ以九門内乗馬被

免候事、

八八 府藩県ノ殉難者遺族取調沙汰書

明治元年十二月〔十八日〕

御布告

大政御一新ニ付、天下之衆庶其所ヲ得、各其志ヲ遂候

様覆戴至仁之御趣意ニ付、鰥寡孤独窮民等ニ至ル迄、

追々御賑恤之道モ相立候処、戊午以来国事ニ周旋シ、

皇室ニ勤勞候者、却テ姦吏ノ為ニ非命之死ヲ遂ケ、其

妻子等飢寒ニ苦ミ、且幸ニ存命候モ、脱籍流離候族モ

有之哉ニ相聞ヘ、実ニ不憫之事ニ候、依之今般京都府

ニ於テ夫々取調、死亡之忠魂ヲ慰祭シ、妻子救助等執

リ行ヒ候ニ付テハ、府藩県共其管轄中右等之者有之候

ハ、篤ト取調、祭祀救助等行届、洽ク

御仁沢ニ浴シ候様可取計旨、

御沙汰候事、

八八ノ二

同上藩吏通知書

大政御一新付、天下之衆庶其処ヲ得、各其志ヲ遂候様

覆戴至仁之御趣意付、戊午年来国事ニ周旋シ、

皇室ニ勤勞候ハ、却テ姦吏之タメニ非命之死ヲ遂、其

妻子等飢寒ニ苦ミ、且幸ニ存命候モ、脱力落籍流離候族モ
有之哉ニ相聞、不憫之事候間、府藩具共右等之者有之
候ハ、篤卜取調、祭祀等行届、洽ク

御仁沢ニ浴シ候様可取計旨、
御沙汰被為

在候段、別紙之通被仰渡候付、此段申越候条被達貴間、
於

御国許

中将様被達

御聴、夫々取調等相成候儀共、何分モ被取計、可有之
候、以上、

辰十二月廿一日

島津八主殿

桂 右衛門殿

島津忠義家記

八九 長崎在勤五代才助鹿兒島ニ書ヲ贈ル

(頭註悉)又久二年戊辰
明治元年戊辰十二月

順聖院様

御在世之時分、井上正太郎等

御手本極御内用之儀相頼候内、琉球へ書状差遣度趣有

之候処、彌七郎引ハマリ蘭船へ相頼候処、致露頭段々
六ヶ敷相成、彌七郎儀ハ慎被申付、久々引入罷在候処、
此節右之不調法ニヨリ、蘭大通詞役被差免、是迄被下
来候大通詞之役料都テ被召揚、此御方ヨリモ三人扶持
被成下置候得共、役儀被差免候ニ付テハ、是以不被成
下訳ニ御座候、右ニ付必至ト差困、甚難渋罷成申候間、
近比奉恐入候得共、彌七郎代トシテ、彌四郎へ六人扶
持被成下候儀ハ、相叶申間敷ヤ之趣、奉願呉候儀承リ
候、右ニ付テハ、彌七郎役儀被差免候基ヲ、御国之為
引ハマリ御奉公相勤候ヨリ、ケ様之時宜成立候訳ニ御
座候得ハ、聞捨ニモ難仕、勿論彌四郎儀御用向精勤仕
申候間、右旁之御憐情ヲ以、願之趣御取揚被下候御吟
味筋ハ有御座間敷哉、左様御座候ハ、乍恐御義理合
モ相立、且ハ彌四郎ニモ追々御用筋精勤可仕哉奉存、
私ヨリ此段奉願上候、以上、

長崎在勤

戊十二月廿一日

五代才助

岩瀬彌四郎養父岩瀬彌七郎儀、蘭大通詞役相居候ニ付、
御内用御頼御立入被仰付置候処、

九〇 風俗取締方藩達

十二月

此比凡下体之者共、不似合羅紗類之衣服ヲ着シ、或ハ木履ヲハキ、歌ヲウタヒ、猥ニ致通行候者有之候段相聞得、別テ不届事ニ候、以来屹ト相慎、右体之儀無之様、主人等ヨリ嚴敷可申付候、乍此上相背候者ハ、糺方之上可及取扱候、此旨向々へ不洩様可申渡候、

明治元年辰十二月廿二日 龍衛

九一 凱旋兵へ酒肴ヲ賜フ達書

九一ノ一

御名

兵隊

九條左大臣守衛トシテ出張、遠路跋涉攻撃奏功、既ニ東京ニ於テ被為慰軍勞候得共、今般凱至ニ付、不取敢賜酒肴候事、

但春來兵事ニ付、

大宮御所ニモ御内々御憂襟被為在、征討兵士之艱

苦ヲ恤敷被

思食、日夜平定而已

御祈念之折柄、今般凱至之趣

御内聴被為在、

御喜悅不斜候、猶又

御留守中ニ付、帰陣ノ者厚ク慰勞候様、

御内諭被為在候事、

十二月

行政官

九一ノ二

一御書附写一通

一御酒五樽

一御肴

兵隊へ

右ハ秋田口ヨリ凱陣之兵隊、東海道ヨリ京着、去ル

十九日参

闕被 仰付、渡廊間庭上へ繰込伏居候処、徳大寺大

納言様・仁和寺宮様・東園宰相中將様御列席ニテ、

御書附右東園様御読上、終テ監軍和田五左衛門へ御

渡相成候、

右之通御留守居付役寄溝口吉左衛門付添相勤候付、

此段申上候、以上、

十二月廿三日

御留守居

明治元年辰十二月廿三日

内膳

主殿様

追テ本文御礼之儀ハ、去ル十九日

御暇

御参

内之節、被

仰上置候、酒肴ハ兵隊ヘ為取相成候、

島津忠義家記

九二 教寄屋付士同仕坊主動務方藩達

十二月

御教寄屋附士並同仕坊主之儀、御兵具方ヘ合併被仰付候付ては、御教寄屋附士之儀は御兵具方附士、仕坊主之儀同足輕と可相唱候、左候て御教寄屋御雇仕坊主之儀、家来身分之者は、其身一代御兵具方足輕被仰付候、左候て何れも勤方有之者共ハ、当分之通相動候様申渡、可承向江も可申渡候、

但御教寄屋一代附士之者は、御兵具方一代附士被仰付候、

九三 振遠隊戦死者招魂場へ葬送式

九三ノ一

奥羽出張之府兵振遠隊之内、戦死之面々招魂場へ葬送被成下候式

明後廿五日戦死并陣中病死之者、遺品楠公神社境内招魂場へ葬送祭祀被成下候ニ付、親疎貴賤ニ不拘勝手次第可致参詣候、

葬送遺品

片淵屯集所ヨリ新大工町本道筋大村町、左へ築町・濱町・鍛冶屋町、右へ船大工町木籠町 楠公神社境内、招魂場へ、

刻限

朝正六ツ半時出棺
昼正九ツ時 祭式

右之通、市中郷中不洩様可相触候、

辰十二月廿三日

九三ノ二

葬送次第并行列

明治元年(1868)

一途中行軍之事、

一於招魂場調練発銃等ハ、過日 楠公神社勸請遷宮之

時同様之事、

一衣体各戎服之事、

一兵士各可携小銃事、

一居残之兵士等葬送之事可心配事、

一死者之親戚行列外ニ見送候筈ニ付、此段為心得相達

候事、

右之通、兵隊へ不洩様可相達候、

当日曉七ツ時

於屯集所大砲三発

当番之兵士可役之

右合図砲声、自宅ヨリ兵士不移時刻、屯集所へ可相集候事、

朝正六ツ半時遺品出門、昼九ツ時祭式

葬送行列

一前駆行軍

奏楽如常

一凱旋隊兵士

戎服持銃

一三小隊

一居残兵隊

一旗

一靈標

一遺髪

一居残兵隊軍曹頭教師

一兵隊諸吏

一殿備凱旋隊

以上

右之通被相定候条、一統其旨可相心得候事、

辰十二月

九三ノ三

靈標書法

於何国何所役戦死

右側

何々某姓名乗神靈

正面

年号干支何月何日

左側

享年何十何歳

裏

病死之靈標

於何国何所陣中病死

右側

其余書法戦死同様

一 追テ各右標造立被成下候筈ニ付、靈標ハ先仮ニ建置候間、兼テ其旨可相心得候事、

辰十二月

振遠隊戰爭届書、爰ニ出スヘキ処ナレトモ、長ケレバ後編ニ譲リ置ヌ、

九四 凱旋兵葬送参集達書

凱旋之兵隊未休息之日數モ無之、一同別テ大儀ニ候得共、近々戰死并病死之者共、遺髮葬祭被成下候ニ付、当日曉天屯集所ヘ参集、葬送之前後行軍、於招魂場調練發砲可慰靈魂旨、御直達有之候条相達候、尤日限ハ御決定之上、追テ相達候筈ニ付、凱旋兵隊之者共ヘ懇ニ可相達置候事、

一、居残之兵隊ハ、葬送懇篤ニ相宮可慰靈魂候事、右之通り可相達候、

辰十二月

九五 昌平学校開校ニツキ入学奨励達書

辰十二月廿六日仰渡之写

東京昌平学校並開成学校、来巳年正月十七日ヨリ御開營相成候間、有志之輩ハ兩營ヘ願出入学可致候事、

入学規則

一 入学之儀、毎月二七ニ相限候事、

一 入学願出之節、当人生国・住所・年齢・姓名并支配主人等姓名巨細相認メ、学校ヘ可申出事、

右之通被

仰出候事、

十二月二十五日

行政官

島津忠義家記

九六 大久保利通日記

明治元年十二月廿九日

今朝重野子^(安釋)入来、御国元政体一条種々有評議、愚考相談置候、昼後税所^(篤)・吉井同行訪木場子^(清生)、中井^(弘也)・伊地知^(貞徳)毛来ル、十一字帰、

九七 島津忠義上京沙汰書

明治元年(1868)

島津少将

不日 還幸被為在候ニ付テハ、帰国之儀殊ニ難被及
御沙汰処、国政急速所置方ニ付、無拋願之趣被 聞食
届御暇下賜候、然ル処東北漸平定ニ及ヒ候ヘ共、残賊
未タ殲滅ニモ不至、殊更綱紀御維持之前途、深 御依
頼被為遊候儀ニ付、国許政治行届候上ハ、早々上京
皇室ヲ可奉輔翼旨 御沙汰候事、

十二月

九八 出隊居地名書

十二月

出隊居地名書

二番隊

右一番分隊

淺江直之進
市來勘助
岸良真十郎
伊集院彦左衛門
東郷助之丞
蒲生彦四郎

澁谷軍兵衛
梁瀬源四郎
小倉與之丞
染川喜之助
迫田助太郎
鳥居勇右衛門
河野藤七郎
伊藤源吾
竹内仲左衛門
伊瀬知仲左衛門
平岡彦五郎
伊々木彌八郎
村岡源助
大山助七
折田善次
川崎仲之助
押川喜右衛門
河野伊八郎
時任金左衛門

右二番分隊

長崎仁右衛門
西吉左衛門
伊集院權六
伊地知源四郎
川畑金左衛門
伊集院仲左衛門
小山嘉太郎
町田仲二郎
川村角太郎
伊佐岡伊八郎
日高壯之丞
樺山八十八
青山源七郎
竹内新兵衛
前川為八郎
郷田猪之助
榎本源次郎
田中仲之助
市來彦次郎

右三番分隊

尾上為八郎
梅北助左衛門
高橋直次郎
鹽津正吉
深見清次郎
毛利權之丞
山田十郎
三原七左衛門
吉田與十郎
有川平藏
筒井治五郎
大山矢右衛門
土橋市助
川崎仲之丞
加藤郷兵衛
市來喜十郎
美坂彦六
町田正八郎
岩城新太郎

右四番分隊

山本吉蔵
有川彦五郎

小頭見習

仁禮新左衛門

邊見十郎太

高城十左衛門

小隊 左近允新六

山之内半左衛門

半隊 武郷兵衛

加世田彌右衛門

分隊 中江仲之助

鎌田彌九郎

江田喜平次

金助

永山休清

亀助

餅原岩十郎

喜八

古後七之丞

善助

分隊 市來宗次郎

熊助

奈良原彌六左衛門

直八

兵糧方 加治木清之丞

助十郎

マ、

善七

玉葉方 中村勇吉

右田町人足

普請方 久木田直右衛門

右之通御座候、以上、

人馬方 西之原彦助

医師 上村良徴

監軍 飯牟禮齊蔵

九九 孝明天皇三周御忌辰御参拜ニツキ、神事

達書

明治元年十二月〔二十日〕

孝明天皇三周 御忌辰 御参拜ニ付、二十三日晩ヨリ
二十六日朝迄 御神事候間、僧尼并重軽服之者 参
可憚事、

一〇〇 先帝三周御忌辰神祇式被仰出書

明治元年十二月〔二十一日〕

今般御制度復古之折柄、第一 御追孝之 思食ニテ、
来ル廿五日先帝三周御忌辰神祇式ヲ以テ、於
朝中御 祭奠、同日 山陵御参拜被 仰出候事、

一〇一 女御入内立后被仰出書

明治元年十二月〔二十四日〕

来ル廿八日巳刻 女御入 内、即日 立后被 仰出候
事、

但当日重服者参 朝可憚事、

一〇二 女御入内立后ニツキ、五等官以上参朝ス

へキ布告書

〔明治元年十二月二十四日〕
御布告書

来ル廿八日、女御入 内、即日立 后被 仰出候ニ
付、当日巳刻、五等官以上微士参 朝、恐悦可申上事、
但大宮 女御へモ恐悦可申上候、衣体之儀ハ三等官
以上微士衣冠・直垂可為勝手、四等・五等官之微
士直垂用意無之輩ハ、麻上下不苦候事、

一〇三 同上ニツキ宮・堂上へ達書

明治元年十二月〔二十四日〕

宮・堂上へ

来廿八日、女御入 内ニ付、当日 禁中 大宮・中宮
等へ参賀可致事、

一当日重服者・僧尼参 内可憚事、

一当日浅黄袴着用之輩、薄色袴着用之事、

一自今 中宮へ参入之輩、衣冠之事、

但當時不在其限候事、

一献物之儀ハ、可為先例之通事、

明治元年(1868)

一〇四 諸藩へ地図明細取調差出ス可キ達書

明治元年十二月(二十四日)

諸侯へ

今般府県へ別紙之通、地図明細ニ取調差出候様相達候
処、府県限ニテハ、睨ト難取調儀モ有之ニ付、藩々領
地一凶飛領地共、色分ニシテ早々取調可差出候事、

但府県へモ兼テ相達置候間、最寄府県示合、遺漏無
之様可取調候、尤御領并他領入交無之藩々ハ、差
出ニ不及候事、

別紙

一 国図 一枚

但一里三寸ノ見積ヲ以テ、図取可致事、

御領之村々

朱色

宮・堂上領之村々

薄色

諸侯領之村々

白

中下大夫・上士領之村々

青

社寺領之村々

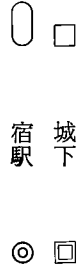
黄

府県

城下

村々

宿駅



関門 卍 社寺 ○

古城跡 凸

山 青 海湖沼川 浅黄

郡分 黒筋 往来 朱筋

右之通、国図美濃紙裏打ニ認、夫々色合、合紋ヲ以テ
分明取調、早々可差出候事、

一〇五 諸街道往来印鑑云々届書

明治元年十二月(五日)

府県トモ、其管轄地内之寺院并万石以下之領地中ニ有
之候寺院等、是迄諸街道往来之節、各寺之印鑑ヲ以致
通行候得共、往々紛敷儀モ有之ニ付、以後総テ最寄之
府県ニ於テ、往来之趣意聞届、印鑑相渡可為致通行候
事、

但各藩領地内ニ有之寺院ハ、前頭之通り其藩ニテ可
取扱事、

一〇六 親王方九門内乗馬通行被免達書

明治元年十二月〔八日〕

親王方、九門内乘馬通行、当分被 免候事、

一〇七 三等官以上并權弁事九門内乘馬被免違書

当分三等官以上并權弁事、九門内騎馬乘輿之儀ハ、至急之御用モ有之被差許候儀ニ付、宮・堂上・諸侯等ニ行逢候節、不及下馬下乘旨、被 仰出候事、

十二月〔八日〕

一〇八 京都府へ沙汰書

明治元年十二月

京都府

農工商ニテ、朝廷御用并宮・堂上、諸侯及社寺之用達等相働候者、苗字ヲ称シ、帯刀ヲ致、或ハ家来ト相成居候テ、民籍ニ混入、条理不相立儀、且有名無実之職務等、御廢止及其他建議条件、夫々御採用相成候ニ付、御取調之上御所置可被 仰出、且宮・堂上・府藩県へモ御布令相成候間、此段可相心得旨、 御沙汰候

事、

一〇九 公議所開設ノ沙汰書

明治元年十二月〔六日〕

万民ヲ保全シ、永世不朽ノ皇基ヲ確定スルハ、固ヨリ万機之政令、公論ニ出ルニアリテ、即御誓文ノ大本ニ候、依テ当夏議政・行政ノ御制度相立、各府藩県ヨリ微貢士ノ法、御設ニ相成候儀、即 御政体之通ニ候、然ル処春來兵禍引続候処ヨリ、御誓文之御趣意、或ハ未タ周達セサルモ有之候処、当今追々四方鎮定、弥前条之通広會議ヲ興シ、万機公論ニ決スヘシトノ御趣意ヲ以、今般改テ被 仰出、東京旧姫路邸ヲ以、当分公議所ト御定ニ相成、來春ヨリ開議致候様被 仰出候間、各彼我之私見ヲ去リ、公明正大之國典確立之所ニ熟議ヲ遂ケ、御誓文之御趣意ニ貫徹致候様、御沙汰候事、

但開議期日・御規則等ハ、追テ 御沙汰可有之候事、
諸藩公議人

別紙之通、被 仰出候ニ付、当年之儀ハ御暇下賜候間、

勝手次第帰国可致候、尤来正月中、無遅滞東京へ可罷

十二月

出候事、

世襲士族

諸藩公議人過日早々、東下可致旨相達候処、於東京別

有戦功

紙之通被 仰出候ニ付テハ、来正月中罷下候様可致候、

元帰順正気隊

尤未タ不差出藩々モ同様相心得、正月中屹度差出可申

元正気隊

候事、

元磅礴隊

元集義隊

一一〇 佐竹中將へ沙汰書

昇 転 隊

元山同心

明治元年十二月

元宿持雑使

佐竹中將(義光)

終身祿

元農同心

無戦功

先般其藩邸へ匿名之投書有之、其文中之妄誕素ヨリ論

元正気隊

スルニ足ラス、右ニ付詰合家来之者、答書之次第名分

元帰順正気隊

大義ヲ明ニシ、条理弁シ邪説ヲ排付候事、全ク其方兼

元磅礴隊

々教導行届、藩論一定之儀殊ニ神妙之事ニ候、猶此上

元三番集義隊

拡充之力ヲ以テ、隣並之諸藩ヲ鼓舞シ、東奥藩屏之標

元愛知隊

準トモ相成候様、益勉励可有之旨、御沙汰候事、

元精銳隊

一一一 世襲士族

元南郡隊

元 忠 烈 隊

元 北 地 隊

勤 統 抱 替 雜 使

抱 替 雜 使

正 月 元 日 二 日 七 日 八 日

七 月 十 四 日

八 月 十 五 日

十 一 月 中 一 日 是 八 年 毎 二 違 フ ヘ シ、

十 二 月 三 十 日 合 日 數 八 日

一 二 佛・米・葡・魯・瑞・丁・白・李 各 國 岡 士 外 國

管 事 役 所 司 長 ニ 贈 礼 書

明 治 元 年 十 二 月

於 長 崎 千 八 百 六 十 九 年 第 二 月 廿 一 日 外 國 管 事 役 所

司 長 ニ 呈 ス、

一 外 國 人 居 留 地 内 ニ テ、百 子 砲 ヲ 燒 放 ス ル 一 件 ニ 付、此
程 足 下 土 投 セ シ 制 禁 書 ノ 内 ヲ、各 國 岡 士 ナ ル 下 名 ノ、我
改 正 シ 度 旨 ヲ 陳 述 セ シ、我 等 連 名 書 翰 ノ 報 答 ト シ テ 送
ラ レ シ、正 月 八 日 附 轉 翰 ヲ、我 レ 等 落 手 セ リ、

一 当 月 二 十 日、我 等 集 會 シ テ 此 事 件 ヲ 精 密 ニ 議 定 シ タ ル
ニ 因 リ、我 等 今 足 下 へ 告 知 ス ル ハ、右 居 留 地 内 ニ 住 ス
ル 支 那 人 共 へ、彼 等 ノ 年 々 大 祝 日 ニ 其 砲 ヲ 燒 放 ス ル ヲ
免 許 ス ル コ ト ニ 同 意 ス、尤 其 日 ハ 朝 第 十 字 ヲ ヲ リ、夕 第
六 時 ヲ 限 リ ト ス、其 祝 日 ハ 左 ノ 如 シ、

一 如 此 免 許 ヲ 与 ヘ ル 上 ハ、我 等 國 民 ノ 所 持 物 及 ヒ 命 ニ 拘
ハ ル 危 難 ヲ 増 ニ 非 ス、都 テ 其 危 難 ヲ 著 シ ク 減 ス ベ シ、
其 故 ハ 是 迄 昼 夜 ヲ 別 タ ズ、危 急 ノ 患 ア リ シ ヲ、今 反 シ
テ 日 數 時 限 ヲ 縮 メ テ、此 危 急 ヲ 減 ス レ ハ 也、左 ス レ ハ
危 急 ノ 予 防 最 整 フ ヘ シ、

一 百 子 砲 ヲ 昼 丈 ケ ト 取 極 メ タ ル 上 ハ、最 初 設 ケ シ 禁 制 ノ
主 意 ニ 違 フ ノ 煩 ハ ナ カ ル ベ シ、其 禁 制 ハ 普 通 ノ 規 則 ト
シ テ 取 設 ケ タ リ、且 祝 日 ニ 限 ル ト ノ 存 意 ナ ラ ス、因 テ
國 々 ニ 於 テ モ、ハ ツ カ ニ 此 ノ 禁 ヲ 弛 ル メ リ、

一 居 留 地 ニ 干 係 ス ル 如 斯 事 件 等 ハ、我 等 ニ テ 決 議 ス ル 所
ニ シ テ、日 本 全 權 ニ 係 ル 事 ニ 非 ザ レ バ、如 此 事 件 ハ 日
本 政 府 ノ 引 請 ニ 非 ザ ル ベ シ、

一 我 等 今 足 下 ニ 懇 願 ス ル ハ、右 禁 制 ノ 改 正 ヲ 在 住 ノ 支 那
人 共 へ 布 告 シ 給 ハ ル ベ シ、將 又 免 許 セ サ ル 我 等 周 時 周
日、其 砲 ヲ 燒 放 ス ル 時 ハ 洋 銀 十 枚 ノ 過 料 ヲ 取 立 給 ハ ル

ヘシ、

一総テ如此過料ハ、地所規則ニ基キ、地所干係ノ者ヘ属ス、謹言、

佛・米・葡

魯・蘭・瑞 各岡士連名

丁・白・李

一三三 イタリア船ニ於テ人夫死去ノ裁判

明治元年十二月

於イタリア岡士館千八百六十九年第一月廿日

ハワナヨリ当港ヘ向ケ、イタリア船航海中、支那人船客ノ死去一件ニ付テハ、余イタリア岡士ノ職ヲ以、右根元ヲ証明スルノ職務タルヲ決定セリ、依之本月二十七日・二十八日左人名ノ助力ヲ以テ、公議裁判ヲ遂タリ、

イスパニア岡士

セフルドントーマスヲルチユモ

医師

ドツブリユーエスアダムス

船中ノ書類・食物・薬種ノ目錄并ニ其品、日毎ノ分配日記ヲ一々巨細ニ取調ヘ、且左ノ船長其外モ悉ク吟味セシニ、彼等左ニ証拠ヲ顕シタリ、

船長

レーモンドシユルネタ

一等士官

ウエナンシヨエラングリユ

二等士官

シユリヤンデシユルネタ

船借請人

アゴヌチンラピーダラ

船客

ロク

同

トリビオ

医師

ジヨセカマコ

右申立

一右船ハ支那人兩人ニテ、支那船客運送ノタメ借請ケタリ、

一 船中ニハ薪水ノミヲ用達セリ、

一 食物・薬種其外入用品ハ、借請人ニテ設ケタリ、

一 サレドモ船主ニテ大量ノ西洋薬種ヲ貯ヘ置ケリ、

一 食物ノ数ハ、船中入用丈ケヲ記シ、其目錄ヲ船長ヨリ

借請人ニ渡セリ、

一 右食物船積ノ節、証拠ノタメ船長自分改メタ、尤右ハ

航海中同人ノ任ニシテ、逸々同人又ハ士官等ノ改ノ上、

正当ニ分配セリ、

一 食物ハ潤沢ニシテ、良品ナリシ、

一 此船客ノ内数人老年ノ人アリテ、衰弱ナル軀体ナリシ

ハ明白ナリ、其人々ハ数年暖国ニ馴レ、今彼寒国ニ居

所ヲ移スニ、甚不足ノ衣類ヲ具備シタリ、彼等ハ壮年

ヲ過テ、諸業ニ普通スルノ後ハ、其身ヲ怠惰ニ委ネテ

諸務ヲ聞ス、只阿片ヲ喫スルヲ以テ業トセリ、彼等乗

船ヨリ凡二ヶ月ヲ経テ、彼ノ船客ニ判然タル壞血病ヲ

発シタリ、然ルニ支那医師等ノ内、一人モ其療法ヲ知

ラス、病人ハ直ニ死セリ、此薬剤ヲ心得シ支那人九人

有シト雖、内七人ハ最初ノ死亡タリ、船長・士官等ハ

彼病苦ノ者等ニ或ハ薬ヲ給シ、或ハ種々ノ看病ヲナシ、

快氣セシメント只管尽力ヲナシタリ、

右イタリヤ船ハ清潔ニシテ、諸事整ヒ、好ク清氣ヲ通
ハス也、

決断

余慎テ此証拠ヲ斟酌シテ、是ヲ決断スルニ、イタリヤ
号ノ船主・船長又士官等ニハ必罪ナルベシ、余カ決
断ハ則是ナリ、彼等去死スル所以ハ、必身ノ衰弱ニ帰
スベシ、彼等乗船ノ時人数病身ニシテ且衰へ、暖国ヨ
リ寒国ニ居スノ氣力ナク、加之彼等ノ身ヲシテ、全ク
懶惰ナル生活ニ任セシメシ根元ニ帰スル処ナリ、

イタリヤ岡士助勤

ドツブリユエスウキツキ

余等前書ノ決断ニ同意ス、

イスパニア岡士

チーオルチユノ

港内医師兼水夫病院外科

ドツブリユエスアダムス

一一四 長崎府外国局司長掲示

明治元年(1868)

明治元年十二月

昨年七月廿三日、横浜ヨリ入港セシホルトガル国ノ軍艦サラバンデイラ号乗組ノ船將横浜出帆ノ節、同所運上所ノ士官ヨリ倚托ヲ請ケ、長崎運上所ノ士官アテニ一封ノ銀子ヲ送レル由ニテ、其一枚ヲ、全国岡士ゼーロウレイロ氏ヨリ外国局諸司長ニ送レリ、是ヲ開封セシニ、銀錢七枚ト横濱西洋両替屋ノ手形ニテ銀錢十枚トアリ、然ルニ名宛ノ姓名是ナキ故、請取ヘキ人ヲ問ヒケレトモ、誰アツテ知ルモノナシ、因テ其旨ヲ彼岡士ニ通達ノ上、当時其俾外国局ニ現ニ留置ケリ、因テ是ヲ請取ヘキ証拠ヲ持タル人アラハ、下文ノ処ヘ尋ネ来ルベシ、

辰二月

長崎府外国局司長

一一五 外国船ヨリ出入品高目録

明治元年十二月

去辰年中外国船ヨリ出入品高目録、左ニ掲載ス、尤長キヲ以テ四五度ニ割り出ス也、

正月中輸出

菓種 二千百十二丸

茶 一万千六百四十二箱

干物 五千五百七十五丸

鉄 六百梱

石炭 采炭廠カ 二百八万五千斤ト三百十三ト

焼物 五十五箱

蠟 六百七十二箱

諸品 二百二丸

荒物 四百一梱

塗器 九十梱

板 一万八千四百四十八枚

煙草 七百八十四丸

樟腦 百十梱

合代金凡十八万七千二百九十三兩余

正月中輸入

菓種 千三百八十梱

反物 五百五十二箱

油 三百六十八罐

武器 千三百三十九箱

砂糖 五百九十三丸

荒物 四百六十箱

酒 千八百廿二箱

干物 五十七丸

細物 五百八十九箱

石炭 二トナ

金物類 六百一十一箱

陶器 七箱

諸品 廿七箱

合代金凡廿四万六千九百四十六兩余

二月中輸出

諸品 二百五箱

蠟 三千三百七十一箱

塗物 二百三十九箱

石炭・木炭 百廿一万千四百斤・三百四十二噸

茶 一万千四百九十九箱

陶器 八十箱

干物 一万七百十三丸

菓種 三千二百六十三丸

荒物 千九百九十六箱ト一万斤

板 一万九千七百廿枚

煙草 六十五丸

合代金凡廿二万四千七百廿兩余

二月中輸入

細物 七百四十二箱

油 八十三罐

砂糖 二千五百廿四丸

洋書籍并紙 三十五箱

武器 三千三百四十箱

酒 千九十四箱

菓種 三百七十四丸

反物 三百四箱

金物類 二千六百五十二箱

荒物 三百五十七箱ト五十斤

諸品 四十五箱

陶器 三十三箱

合代金凡六十万九千九百七十五兩余

明治元年(1868)

辰三月中輸出品

石炭并木炭 三千八十三トソ

小間物 二十三梱

茶 二千二百三十五丸

菓種 二千三百五丸

蠟 千四十六梱

乾物 六千六百六十九丸

荒物 百二箱

諸品 二百六十一丸

陶器 十二梱

塗物 十二箱

板 四万四千五百六十四枚

代金凡十九万六千四百四十兩余

三月中輸入品

反物 三百十九丸

荒物 八百十六梱

砂糖 四千九百廿四丸

武器 二千四十三箱

菓種 二千二百二箱

細物 三百六十三箱

酒 十三箱

諸品 三百一十一箱

金物 五千三百七十五梱

陶器 十箱

油 二百廿九罐

代金凡四十七万二千八百八十五兩余

四月中輸出品

諸品 七百三十六丸

細物 九箱

塗器 十三箱

干物 七千五百四十五丸

陶器 五十八丸

菓種 四千九百四十九丸

鉄并銅鋼類 六万四十斤

荒物 千五百十梱

茶 六千三百廿九丸

蠟 二千四百五十七箱

石炭并木炭 千丸卜四十万斤・二千七百七十卜

ン半

板 十万千二百四十一枚

代金凡三十万四千五百一十一兩余

四月中輸入品

諸品 四千六百廿五^マ五^マ楮

荒物 八千六十八楮

反物 三百五十八箱

細物 三百三十八箱

菓種 六百八十九丸

武器 千六百四十七箱

酒 千七百六十箱

油 二百罐

陶器 十六箱

砂糖 二千五百三十六丸

代金凡十七万四千十二兩余

一一六 招魂祭施行ニツキ諸追悼和歌

明治元年十二月

楠公社ノ側ニ、奥羽戦没ノ兵士ノ為ニ、官ヨリ招魂場

ヲ設立サセラレ、祭典厚ク執行ハレ、猶知府殿ヲ始メ

此地ノ歌人詩客追悼ノ為ニ各詩歌ヲ詠シ、出シ、ヲ左

ニ著ハシテ、同志ノ人ニ示スモノナリ、

知府事澤殿

くたけても猶いさきよき光りをハ

千歳にのこす玉の浦人

又奥羽出張ノ人々カヘリタル時ノ

御詠歌

古さとに帰るにしきの袖しるし

いさをハしるし後の世までに

奥羽ノエタチニイノチシニケル人ヲ

弔ラヒテヨメル歌

馬田清夢大江永成

大君に尽す心は今もなほ

菊のした水なかれをそくむ

藤村庸平藤原光鎮

うちしきるひやの煙の下消に

思ひきゑけん玉そかなしき

面野川水の泡とし消さらハ

雲井に名をはいかて知られむ

森田市太郎物部速雄

すめらへに身をハ尽して御軍に

あたなふあたをうちきためつゝ

神崎與市源年成

潔きよく身をハ沈めて玉川の

玉とくたけし人しともしも

山縣桑源彝夫

君のため身をすつれこそ後の世に

語りつくへき名ハはてぬめれ

益良男はかくそ死なましをくつきを

しるくしめたてまつらす見れハ

白津虎之進藤原埼玉守

なになけき何をしからむすめらきの

御楯となりて尽す命は

岩崎の川浪たかくたてゝけり

たけき其名をかくハしき名を

吉川豊之助渡邊澱

底ふかく身を沈めすハ玉川の

浪の音高く名を立めやハ

岩崎の荒き波間にしつみても

たけき其名ハくたけさりけり

深川治兵衛藤原千船

名取川かハ瀬にうかふうたかたの

消てかひある世にこそありけれ

ふし糸の短かき命すてゝこそ

永き世までの名を残しけれ

伊東祐平藤原知之

早瀬川岩根の水にかつきつゝ

益良武男の名を流しける

すめろきの御楯となりて消し身ハ

大御代長き守りともなれ

江上雅之助源浄香

白河の水のミなわと消てこそ

岩浪高き名はたちにつれ

鈴木辰太郎物部御楯

かくり世の大神たちもしかハかり

まめなる人をめてさらめやハ

雄々しくも君の御楯と身をこして

立てし其名ハ世に尽めやも

篠澤松之助橋百枝

すめらきに命またしていかしくも

つかえまつりし益良雄の友

仇ともをむけ平らけし大丈夫の

心の玉の光り清しも

鈴木藤次郎源重音

片岡にしつまるミたま大君に

猶もつかへて世を守らなむ

つるきたちさやかにときし心より

立てし武雄かいさをとそ思ふ

坂本藤五郎紀秋縮稲

をくつきに向てハかなしいわけなき

心に事ハ思ひわかねと

あらミたま八千代もこゝにしつまりて

誠の道に世を守らなむ

的場竹津徹

あらぬ世に住む身と終になりぬとも

すめら御軍のつらをはなるな

諸熊祐之助源好足

君かため立てし功ハ面野川

瀬の音高く世にひゞくらし

大丈夫ハ命をしくもをもほへて

あつき心を君に尽しつ

道幸小十郎源敦定

後の世に音を残してきへにけり

ミちのく山のあられ白玉

三田村嘉十郎菅原本信

散る花と身ハあまひてもかくハしき

其名ハ千代にかをらさらめや

死してこそあらわれにけれ命をハ

かけてつかへし人の功ハ

本木昌造源永久

なき跡のかたミとや見む松にふく

ひゞきも高き山の春かせ

青木休七郎伴光雄

白たまと身をハくたきてあたひなき

光りを後ノ世に残しつゝ

和田太兵衛平守節

花とちるいのちハまこと惜れと

大和島根二名ハにほひつゝ

布谷百助藤原正知

をくの海の浪より高き名をたてゝ

かへりこぬ身となるそかなしき

品川藤十郎平煥

身を捨てゝ君かミためのでの山

ゆくなる道もやすけからまし

島田茂左衛門源明高

鳥の海の山より高し御軍に

いむかふあたをうちしいさをハ

楠の神もあわれとをほすらし

同じミさをに捨しいのちを

河上七次郎藤原信近

マヽ(かくハしきカ)
かハしき名ハ世の中に陸奥の

ハてにも残す玉の浦人

河上要太郎藤原昌章

玉の浦の名をミかきけり陸奥の

國ことむけし人のいさをに

世の中に高くあけたる武士の

名ハミちのくの山も及はす

神大和宇津見幸雄

マヽ
たふれらをきりてハふりてミかとへに

たてし功ハかしこきろかも

島谷市太郎源道大

もろともに死ぬへかりしをなからへて

跡とふ身ともなりにけるかな

たけき名を千代に流してミちのくの

玉川ノ瀬にかはねざらしつ

汾陽次郎右衛門郭盛徳

なとり川たけき其名ハ得てしかと

かへらぬ水となるそかなしき

跡しとふ益良健男の利こゝろに

神も昔やをもひ出らむ

坂田中原諸遠

をもの川水泡ときへし人ノ名ハ

流れての世に何かつくへき

登招魂場甲奥羽戦没戦士歌

坂本朝次紀秋郷

さくはなハ ちれハ匂ハす もみち葉も

落てハてらす 益良雄の 猛き心ハ

玉の緒の たへてもたへす たけをらの

かくハしき名ハ 白露の きへてもきへす

たへもせず きゆへくもあらぬ其心

其名をもへハ 散てのち いよ／＼にほふ春山の

花にし有けり うつろひて にほひそはれる

秋山の もミち葉なせり も／＼ちとせ

やちとせあせし たけきその 益良武男の

かくハしき名ハ

散はてし後にのこれるにほひこそ

深きこゝとのにほひ成けれ

しるしにとたてし其石ますら男の

かゝミともみむミかけ其石

マタ

はくたちの ミちのおく 手束弓 出羽の国の

あたともを うちてきたためて 天皇の 御世し

つめはと 取かけて よろふよろひの

高紐の たかきいさをを 国まねく たてむ心

に 打越し 国見のたむけ こゝしきを

こゝしともせず さかしきを さかしともせず

さきなるハ しりくをたすけ しりへゆハ

さきをたすけて とこゝろの すゝめるまゝに

大雪の ミたれくる矢のそのなかに しぬきハけい

り あられなし ちりかふ玉の その中に

さけすわけいり たふれらを とりてころして

鳥海山 高き功を 思ふこと たつるきハミに

岩崎の 浪とくたけ 玉川の たまとくたけて

御軍に 身をハつくしゝ 武男等の 猛き其名ハ

くたの声 遙けく聞へ うつつゝミ 遠くひゝき

て 国もせに たてしその名ハ はてなからま

し

みちのくハ国のはてなりしかハあれと

たてし其名のはてあらめやも

中島源廣行

大直日 袖のちはひに まかつ日の 世のまゝ

ことも 朝雪の はるゝか如く 夕霧の きゆ

るか如く 天の下 さやかになりて かし原の

むかしき御世の いにしへに 立こそかへれ

そこをしも あやにかしこミ 今よりハ 長閑

けからむと 人皆の よろこふハしに まかつ

ひい 残りや居にし まか神い さらすやあり
 し 陸奥の国のおちこち さハへなす さわき
 をとなひ 蛭なす ミたれかゝやき み民らを
 なやましつるを かしこきや 我大君の おと
 つてり ミいかりまして いなかふし しこの
 やつこを すむやけく 打きためよと 国々に
 おほせたまへハ もゝちゝの いくさあともひ
 千万の 軍ひきひて 鳴鳥の いきもつきあへ
 す 馬なへて いてたつまにま 舟なへて
 こきいつるまにま 西の海の 火ノ道のくち
 玉の浦を しらせる君も 軍人 あまたとゝの
 へたちまちに 出したまへハ雄々しくも
 いさミたけひて のとにやハ 命しすへき
 玉の緒の つゝかむかきり 梓弓 引ハかへさ
 し 我いのち またけぬかきり 古里を
 かへり見せしと いむかひて たゝかひぬれハ
 天地の 袖もうつなひ いなしこめ しこのく
 ふれらすゝミかね しそきとかねて せむすへの
 たときをしらに かふとぬき 太刀の緒ときて
 こゝとゝに まつろひはてぬ 御軍の たけき

いさおを ねきたまひ いたハリまして 野に
 山に 命すてゝし 大丈夫の 玉ををきつゝ
 玉の浦の 小島の里の 大楠の 社のあたり
 かき清め へらひ清めて万代に いつきまつらす
 おほやけの 深きめくミハ たふときろかも
 返歌
 百たらず八十くまでにハかくるとも
 なほ御軍をたすけまつろへ
 服部清八郎邦照
 大君の ミことかしこミ 御軍に 出たつ人ら文
 月の 十日あまりニ 長崎の 湊とよもし
 大船の ともつなときて 浪あらき 出羽の海
 に 時の間に いこき渡りて 御軍の 君に
 したかひ ミおしへの ことのまにく 峰を
 こへ 川瀬を渡り いハむなる 仇に向ひて
 うちあふ 大筒小筒 其音ハ いかつちのこと
 其玉ハ あられなすなる そかなかに たけひ
 わけいり 雄々しくも 命すてけり 猛くも
 身をハすてけり 益良雄と世にうまれてハ 君の

ため 国のミために潔きよく 捨るそまこと
身をも命も

返歌

君のためいのち尽すハ益良男の

常にし有けり道にし有けり

池原大所大蔵香稚

くぬかの 道のハてに ちはやふる 人をやは
すと まつろはす 国おさめよと 御軍を
めさけ給ひて ミことゝち つかハす時に
大御世の 長崎人い 大丈夫の 心振起し
みかとへに いむかふやつこ ことゝくに
きたためてましと 家わすれ 身をもわすれて
めつやつこ かへりミもせず はろかなる
道にいてたち 干さとの 外にさかりて 思ふ
こと 事なしおへて いひしこと あたをむけ
て 雄々しくも 帰るか中に かへらぬハ
いかにと問へハ 戦の場に向ひて たちはしり
たけひきはひて くだつゝミ 音のまかひに
火筒の ひゝきの中に 月日の 御旗のもとに

ふたつなき 命をへつと かたらふハ かなし
からすや しかハあれと 国のミため 天皇の
御楯となりて 万世に かたりつくへき 名ハ
つきめやも

返歌

大きミの御楯となりて雄々しくも

いのちしにける益良男あハれ

三田村比佐吉管原本保(管カ)

かしこくも 皇御軍に いむあひて あたなふ
やつこ ことゝくに うちしつめむと 玉の浦
ゆ 船こき出てゝ 東なる はろけき国の
山によち 水をわたりて はけしくも 戦かふ
はしに 朝霜と 消にし人の 雄々しくも
立てし其名ハ 万代に かたりもつを 後の世
に いひもつかまし 天皇の 御楯となりて
立てし其名ハ
返歌
万代の後もくちせしすめろきの
御楯となりて立てし其名ハ

明治元年(1868)

カク人々ノヲアツメタルニ、井上判事ノモアリト聞

テ、始メニ出スヘキヲ知ラサリシカ、ヲシクテコ、

ニ出ス、

判事井上氏

陸奥の露と消ても玉の浦の

光りハ世々につきせさらまし

一一七 海舟日記

明治元年十二月十三日

岩輔相之御内人名和緩来訪、英・佛・蘭之三ヶ国格外

中立ヲ解ク御談、承引周旋之旨、書翰御内示、且英・

佛二国之軍艦箱館ニ在ル者ニ介シ、脱艦之徒書翰差出、

御受取不相成トイヘトモ、暫時御借受之旨御内示有之、

欄外岩殿下之命アリ、内外之事共御上京後ハ、三條

殿へ建言可致御内告有之、

十五日

静閑院宮様御上京ニ付テハ、万事 朝廷ニテ御賄被成

下、且天璋院様へ、三千両御送り被下、至厚之御趣意

岩倉殿深情ニ出ツ、

十八日

参朝、三條殿ヨリ脱走者等、英・佛ニ頼ミ差出候歎願

書御差戻、且岩倉殿ヨリ西国公使へ、右ニ付被遣候御

書翰写、為心得御渡、猶遠・三替地御渡之事、懇々被

仰下、

一一八 大久保利通日記

明治元年十二月廿一日

一六字過当所山(石部カ) 御発聲、草津へ十一字御着、御休、

三字大津 御着聲、御泊於御本陣、彼是勤仕イタシ

候趣ヲ以、

天顔拜被 仰付候、中山卿御取伝也、

廿二日

一当所大五字 御発聲、粟田御殿へ 御休ニテ、十一

字比目出度 御着京、無程御留主供奉ノ三等官以上

天顔拜被 仰付、二字比退散、

一今晚新納嘉藤二子・海江田士・岸良士・鎌田士等入来、

廿三日

一今日供奉之面々休日被 仰出不参、今日岩下士・新納

士・海江田士・鎌田士亦入来、

廿四日

一朝長藩小野石齋士入来、十二字参 朝、今日ハ御所出 御ニテ、百官被為召、東京西京大事件ノ条言上相成候、大隈八太郎ヨリ邪蘇教事件申上候、

一來ル廿八日 御婚姻ノ大礼被為行、立后ノ御決定被為在候、

一岩輔相卿ヨリ依命、木戸へ一封差出候、七字退

朝イタシ候、

一二九 東京横濱ノ新聞抄

明治元年十二月

去辰十月下旬、徳川亀之助殿出府、十一月初旬頃三位

中将ニ任官、其後帰国、是ヨリ先駿・遠・参一円并清

水領十萬石、都合八十萬石ヲ賜フヨシ、

十一月四日、佛国馱船ヨリ徳川民部〔殿政、水戸藩主〕大輔殿帰朝、右護

送トシテ佛国士官并兵隊若干乗組来ル、即日民部殿御

上陸、直ニ出府、其後水戸家相統ノ風聞アレトモ、未

詳、同月中旬頃、東京中ノ諸人へ、御酒肴ヲ賜フ、

兩日ノ間府下ノ諸工商休業、恩賜ノ御肴ヲ頂戴ス、統テ笠鉦ナリ物等ヲ出シ、満街雜沓諸人万才ヲ祝セシ由、

同月十九日、鉄砲洲御開市、新潟モ同日ニ御開港、横濱居留ノ外国人追々同所へ往来ス、依テ兩所ノ間ニ馬

車便迄始リ、車料一人前二円金計リノ由、

會津父子備前ト久留米へ御預ケ、知行被 召上、仙臺

ハ減シテ廿八萬石、米澤十四萬石余、庄内十二萬石、

二本松五萬石、其外奥羽越ノ諸侯尽ク削封、林昌之助〔忠業、諸藩藩主〕

一橋大納殿へ御預ケノ由、出羽二州ニ分ル、以来羽前・

羽後ト相唱候由、奥州ハ分ツテ五州トナル、即チ陸前・

陸中・陸奥・岩代・岩城ナリ、

吉田橋并ニ六郷ノ渡へ鉄橋相架候トノコト、御雇建築

方頻ニ工夫中ナリ、

御東幸以來府下物情旧況ニ復シ、逐次繁昌、吉原遊女

屋ノ内一兩所築地へ転移近々開店、赤坂辺ニモ遊里ヲ

開キ候由、

十二月四日、当春脱走ノ松本良順・飯村左仲、蘭人ス

ネル宅ニテ官ノ為メ捕ハレ、即日東京府へ送ラレ、何

等ノ故ナルヤ未詳、其後東京ノ大病院一同ヨリ歎願書

差出候ヨシ、大病院ハ下谷藤堂上屋鋪ナリ、

二一〇 道島家記

明治元年

一六番隊ト四番隊カニノ丸御子様御名前ニテ、御酒被下

有之候節、御家老ヨリ隊長其外何方モ御子様御酌、其

外兵士等ハ御流頂戴可被仰付旨、被申渡候処、畏リ候

迎席ニ付、吟味イタシ候処、我々共ト兵士立分方可有

之ハイカン、兵士有リトコソ、我レモ有トコソ、

兵士一樣ニ可被下勿論ノ事ナリ、勿論御子様ト云、二

丸ノ御子様ナラン、此人ノ御名前ニテ御酒頂戴モ不思

議ナリ、何分可被尋トテ、又々御家老ヘ立向ヒ、右之

様申出候処、是ハ二丸ノ思召ニテ候ヨシ被下候処、左

様ナラハヨロシキトテ、サテ罷帰トテ、直ニ皆々立帰

候ヨシ、此内三拾人計残り、我々ハタマタマノ事ニ付、

御酒ヲ可頂迎、殊之外酒ヲ呑、ナンコ杯イタシ、歌ナ

ト謡ヒ、大騒ニテ金子杯頂戴イタシ、罷帰候ヨシ承マ

、記置ナリ、

十二月十八日承候事、

明治元年(1868)

一又或時、立馬場角ノ北郷浪江トノ所へ、拾人計リ差越

候処、浪江トノハ留主、妻ノ被居候テ、ヨウコソ御出

被成候、必ス暫時ハ御休ミ可被成ト、直ニ酒杯手当イ

タシ、吸物モ出候処、箸ハ不打候テ被出候由、左候テ

銘々大盃ヲ居候、妻トノ亭主振リニ、私ニモタリ止可致

時刻ニテ、其考ニテ御座候間、サ可被召上トテ、吸物

ハ手抓ニテ候由、左候テ其大盃ニマンマンツツキ、可

被召上、私可頂トテ一口ニ吞候テ、又被差返候、夫ヨ

リ銘々大盃ニテ進メ候処、忽ニ吞殺シ、一人二人退キ

候テ、忽チ引取候ヨシ、此北郷家ノ妻ハ、小林家ヨリ

被參候人ニテ、学者ナリ、洋学杯ハ余程片付被居、大

底ノ女ニテハ無之由、

一又高橋縫殿トノ所ヘモ差越候処、ヨウコソ御出被成候、

酒ハイカ程モ可相進、拙者心ニ不叶様ノ事ヲ被成候ハ

、其辺ニテハ不差置ト脇差ヲヒカヘ、キツトシテ被

居候処、是モスコソ罷帰候ヨシ、

二二一 舊邦秘録慶應三年

慶應三年ナラン

十二月

御船翔鳳丸品川沖へ出府、乗舟トシテ廻船イタシ候処、
幕船行掛直ニ砲発、賀奈川沖迄付越相引ニ相別レ、少
々相痛ミ修甫相成、兵庫迄廻船ニ候事、

二二ノ二
慶應三年ナラン

十二月

同廿五日、江戸芝御屋舗へ幕人共踏入狼藉イタシ、幼
少之者共ニ至ル迄殺害、定府共ニハ其已前陸地出立、
跡残り人数戦争ニ候半トノ事、

但

櫻田・小山御屋敷同断之由、相聞得候事、

一三三 忠義公ノ勤功ヲ賞シ、御劍一振ヲ賜フ御

沙汰書

十二月

薩摩少将へ

其藩事積年抱勤

王之志勤勞不少候処、応 召登京 朝議之旨、速ニ奉
行彼是周旋、遂ニ使 王道復前古、殊ニハ去三日逆賊

突然北上之砌、於伏見表防禦、其後連戦処々ニ追撃、
軍威ノ盛ナルコト実ニ前古ニ不愧也、而テ遂ニ巨魁慶
喜落胆、捨浪華城遁去之趣達 宸聽、
天感不斜候、愈以励兵勢屠其巢穴、可耀
皇軍稜威於内外候、依之 御劍一振即今恩賞迄ニ下賜
候旨、 御沙汰候事、

一三三 薩藩戦死者へ金五百両ヲ賜フ沙汰書

十二月

薩藩

戦死人へ

今度就兵革、其藩士之輩殉国戦死者共、具ニ達
天聴被為惱 叡情候条不淺、宜厚其葬礼、恤其新眷、
慰忠魂于九泉之下、依之 營弁之賞賜金シ、五百両候、
藩主ヨリ可頒与之旨、
御沙汰候事、

但

設一社、其忠魂永可被命祭祀 思召候事、

一二四 無名書翰

今日定式到着、江戸表ニハ色々ノ事モ有之由、已ニ先頃モ申參候、水府浪人横濱之様打出、其ヨリ江戸異國人之旅宿打入ベク模様ニテ、数頭之大小名へ固メ被仰付候由、又小金ヶ原ニモ八百人程罷出候噂モ有之候由、旁大混雜之模様ニ御座候、

一 今日ハ八木詰所ニ參リ、且長崎之向々モ參候間、委細相分申候、先鉄之蒸氣船水平三拾七間、惣積高百九十万斤余ノヨシ、現積事ハ百五六十萬斤、馬力ハ百五十馬力、充分ノ力ハ三百馬力ノヨシ、是迄長崎入津之船ニハ、是レ程之船ハ二艘程參候ヨシ、四年ニ相成候迄ニテ、未新艘御座候ヨシ、蘭人ニハ我國ノ船外ハ至テイヤシメ候由候ヘトモ、此節ノ御船ニハ何モ申分無之、至極宜トノ事ニ御座候由、此儀ハ誠ニ才助・清兵衛大ハマリニシテ、ケ程ノ都合ニ成立候半、尤船主方ヨリ二割、此方ヨリ一割五歩之運上銀有之ヨシ候へ共、其ニモ不及様ニ相働キ候由、代銀モ日本金五萬千二百五十兩之ヨシ、旁細事承候へ共、何分紙上ニ尽シカタク、面上申殘候、尚ホ明日中加治木等ニモ、出崎ノ賦リニ

御座候ヨシ、二月末三月之初ニハ、前之濱へ乘廻之賦リニ御座候ヨシ、先ツハ此旨早々申上置候、頓首、

極月二十日

一二五 薩藩へ伏見表兼勤巡邏達書

〔頭註米〕(慶応三年カ)

薩州

伏見表今度御變革、彼是多端之処ニ乘シ、狼藉之者横行、人心不安趣相聞得候付、急度兼勤被仰付、尚又巡邏之儀、長州・土州・藝州同様被仰付候、為心得相達候事、

十二月廿二日

一二六 松平阿波守外九藩家臣言上書

先般大非常之御變革被仰出候儀ハ、既往之事柄一切被為捨、万事公平正大、衆議之所帰ヲ以一途之御政道相立、速ニ

神州治定之御鴻恩ヲ被為開候

叡慮之旨奉敬承候、実ニ雀躍堪不申、上下目テタク

御沙汰ヲ相待居候内、去ル九日ニ至俄ニ召之、列藩兵士戎服之俛参朝、就テハ何トナク闕下騒ケ敷、何分モ驚愕罷在候処、先帝以来御当職之二條殿下ヲ初、官家数十人除職之上、御門出入迄モ被差留、且將軍家モ頓ニ除職解官、削封モ可被仰出趣ニ相聞得、右ハ必定御譴責之御評議モ可有御座哉、其儀ハ難計相弁不申候得共、將軍家祖宗以来世襲之大權被差上、只管御自責ヲ以、

聖業ヲ被奉輔度トノ御趣意ハ、未々迄モ感賞仕候折柄、右様之御所置被為仕候テハ、更始御一新之御手初、他日如何様之御都合ニ成行可申哉、実ニ杞憂之至奉存候、依之仰願ハ、差寄 御所内外戎服等之儀至急被止、一剋モ人心鎮定之御沙汰相成、随テ摂政殿下ヲ初、御取扱之儀モ公平正大衆議之所帰ヲ以テ御施行有之、弥以御改革之御趣意、屹度相實候様被為在度、幾重ニモ奉懇願候、昨今形勢所謂百尺竿頭一步ヲ進之御時節ト奉存候間、重疊恐多奉存候得共、寸衷奉言上候、誠惶頓首百拜、

十二月十二日

(蜂須賀茂節)
松平阿波守内

蜂須賀信濃

(黒田齊憲)
松平美濃守内

久野四郎兵衛

(慶應)
細川越中守内

溝口孤雲

(慶應)
有馬中務大輔内

山村源大夫

(利剛)
南部美濃守内

西村久次郎

(盛寛)
立花飛驒守内

十時攝津

(長國)
丹羽左京大夫内

田辺市左衛門

(鍋島直大)
松平肥前守内

酒井平兵衛

(重正)
宗 對馬守内

扇 源左衛門

(直正)
溝口誠之助内

窪田平兵衛

二二七 尾張・越前上申書並ニ徳川家へノ達書

二二七ノ一
尾張・越前上申書

十二月

今般 御沙汰御座候、両事件之趣慶喜へ申聞候処、謹
テ承知仕候旨申出候、此段奉申上候、

尾張
越前

二二七ノ二(領註卷「慶応三年カ」)
十二月

徳川家江尾越ヲ以テ達書等左之通

大政御執行ニ付テハ、外夷事件於

朝廷御処置候ハ勿論、且重大急務之筋ニ付、此間中段
々御沙汰モ有之候得共、其廉モ未行、実ニ不可忽之次
第二付、別紙之通徳川内府へ被仰下候儀ハ、御確定候、
此段御沙汰候、併猶所存之趣モ候ハ、言上可有之候
事、

但

外国事務掛初夫々其人体不日可被置候付、是又心
得迄申入候事、

一政權返上被聞召候上ハ、外国交際之儀、於

朝廷条約御取鎮可被為在候儀当然候間、百事御治定之
上、猶御談判之品モ可有之筈、猶

王政ニ被為復御廉、御布令被遊度 思召ニ付、兵庫滯
留各国公使、京地へ御呼登相成候間、是迄手續キモ有
之事候得ハ、各国公使上京候様可申達

御沙汰候事、

但

来ル十日迄 上京候様被仰出候間、御受之御届早
々可申出候、

二二八 忠義公歳暮御下賜品云々達書

〔未〕
一忠義公御歳暮トシテ、御品頂戴ニ付、之ヲ達シ、併セ
テ祝儀ヲ申サシム、其達ニ曰ク

一御末広

一対

一御紙入

一対

一御煙草入

一対

右ハ旧臘廿七日、非蔵人口へ重臣御用ニ付島津主殿
罷出候処、弁事平松甲斐権介様ヨリ、歳暮ニ付、

〔久壽〕

太守様へ右之通拝領被 仰付候段、被 仰渡候旨、

御到来候、依之御一門方并諸大身分之外、月次御礼

罷在候面々、明後十一日四ツ時登城

太守様・中將様へ御祝儀、

〔頭註 下略、之ヲ調乙〕
外略ス

正月九日

〔島津忠鑑〕
備後